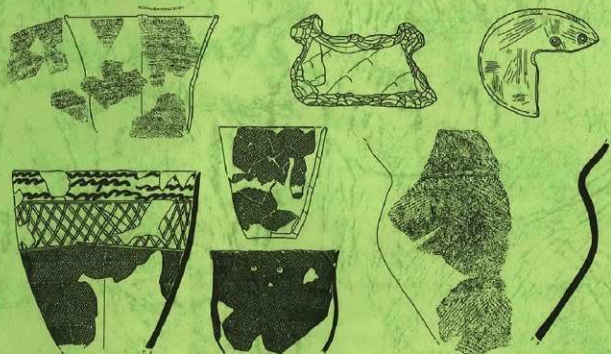


長野県小県郡真田町埋蔵文化財調査報告書第9集

よ っ か い ち い せ き

# 四日市遺跡III

——町立さなだ保育園建設に伴う発掘調査報告書——



1997・3

真 田 町  
真田町教育委員会

よ っ か い ち い せ き

# 四日市遺跡III

——町立さなだ保育園建設に伴う発掘調査報告書——



## ●位置と地勢

本州のほぼ中央に位置し、長野県の東北部にあって東部は群馬県に接し、北部は長野市、須坂市に……。西部は埴科郡坂城町に……。南部は、上田市と東部町に隣接しています。

広ぼう181,80km<sup>2</sup>で、東信地区では南佐久郡川上村、佐久市に次ぐ3番目に面積を有する町であります。

地形的にみて、山地で南部を除いては1,200m級の連山に囲まれていて、役場を中心に4kmの半径範囲内に人口、耕地、住居地が集中し、道路網が発達しています。この半径4kmの外かくは、傍陽川、洗馬川、神川、洗沢川、角間川に沿って、帯状に耕地と住居地が散在しています。

また、菅平地域は、2,000m級の山々に囲まれていて海拔1,200mの東西10km、南北6kmの一大高原をなし高原野菜の主産地になっています。

1997・3

真 田 町

真田町教育委員会

【四日市遺跡 4年間の発掘調査の成果】

## みえてきた大むかしの四日市

真田中学校・四日市団地の北側にひろがる台地。ここは日当たりがよく、水の便もよいので、畑やたんぼとして利用されていましたが、以前から焼き物の破片や、「矢の根石」という奇妙な形をした黒いガラスのようなものが地下深くから出てくることが知られていました。このように地下から焼き物の破片などの見つかる場所を「遺跡」と言います。「遺跡」は大むかしの人たちの生活を知るために守らなければならない文化財なので、教育委員会ではこの一帯を「四日市遺跡」と名づけて、遺跡の保護のために努めてきました。このたび、遺跡を含む台地一帯が団地整備工事や、消防署・農協・保育園の建設によって大きく地形が変えられることになったため、遺跡を発掘調査し、出てきた焼き物や当時の家の跡を写真や図面に残して、私たちの子孫に受け継いでいくことになりました。この後に続くページはその図面や写真、また、調査や分析の結果をまとめたものですが、専門的で難しい言葉で書かれているので、一般のみなさんには少しとっつきずらいのではないかと思います。そこで、このカラーページではみなさんにもっと気軽に「遺跡」について興味を持っていただけるように、これまで4年間の発掘調査で分かったことについて、写真や絵を中心にして、できるだけ分かりやすい言葉でお知らせしたいと思います。なお、写真の焼き物や石の道具、耳かざりなどは真田町文化会館の郷土資料室でいつでもみることができず。

### これ本当にイヤリング？

約6,000年まえ 縄文時代前期

大きな石の耳かざりが出土した



#### ◀ 縄文時代のイヤリング（耳かざり）

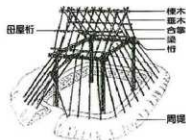
欠けていますが、補修したときの穴が見られるので、割れた破片をひもで結んで、直して大事に使っていたことが分かります。材料はとてもやわらかい石を使っています。耳たぶに穴をあけてぶら下げていたらしく、男性も女性もつけていたようです。直径5cmくらいあるので、大きくて邪魔だったのでは

ないかと心配してしまいます。四日市遺跡では他に3つ見つかっていますが、大きさや形がそれぞれ違っていました。



▲完全なかたちの耳かざり

6,000年も前からもう四日市には人が暮らしていたようです。いま、保青園のある辺りからは地面に穴をほって、木の柱を立て、屋根をふいた「**竪穴住居**」と呼ばれる家の跡が11軒発見され、また、「**縄文土器**」という焼き物などがたくさん見つかりました。この縄文土器に描かれていた模様の特徴から、今から約6,000年前にこの場所に集落があったことが分かりました。



▲ 縄文時代前期の竪穴住居跡と復元図  
家の床やいろり、柱を立てた穴が残っています。



▲ 6000年まえの縄文土器  
ドングリなどの木の实やマイモをゆでるなべの役目をしました。

## まだ金属のない時代—ナイフや斧はどうやって作ったの？

縄文時代の刃物はみんな石で作られていました。



縄文時代の道具のいろいろ



▲ 木の实をすりつぶす道具



## こんなところになぜ？

約4,000年まえ 縄文時代中期

土器が玄関に埋められていた



▲ 石を敷いた住居跡 ▲ 出入口から土器が見つかった

縄文時代中頃の住居跡の出入口から土器一壺が見つかりました。「埋壺」と呼んでいるものです。なぜこんなところに土器が埋められたのでしょうか？

この土器の中に胎衣（赤ちゃんが生まれるときに出てくる胎盤、卵膜など）を収めて埋めたという人もいます。

いま、消防署や派出所のある辺りからは、縄文時代の中頃の竪穴住居跡が56軒見つかり、たくさんの縄文土器や石器がみつかりました。今から約4,000年前の縄文土器はいろいろな飾りのついたものが多く、形も大ききも6,000年前のものとはだいぶ違ってきます。



▲ 4000年まえの縄文土器



▲ 土偶と縄文時代の服装

土偶というのは縄文時代の土の人形です。土偶の横横から当時の服装を推定します。

この後、四日市では約2,700年もの間、人々が生活した様子がありません。

四日市の住人たちはどこへ行ってしまったのでしょうか？

## 古墳をつくった人びと

約1300年まえ 古墳時代後期

四日市にふたたびムラが作られる

縄文時代の中頃を最後に住人のいなかった四日市で、人がふたたび生活しはじめました。いまから約1,300年前のことです。16軒の竪穴住居跡が見つっています。本原地区にある藤沢古墳や広山寺古墳はこのころ

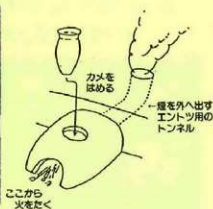
作られたものです。「古墳」というのは人びとを統率したリーダーのお墓です。



▲ 古墳時代の竪穴住居跡



▲ 石と粘土で作ったかまど



▲ かまど



#### ◀ 古墳時代の土器（茶わんや壺）

古墳時代の土器は縄文時代のものと違って、模様がほとんど有りません。茶わんや、なべの役目をした壺などが見られます。



土器が住んでいた人たちが残っていたままの状態です。



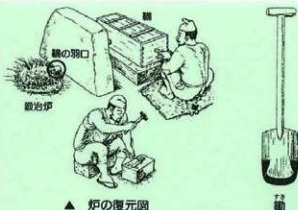
## 村に響く鉄をうつ音色

約1,000年まえ 平安時代

### 四日市に住んでいた鍛冶屋さん

国々に国分寺が造られ、都では貴族が華やかな生活をしてたころ、四日市ではどのような人たちが暮らしていたのでしょうか？四日市から見つかった平安時代の家は45軒。すべて古墳時代と同じく竪穴住居です。ほかに高床式の倉庫などもあったのでした。村びとは田んぼや畑を耕し、自給自足の生活をしていただと考えられます。また、茶わんに筆で文字の書いてあるものがあり、読み書きのできる人が都や国府、お

寺だけではなく、四日市にも住んでいた可能性があります。



▲ 鑪に空気を送るための筒(鑪の鑪口)

四日市の鍛冶屋さんは川原へ行って砂鉄を集め、それを溶かして鉄を作っていたようです。鉄を溶かした際に出た不純物が鑪の周りからたくさん出てきました。鍛冶屋さんは農具やじりなどを作っていたようです。四日市から見つかった鉄の道具がすべて四日市の鍛冶屋さんの作ったものかどうかは、これから鉄の成分などを調べることによって明らかになると思います。



▲ 鉄の鑪先が出土した



▲ 平安時代の食器類

茶焼きの土器のほかに、釉薬を塗って焼いたものもあります。



「田上」



「万」



「義」

▲ 茶わんに書かれた文字

「田上」は人の名前？ 「万」には縁起を担ぐ意味がこめられているようです。

以上が四日市遺跡4年間の発掘調査の主な成果です。特に縄文の耳かざりは重要な発見でした。真田町では初めての大規模な発掘調査で、これまであまり知られていなかった大むかしの真田郷がようやく見えはじめてきたのです。

〈図版引用文献〉 潮見 浩 1988「図解 技術の考古学」 有斐閣  
佐々木高明 1991「日本史誕生」日本の歴史① 集英社

## 序

真田郷には昔から松代や群馬に通ずる交通路があり、縄文文化もこの要衝の地に発達してきました。四日市遺跡は真田町の中心の位置にあります。以前から土器の破片が田畑に散見され、関係機関では埋蔵文化財の包蔵地として注目してきたところがあります。

今回の発掘調査は、さなだ保育園建設に伴う調査でありまして、真田町教育委員会が平成7年3月から6月までの4ヶ月という短い期間で調査をしたものであります。

四日市遺跡は、既に平成元年度に新消防署庁舎敷地の発掘調査を行い、平成5～6年度には消防署からJA農機・オートセンターの方向へ約13,000㎡の台地を3区画に分けて調査してきました。保育園敷地はこの台地の中心に未調査地として残っていたものであります。今回の調査でも縄文時代前期から平安時代にかけての約5,000年にわたる時代の住居址が次々と見つかり、この遺跡は相当広い範囲において非常に長い期間、住居が散在していたことが分かりました。また出土品も縄文土器や石器のほか帛状耳飾りなどの珍しい出土品もあり、町の遥か昔の文化を知る貴重な手掛かりとなった次第であります。

今回の調査でこの遺跡の調査は一段落となりますが、四日市遺跡は大規模遺跡としてその性格が明らかになりました。この縄文時代からの広範な集落跡は上田・小泉地方はもちろん東信地方を代表する遺跡と言えるでしょう。そして当地方の歴史研究の上で今後貴重な役割を果たすものと期待するものであります。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり多大なご指導を賜りました長野県教育委員会文化課、そして快く作業に協力してくださった(財)上田地域シルバー人材センターの皆様方ほか協力いただいた大勢の皆様方に深甚なる敬意と感謝を申し上げ、序に代える次第であります。

平成9年3月

真田町教育委員会  
教育長 三井 俊男

## 例 言

- 1 本書は長野県小県郡真田町大字長字四日市における四日市遺跡第5次発掘調査報告書である。
- 2 調査は町立さなだ保育園の建設工事に先立ち、真田町教育委員会が行った。
- 3 調査は発掘調査から遺物整理・報告書刊行まで含めて1995年3月7日から1997年3月21日まで実施した。
- 4 発掘調査に係る作業分担は以下のとおりである。
  - ◎ 遺構実測 和根崎剛・川上麻子・相馬敬子・田畑しず子・横沢初枝
  - ◎ 遺物復元 相馬敬子・田畑しず子・横沢初枝
  - ◎ 遺物拓本 横沢初枝・相馬敬子・田畑しず子・萩原喜久江
  - ◎ 遺物実測 和根崎剛・相馬敬子
  - ◎ トレース 田畑しず子・和根崎剛・相馬敬子・萩原喜久江
  - ◎ 遺構・遺物写真 小平光一・和根崎剛
  - ◎ 遺物観察表 和根崎剛・相馬敬子
- 5 本文の執筆は和根崎剛が行った。
- 6 調査に係る基準点測量及び空中写真撮影を御写真測図研究所に委託した。
- 7 本遺跡出土の金属製品の保存処理を御帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
- 8 調査に係る資料は真田町教育委員会が保管している。
- 9 本書の編集・刊行は事務局（真田町教育委員会社会教育係）が行った。
- 10 本調査・報告書作成に際しては、御長野県埋蔵文化財センター贅田明氏、坂城町教育委員会小平光一氏から絶大なご協力を賜った。また、以下の方々や諸機関のご理解・ご協力を賜った。以下ご芳名を記して深く感謝の意を表したい。（順不同、敬省略）

尾見智志・川上 元・川崎 保・倉沢正幸・見玉卓文・小山岳夫・桜井秀雄・助川朋広・田畑和秀・堤 隆・廣瀬昭弘・三上徹也・宮下健司・百瀬長秀・綿田弘実・御上田地域シルバー人材センター・御帝京大学山梨文化財研究所・長野県教育委員会文化課・御長野県埋蔵文化財センター

## 凡 例

- 1 遺構の略号は下記のとおりである。

SB 竪穴住居址	ST 掘立柱建物址	SK 土坑址	Pit ビット
----------	-----------	--------	---------
- 2 遺構番号は時代別とはせず、発見順に任意で命名した。なお、欠番がある。
- 3 実測図の縮尺は、下記を基本としたが、縮尺の異なるものもあり、各図毎に示した。

竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑址等	1/80	炬・竈	1/40		
縄文土器・土師器・須恵器等	1/4	打製石斧・磨製石斧	1/3		
小形石器（石鏃等）	1/1・2/3	磨石	1/3	石皿	1/6
- 4 挿入図におけるスクリーントーンは下記のものを示す。

遺構	////// 遺構構築土	■■■■ 焼土	■■■■ 石		
遺物	■■■■ 含繊維土器断面	石器磨耗部	■■■■ 須恵器断面	■■■■ 黒色処理	■■■■ 陶器
- 5 土層の色調は、「新版 標準土色帖」に基づいている。

# 目 次

巻頭カラー	縄文土器観察結果一覧表……………45
「みえてきた大むかしの四日市」	2 四日市遺跡D地区
序	縄文時代石器観察結果一覧表……………50
例言・凡例・目次	3 四日市遺跡D地区
	古代土器観察結果一覧表……………52
	4 四日市遺跡D地区
	金属製品観察結果一覧表……………58
第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経過……………1	
第2節 調査団の構成……………1	
第3節 調査の概要と経過……………1	第5章 調査の成果と課題
1 各年度の経過……………1	1 縄文時代……………59
2 調査日誌(抄)……………2	2 古墳時代……………68
第4節 現地説明会・出土品展示会……………3	3 平安時代……………71
1 現地説明会……………3	
2 出土品展示会「さなだ保育園用地出土品展」……………3	付 四日市遺跡C地区の調査結果(縄文時代誌)……………75
	おわりに……………91
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 真田町の原始・古代……………5	
第2節 遺跡の位置と環境……………6	写真図版
第3章 調査の結果	
第1節 発掘調査の概要……………8	
1 遺跡及び調査対象地点の概観……………8	
2 調査の方法……………8	
3 遺構・遺物の概観……………9	
4 基本層序……………9	
5 検出された遺構・遺物……………11	
第2節 調査の結果……………11	
1 縄文時代の遺構と遺物……………11	
2 古墳時代の遺構と遺物……………25	
3 平安時代の遺構と遺物……………33	
4 中世の遺物……………40	
5 時期不明の遺構……………40	
第4章 遺物観察結果一覧表	
1 四日市遺跡D地区	



# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

平成6年度において、真田町町民福祉課福祉同和対策係担当職員から横尾・四日市地区に於いて「町立さなだ保育園」の建設計画があるとの連絡を受けた。真田町教育委員会において事業地域内の埋蔵文化財の有無について調査したところ、周知の四日市遺跡が存在することが判明し、長野県教育委員会文化課を交えた協議の結果、発掘調査のうえ記録保存する方向で合意した。

四日市遺跡の調査は平成元年度から継続して行われており、平成6年度には隣接する区域がJ Aさなだ農機・オートセンター（当時：現J A信州うえだ真田町農機・オートセンター）の建設に伴い発掘調査され、今回の調査でも同様の遺構・遺物の出土が予想された。調査は平成7年3月7日から着手した。

## 第2節 調査団の構成

（事務局）真田町教育委員会

教 育 長 三井俊男

教 育 次 長 芳沢孝夫

社会教育係長 荒井今朝信（平成8年3月31日退任）

大塚久文（平成8年4月1日着任）

社会教育係 和根崎剛・川上麻子

（調査団）

担 当 者 和根崎剛（真田町教育委員会主事、長野県考古学会会員）

調 査 員 川上麻子（真田町教育委員会主事・平成8年3月31日退任）

調 査 補 助 員 荻原喜久江・相馬敬子・田畑しず子・横沢初枝（真田町臨時職員）

発掘調査参加者 樋口啓一・山崎和子・渋谷里治・岡嶋庄平・一之瀬貞美・関口嘉弘・小林みよ子・

大久保きよ・桜井好平・木島久男（順不同）

（以上、⑧上田地域シルバー人材センター）

## 第3節 調査の概要と経過

### 1 各年度の経過

#### （1）平成6年度の経過

本年度の発掘調査に係る総事業費は1,823,229円であった。調査は降雪および土壌凍結の心配のない時期を待って開始された。幸い好天に恵まれ、調査は順調に進行した。重機による1区の表土剥ぎ及び作業員による遺構検出作業を主に行う。現場における発掘作業は平成7年3月7日から3月25日まで行われた。

## (2) 平成7年度の経過

本年度の発掘調査及び整理作業に係る総事業費は5,033,042円であった。発掘調査の結果、縄文時代前期・古墳時代後期・平安時代の住居址、時期不明の石列・畝状遺構等が検出された。現場における発掘作業は平成7年4月5日から6月30日まで行われ、平成8年1月4日から3月31日まで整理作業を実施した。

## (3) 平成8年度の経過

本年度の報告書作成作業に係る総事業費は3,214,900千円であった。作業は4月1日から行われ、平成9年3月21日に報告書を刊行して調査を終了した。

## 2 調査日誌(抄)

### 平成6年度

1995年(平成7年)

- 1月7日 文化財保護法第98条の2第1項に基づき、発掘調査届けを提出。
- 3月7日 調査着手 重機による表土剥ぎ作業開始(～8日)。プレハブ設置。
- 3月13日 畝入れ式。機材搬入。ラジコンヘリによる航空写真撮影。
- 3月14日 グリッド杭打ち(～15日)。住居址の掘り下げ開始。
- 3月22日 御長野県埋文センター桜井秀雄氏来町、SB5出土の動物骨についてご教示いただく。
- 3月23日 保育園建設工事に伴いボーリング調査を実施。
- 3月24日 I区にて数条の畝状遺構を検出。
- 3月25日 年度切替の庶務のため一時現場作業を休止する(～4月4日)。



バックホーによる表土剥ぎ作業

### 平成7年度

- 4月10日 I区にて石列遺構を検出。
- 4月13日 SB10の調査を開始。鉄製鋤先が出土。
- 4月18日 I区にて集石遺構を検出。
- 4月26日 信濃国分寺資料館川上元氏、倉沢正幸氏来町、畝状遺構、石列、集石遺構についてご教示いただく。
- 4月29日 II区の重機による土砂移動及び表土剥ぎ作業開始(～5月9日)。
- 5月31日 御長野県埋文センター川崎保氏来町、縄文前期土器についてご教示いただく。
- 6月6日 II区検出面にて鉄製耳飾り1点出土。



18号住居址調査風景

- 6月8日 朝長野県埋文センター廣瀬昭広氏来町、縄文前期土器についてご教示いただく。
- 6月10日 現地説明会実施、参加者約50名。
- 6月22日 II区検出面にて2点目の块状耳飾りが出土。
- 6月30日 ラジコンヘリによる航空写真撮影。機材・プレハブ撤収。現場作業を終了する。
- 7月18日 出土品が文化財保護法第61条第2項の規定により文化財認定される。

#### 1996年（平成8年）

- 1月4日 町文化会館郷土資料室にて遺物の整理作業を開始する。
- 3月31日 平成7年度の作業を終了する。

#### 平成8年度

- 4月1日 平成8年度の作業（遺物整理）を開始する。真田町立さなだ保育園が開園。
- 5月1日 町文化会館ロビーにて「さなだ保育園用地出土品展」を実施（～7月31日）。



土器の復元作業

#### 1997年（平成9年）

- 1月21日 朝長野県埋文センター費田明氏来町、縄文前期土器についてご教示いただく。
- 2月12日 報告書原稿終了。
- 3月21日 「四日市遺跡III」報告書刊行。平成8年度の作業を終了する。

## 第4節 現地説明会・出土品展示会

### 1 現地説明会（平成7年6月10日（土））

調査の終了を目前に控えて、四日市遺跡現場にて現地説明会が行われた。前日、信濃毎日新聞紙上にて紹介されたためもあり、町内外から多数の見学者が来場した。もっとも注目されたのは縄文前期の块状耳飾りで、見学者からは耳飾りの大きさに驚く声や、その使用方法についての質問などが聞かれた。

### 2 出土品展示会「さなだ保育園用地出土品展」（平成8年5月1日～7月31日）

埋蔵文化財保護意識の啓発、および町民の生涯学習意欲の高揚に応じて、町文化会館ロビー及び郷土資料室にて「さなだ保育園用地出土品展」と題して、復元・保存処理された出土品、写真の展示会を行った。また、これに合わせて真田中学校が所蔵していた縄文時代前期の獸面把手や縄文時代中期の土器なども展示した。期間中の来場者は延べ200人程となった。





## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 真田町の原始・古代

真田町は真田氏発祥の地として知られる。また、群馬、松代への交通路としての役割は大きく、古代においても交通の要衝として重要な場所であったと思われる。当町の歴史を考える場合にはこの点を踏まえておく必要がある。

原始・古代を概観してみよう。菅平高原の遺跡については小原等氏によって早くから注目され、資料が蓄積された。小原氏の地道な研究活動に対して深く敬意を表したい。旧石器時代の遺物は菅平小中学校遺跡、唐沢B遺跡等からの出土が知られている。学校遺跡出土の石器は東山系文化に属するものと考えられている。また、唐沢B遺跡は神子柴型石斧を出土した遺跡として知られている。なお、四日市遺跡の位置する平野部では、旧石器時代の遺跡は発見されていないが、境田遺跡から黒曜石製の槍先型尖頭器らしい石器が1点出土している。ローム層上面からの単独出土であり、遺構は検出されなかった。

つづく縄文時代になると菅平高原の東組E遺跡、石戸山A遺跡などに草創期・早期の生活の痕跡が認められる。菅平地区では過去に何度か発掘調査が行なわれ、押型文系土器の出土がみられ、それに伴う石器も多数見つかった。しかし、住居地の検出には至っていない。前期になると平野部でも遺跡の数が増え、過去の発掘調査で四日市遺跡では塊状耳飾りをはじめとして花積下層式前後～有尾式期の資料が見つかった。住居地も検出されており、注目される。四日市遺跡は中期終末の加曾利E式土器・唐草文系土器の時期が最盛期で、数石住居地がみられ、典型的な柄鏡型住居地も検出されている。縄文時代中期の浅間山麓には四日市遺跡をはじめ、小諸市の郷土遺跡、東部町の久保在家遺跡といった大きな集落が分布しており、ひとつの文化圏として捉えられる可能性を秘めている。四日市遺跡の土器様相には唐草文系土器や加曾利E式土器、曾利式土器の影響もうかがえ、興味深い。後期の遺跡は雁石遺跡が知られ、私名寺寺の大深鉢や亀型土製品、土製耳飾、石棒などの出土を見た。中でも亀型土製品は貴重な例である。土箭としての機能が推定され、中空で腹部に穴が2つ開いている。晩期の遺跡については菅平の唐沢、陸の岩といった岩陰遺跡から土器、石器とともに骨角器及び動物遺存体の出土が知られている。また、平野部の雁石・四日市・境田遺跡からも佐野式土器や水式土器が出土している。

弥生時代の遺跡はキャンプサイトとしての前述の岩陰遺跡と若干が知られるのみで、堅穴住居地については検出例がない。また、遺物についても岩陰遺跡を除くと、後期の稻清水式土器の破片が散在的に見られる程度であり、水稲耕作を経営基盤とした集落は存在しなかったものと推定される。

古墳時代の集落が展開するのは後期の鬼高式期になってからである。後期円墳の典型である蕨沢古墳や本原地区の多数の小円墳と時期的に一致する。近年、四日市や境田遺跡で住居地の検出例が増えている。境田遺跡では石製模造品が出土した。当時の集落規模及び経営基盤については不明であるが、耕地拡大の動向と合わせて検討課題である。

奈良・平安時代の様相については四日市や境田遺跡で平安時代の集落址がみついている以外は、断片的な情報しかない。しかし、おそらく平安時代になると大規模かつ長期的な集落が平野部に存在していたと思われる。四日市遺跡では墨書土器が多数出土しており、また、鍛冶製鉄遺構も検出されている。

## 第2節 遺跡の位置と環境

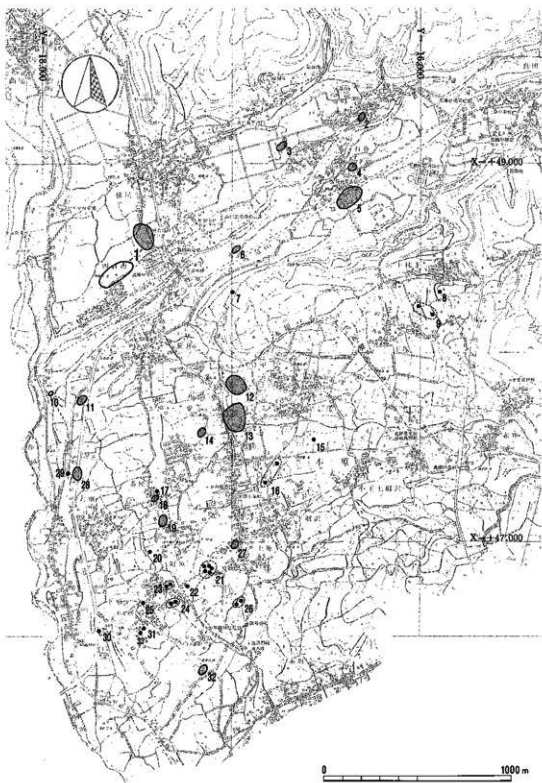
真田町は長野県の北東部に位置し、町の東側は群馬県嬭恋村と県境を接する。総面積は181.90km<sup>2</sup>を有し、北東には四阿山(2332.9m)・根子岳(2128m)が連なり、町の大部分を山地が占めている。山麓の菅平高原に源を発する神川沿岸には谷平野が発達している。

四日市遺跡の位置する横尾・四日市地区は、神川の地横平坦面上にある。上市市との境界付近で神川と合流する傍陽川や洗馬川の扇状地面とも接しており、広く開けている地域である。町役場、町民グランド、体育館、真田中学校といった施設が集中し、これらの建設当時から付近一帯に遺跡が存在することが知られてはいたものの、十分な調査が行なわれていたとはいいがたく、遺跡の概要等については不明な点が多かった。平成元年度になって役場庁舎の新築にかかり四日市遺跡の一部が発掘調査され、縄文時代中期及び平安時代の集落の存在が明らかになり、この発掘調査が契機となって横尾・四日市地区の遺跡の重要性が改めて認識されることとなった。なお、本遺跡は現在の集落の中心からやや南に外れた神川右岸の河岸段丘端に位置している。近年、団地造成や大規模は場整備事業によって開発が急速に進んでおり、埋蔵文化財保護の現状は決して良好であるとは言えない。

№	名称	時代	所在地	備考	№	名称	時代	所在地	備考
1	西日市遺跡	縄文～	横尾 四日市	平成元・5～6年調査	20	鶴の子田古墳(円)	古墳	本原 下原鶴の子田	
2	柳又遺跡	縄文	戸沢 柳又			町下1号墳(円)	＃	＃ 上原町下	
3	松葉田遺跡	＃	＃ 松葉田			町下2号墳(円)	＃	＃	
4	石舟遺跡	＃	石舟 石舟		21	町下3号墳(円)	＃	＃	
5	藤石遺跡	＃	＃ 藤石	昭和49・59～60年調査		町下4号墳(円)	＃	＃	
6	山達家遺跡	＃	横尾 山達家			町下5号墳(円)	＃	＃	
7	荒井古墳(円)	古墳	本原 荒井		22	矢倉城古墳(円)	＃	＃ 下原東出早	
8	的岩古墳(円)	＃	＃ 西畝		23	九久能1号墳(円)	＃	＃ 九久能	
9	下塚1号墳(円)	＃	＃ 下塚			九久能2号墳(円)	＃	＃	
	下塚2号墳(円)	＃	＃		24	西出早1号墳(円)	＃	＃ 西出早	
10	北臼庭遺跡	＃	＃ 北臼庭			西出早2号墳(円)	＃	＃	
11	南荒井遺跡	平安	＃ 南荒井		25	村中古墳(円)	＃	＃ 村中	
12	山崎遺跡	縄文	＃ 山崎		26	桜林1号墳(円)	＃	＃ 上原東出早	
13	竹並遺跡	＃	＃ 竹並			桜林1号墳(円)	＃	＃	
14	表木遺跡	＃	＃ 表木		27	南町上遺跡	縄文	＃ 中原南町上	
15	殿藏院古墳(円)	古墳	＃ 殿藏院		28	藤沢遺跡	古墳～	＃ 大畑藤沢	昭和49年調査
16	広山寺1号墳(円)	＃	＃ 中原南町上		29	藤原古墳	古墳	＃	＃
	広山寺2号墳(円)	＃	＃		30	羽毛田古墳(円)	＃	＃ 下原羽毛田	墳 滅
17	北番匠古墳(円)	＃	＃ 北番匠		31	小沼長者古墳(円)	＃	＃ 西田	平成5年 確認調査
18	北番匠B遺跡	古墳～	＃ 南妻匠		32	境田遺跡	古墳～	＃ 境田	平成6年調査
19	北番匠A遺跡	＃	＃		33	西田遺跡	中世～	＃ 西田	平成6年調査

表1 四日市遺跡周辺の遺跡地名表



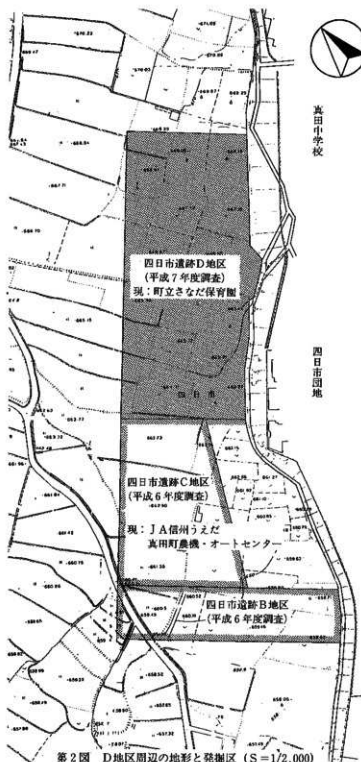


第1図 四日市遺跡周辺の遺跡分布図

# 第3章 調査の結果

## 第1節 発掘調査の概要

### 1 遺跡及び調査対象地点の概観



本遺跡は神川右岸の河岸段丘端に占地している。遺跡範囲の詳細については不明確であったが、遺跡の性格は平成元年度以降の調査によって明らかになっていた。それによると今回の地点も幾多の時期にわたる複合遺跡であることが推定され、調査が慎重かつ困難なものになることが予想された。

調査対象面積は約6,000㎡を数える。旧地形は南に向かって緩やかに傾斜しており、切土・盛土して畑地となっていたり、自然の土砂流出も認められた。そのため、一部では耕作土直下がローム層となる場合があり、既に多くの遺構が失われているものと推定された。

### 2 調査の方法

四日市遺跡D地区は、平成6年度に今回の調査地区に隣接するC地区約3,500㎡、B地区約2,000㎡の部分が既に調査され(真田町教委1996)、その調査結果との整合性、調査が将来、周辺まで及ぶ可能性を考慮して、元年度調査以降採用された国家座標に基づくグリッド法を用いることとした。調査地区が広大であったため、8m×8mのグ

リッドを組んで調査を行った。遺構の検出位置及び遺構外遺物の一部の取り扱い、このグリッド単位で行なっている。なお、調査区の設定は便宜的に発掘区を二分し、南西部分から順にⅠ区、Ⅱ区とした。

遺構全体図は平板測量法を用いて作成した。個々の遺構の実測は簡易遺り方で行なった。

### 3 遺構・遺物の概観

遺跡は縄文時代前期、古墳時代後期、平安時代の集落址である。ほぼ同時期の遺構を検出したB・C地区の調査では住居址31軒（縄文9・古墳5・平安17）を確認した。今回の調査では住居址22軒（縄文3・古墳9・平安10）を検出した。特筆すべきは縄文時代前期中葉の良好な土器資料と、古墳時代後期の住居址がまとも検出されたことである。

縄文時代の遺構は前期のものが検出されたのみであった。従って遺物も前期のものが圧倒的に多い。前期中葉の有尾式土器を中心に諸磯a式土器、北川下層Ⅱ式土器などがみられる。また、遺物包含層から中期、晩期の土器片が僅かながら出土している。調査結果のみから推定すると、D地区が主体的な生活の場として利用されていたのは前期中葉だったようである。

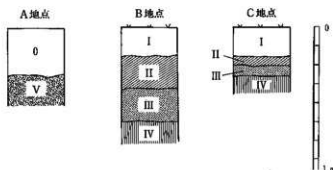
続く弥生時代の遺構・遺物は検出されていない。

古墳時代の遺構・遺物は住居址が9軒確認された。出土した土器から全て古墳時代後期の所産と思われる。鉄製品及び石製模造品の出土はなかった。

平安時代の遺構は住居址を10軒確認した。出土した土器から概ね9世紀末～10世紀初頭の所産と考えている。鎌、鋤頭といった鉄製品の出土がみられ、緑釉陶器や灰釉陶器も出土した。SB5とした遺構から出土した動物骨・鹿角などは平安時代の所産であろうか。

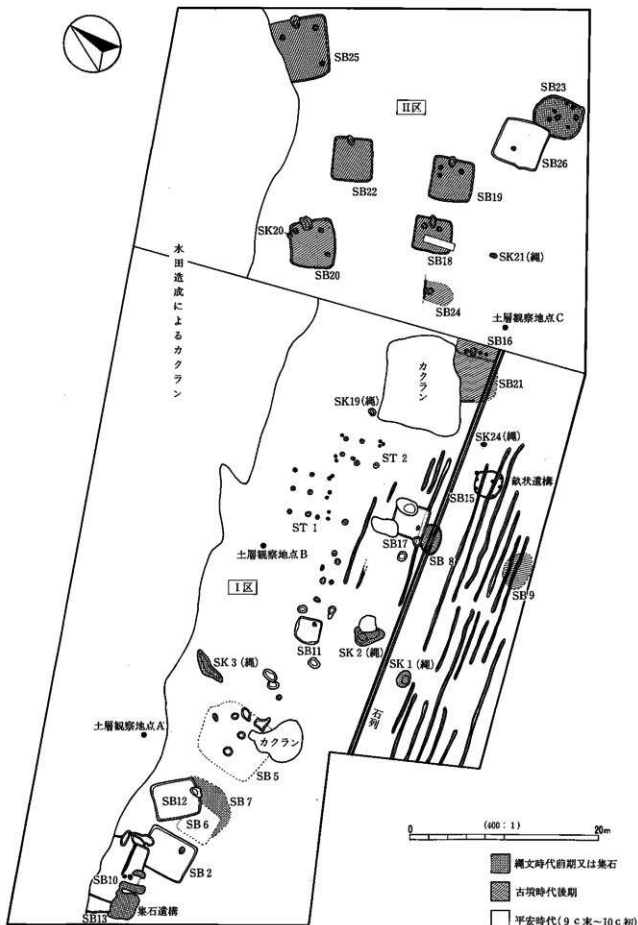
### 4 基本層序

もっとも多いたとこで4層に細分できた。0層・Ⅰ層は水田ないし畑の耕作土、Ⅱ層（黒褐色土）とⅢ層（暗褐色土）が堆積腐食土層、Ⅳ層がローム層である。Ⅴ層は水田耕作により変質した土である。0層は50cm、Ⅰ～Ⅲ層は20～30cmの層厚を保つ。古墳・平安時代の遺構はⅡ層から、縄文時代の遺構はⅢ層上面から掘り込まれているようである。削平・流出によりⅠ層直下にⅣ層が存在する部分がある。



- 0層：10YR2/2 黒褐色土 粘性なし、強くしまっている。水田耕作土。  
 Ⅰ層：10YR3/3 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。畑耕作土。  
 Ⅱ層：10YR3/1 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。堆積腐食土層。  
 Ⅲ層：10YR3/4 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。  
 Ⅳ層：10YR5/6 黄褐色土 粘性ややあり。しまりあり。ローム層。  
 Ⅴ層：10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり。しまりあり。水田直下のⅡ層  
 ないしⅢ層が変質した土。

第3図 基本土層図



第4図 四日市道路D地区遺構配置図 (S=1/400)

## 5 検出された遺構・遺物

四日市遺跡D地区から検出された遺構・遺物は下記のとおりである。

遺構	縄文時代前期	竪穴住居址	22軒（縄文3・古墳9・平安10）
	古墳時代後期	掘立柱建物址	2基
	平安時代	土坑址	23基（縄文6・不明17）
	中世以降	集石遺構	1基
		石列遺構	2本
		竈状遺構	23本
遺物	縄文土器	前期有尾式、踏磯a式、北白川下層II式・中期・晩期米式	
	土師器・黒色土器	甕・坏・甕・高坏・皿・甌・耳皿	
	須恵器	甕・坏・長頸壺	
	灰釉陶器	坏・壺・皿・長頸壺	
	緑釉陶器	壺	
	石器	石鏃・石匙・石錐・打製石斧・磨製石斧・石皿・すり石・たたき石・砥石	
	石製品	块状耳飾り・軽石製品	
	鉄製品	鎌・鋤・刀子・紡錘車(?)	
	動物遺存体	動物骨・歯・鹿角	

## 第2節 調査の結果

四日市遺跡D地区は縄文時代前期中葉から平安時代にわたる複合遺跡である。発掘現場における混乱を避けるため、各遺構の番号は時代に係わりなく、発見順に付与した。なお、調査の途中で遺構ではないことが判明したものもあるため、番号に欠番がある。住居址に関する記述の順序は、①調査の経過、②覆土、③壁面、④床面、⑤柱穴とピット、⑥炉・竈、⑦規模と形態、⑧出土遺物と所属時期となっており、その他の遺構についてもこれに準じている。ただし、適宜説明を省いた箇所があることをご了承願いたい。

今回の調査では多くの遺構、遺物を検出したが、紙面・時間の制約からここでは主要な遺構・遺物の記述に留めることをご容赦願いたい。

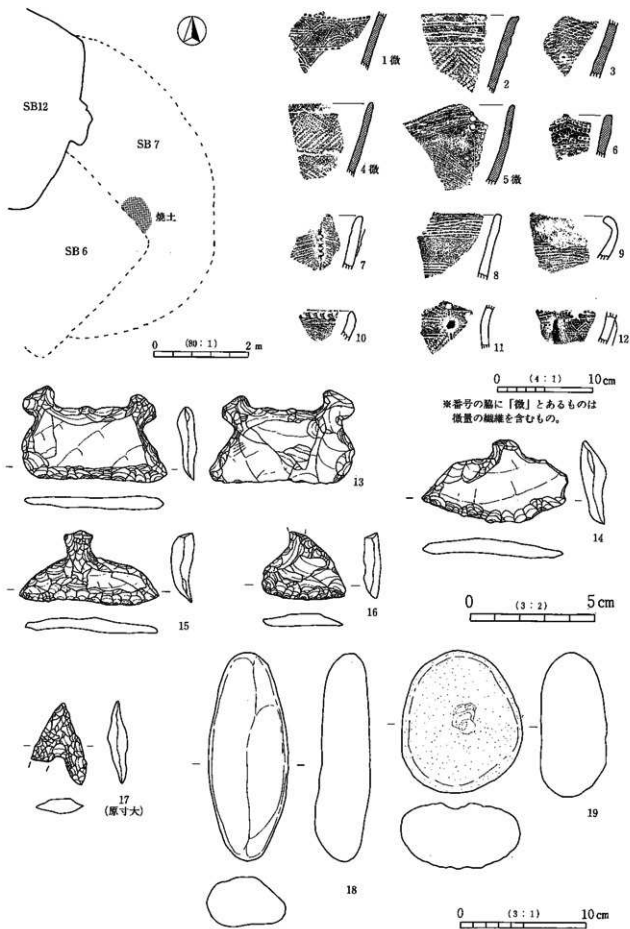
### 1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代前期中葉の住居址3軒、土坑6基を確認することが出来た。また、包含層中から膨大な数の土器片や石器を検出した。3号土坑は縄文前期の土器の大破片の出土を見たが、遺物が盗難に会い、資料化できなかった。

#### 1 前期中葉の遺構と遺物

##### (1) 7号住居址(SB7) (第5図)

調査の経過：III層上面にて黒色土の落ち込みを検出したため、セクションベルトを残して掘り下げにかかると。掘り下げの途中、平安時代のSB6・12との切り合いに気づき、調査を中断。SB6・12の完掘後に再度調査にかかる。切り合い部分はSB6・12によって完全に失われていた。



第5図 7号住居址実測図及び出土遺物実測図



覆土：黒色土の堆積がみられる。

壁面：壁高10～15cmを計る。

床面：Ⅲ層中に床面を作っている。締まってはいるものの、硬化していない。

柱穴とビット：確認できなかった。

炉：中央付近に焼土の広がりを検出した。

規模と形態：壁が確認できず不明。

出土遺物と所属時期：出土土器から縄文時代前期中葉に比定される。土器には半截竹管による平行沈線文や波状文、垂直刺突のほか、網目状燃糸文といった文様がみられる。この住居址からつまみ部を2つ有する石匙（第5図-13）が出土している。

## (2) 8号住居址（SB8）（第6・7図）

調査の経過：Ⅲ層上面にて黒色土の落ち込みを検出したため、セクションベルトを残して掘り下げにかかると。掘り下げの途中、平安時代のSB17との切り合いに気づき、調査を中断。SB17の完掘後に再度調査にかかる。切り合い部分はSB17によって完全に失われていた。また、石列遺構によって一部を破壊されている。

覆土：黒色土の堆積がみられる。

壁面：壁高は20cmを計る。

床面：締まっている。Ⅲ層中に床面を作っている。

柱穴とビット：確認できなかった。

炉：確認できなかった。

規模と形態：長軸4m程度の楕円形を呈すると思われる。

出土遺物と所属時期：出土土器から縄文時代前期中葉に比定される。当住居址からは該期の文様構成の様々を知ることできる良好な土器資料が出土している。詳しくは第5章で触れるが、半截竹管による文様作出法のバラエティの多さに驚かされる。なお、第6図-5は垂下する隆帯を持つが、菱形構成の平行沈線に爪形文を重ねる文様の中央まで伸びていることから、神之木式土器の技法の名残とも見える。

## (3) 23号住居址（SB23）（第8・9図）

調査の経過：Ⅲ層上面にて黒色土の落ち込みを検出したため、セクションベルトを残して掘り下げにかかると。大形の破片の出土が相次ぎ、出土位置を平面図にプロットする。調査の最終段階になって、平安時代の住居址・SB26が重複していることが分かった。

覆土：黒色土(1)、黒褐色土(2)、褐色土(3)の堆積がみられた。

壁面：壁高は20cmを計る。

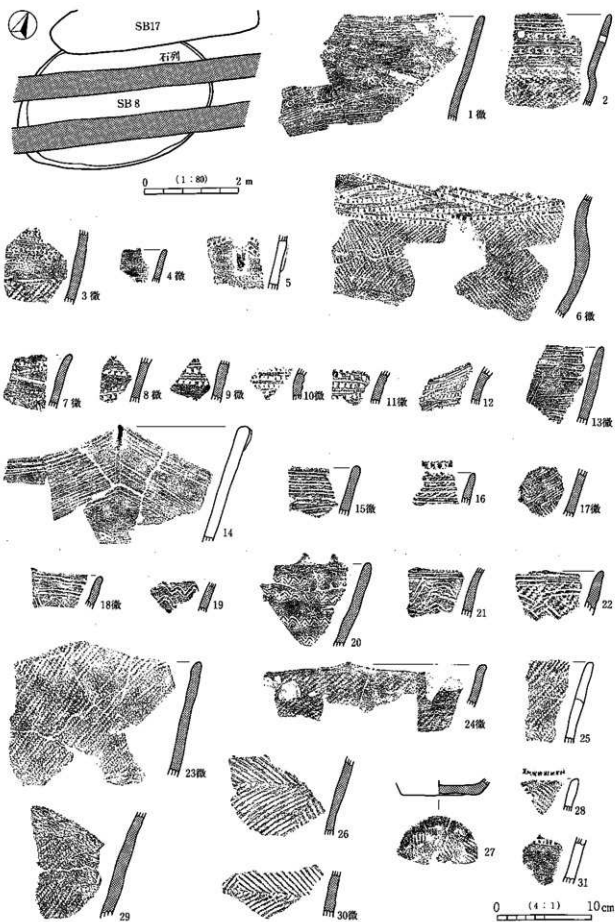
床面：締まっていた。Ⅲ層中に床面を作っている。

柱穴とビット：ビット5基を確認した。

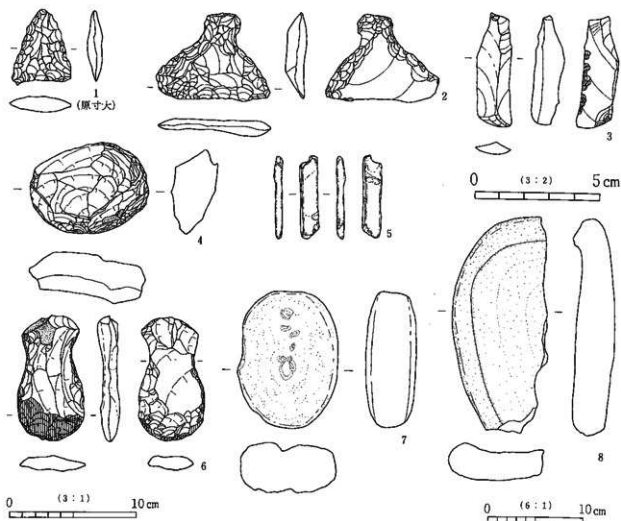
炉：焼土は確認できなかったものの、炉の穴と推定されるPitを確認した。

規模と形態：長軸5m程度の楕円形を呈する。

出土遺物と所属時期：出土土器から縄文時代前期中葉に比定される。当住居址出土資料は良好な遺物のセットとして捉えられるだろう。文様は半截竹管による文様が主体となるが、胎土に繊維を含むものと含



第6图 8号住居址实测图及出土遗物实测图(1)



第7図 8号住居址出土遺物実測図(2)

まないものが併存しており、第9図-20・21のようなものや、諸磯Ⅱ式土器(22-24)、北白川下層Ⅱ式土器(25)が出土している。また、この住居址からもつまみ部を2つ有したと推定される石匙(30)が出土している。

(4) 1号土坑(SK1) (第10図)

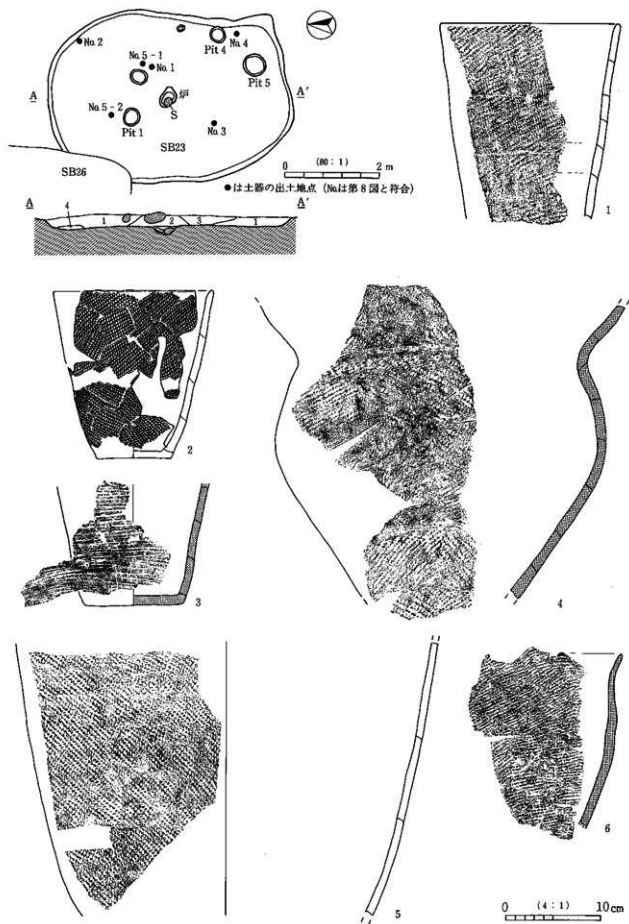
調査の経過：Ⅲ層上面にて黒色土の落ち込みとまとまった土器の破片の出土をみたため、セクションベルトを残して掘り下げにかかる。

覆土：黒色土(1)、褐色土(2)の堆積がみられた。

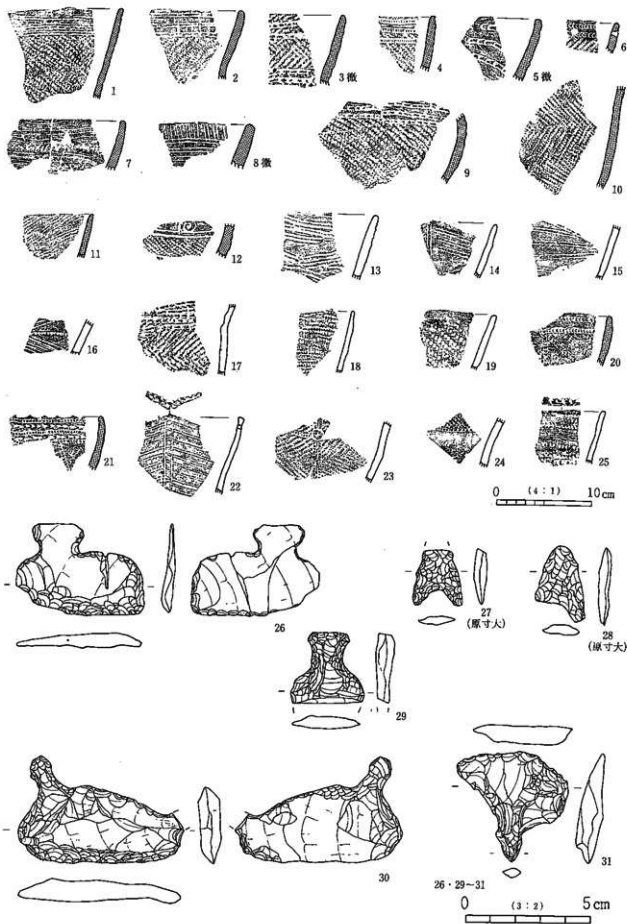
壁面：壁高は40cmを計る。

規模と形態：直径1.5m程度の円形を呈する。

出土遺物と所属時期：出土土器から縄文時代前期中葉に比定される。第10図-3は平行沈線のみで菱形を描く。



第8図 23号住居址実測図及び出土土物実測図(1)



第9图 23号住居址出土遗物实图(2)

(5) 2号土坑 (SK2) (第11図)

調査の経過: III層上面にて黒色土の落ち込みを検出したため、セクションベルトを残して掘り下げにかかると。掘り下げの途中で石皿の完形品が出土した。

覆土: 黒色土(1)、黒褐色土(2)、褐色土(3)の堆積がみられた。

壁面: 壁高は90cmを計る。

規模と形態: 長軸3m程度の楕円形を呈する。

出土遺物と所属時期: 出土土器から縄文時代前期中葉に比定される。完形の石皿が黒色土(1)層中から出土している。

(6) 19号土坑 (SK19) (第12図)

調査の経過: III層上面にてまとまった土器の破片の出土をみたため、掘り下げにかかる。

覆土: 黒色土の堆積がみられた。

壁面: 壁高は30cmを計る。

規模と形態: 直径1m程度の円形を呈する。

出土遺物と所属時期: 出土土器から縄文時代前期中葉に比定される。第12図-7は最も破片の多かった個体であるが、完形に接合することはできなかった。半截竹管による平行沈線、コンパス文が描かれ、胴部には羽状縄文が施文されるようだ。また、他にも平行沈線が菱形構成をとるものや、網目状撫糸文をもつものなどが出土している。図示した以外にも接合不能な破片が多く出土しており、短絡的な考えではあるが、土器廃棄遺構的な性格の土坑かもしれない。

(7) 21号土坑 (SK21) (第13図)

覆土: 黒色土の堆積がみられた。

壁面: 壁高は25cmを計る。

規模と形態: 長軸90cm程度の楕円形を呈する。

出土遺物と所属時期: 出土土器から縄文前期中葉に比定される。第13図-1は北白川下層II式土器である。器壁が薄く、胎土から搬入品であると推定される。胴部に節の小さいLRとRLの羽状縄文をもつので、北白川下層II式土器とみられる。口唇部には4単位の小突起が付されるようだ。

(8) 24号土坑 (SK24) (第14図)

覆土: 黒色土の堆積がみられた。黒曜石の微小な破片が覆土中に多く見られた。

壁面: 壁高は40cmを計る。

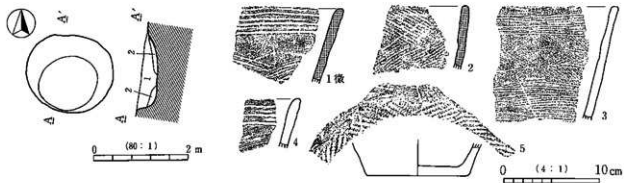
規模と形態: 長軸70cm程度の楕円形を呈する。

出土遺物と所属時期: 出土土器から縄文前期中葉に比定される。第14図-1は口縁部に横の陰帯が巡り、波状口縁の頂部から縦の陰帯が垂下する。口縁部付近は著しく屈曲する。4は無文土器で指頭圧痕が残る。

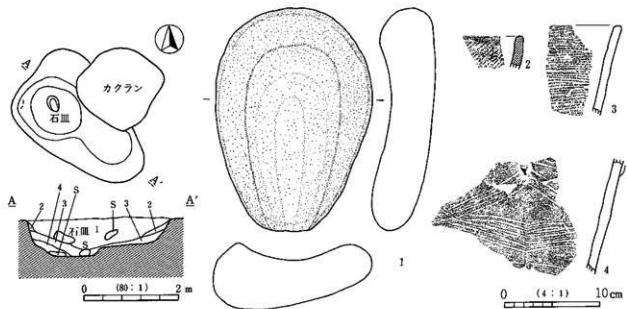
(9) 縄文時代の遺構外出土遺物 (第15~18図)

縄文時代の遺構に伴わない遺物も多数出土した。土器は前期中葉のものが殆どである。第15図-1は大き

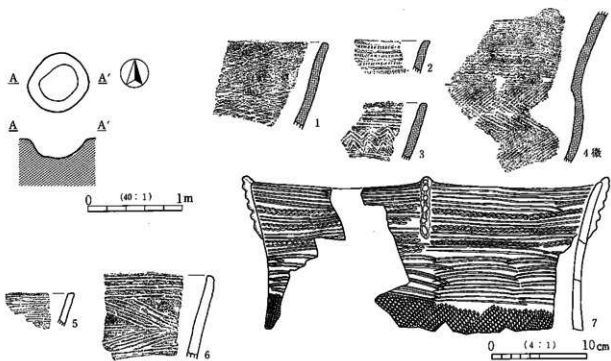




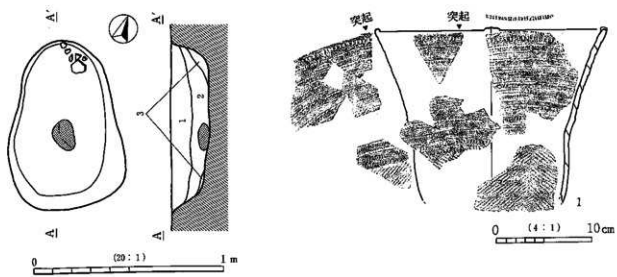
第10図 1号土坑出土遺物実測図



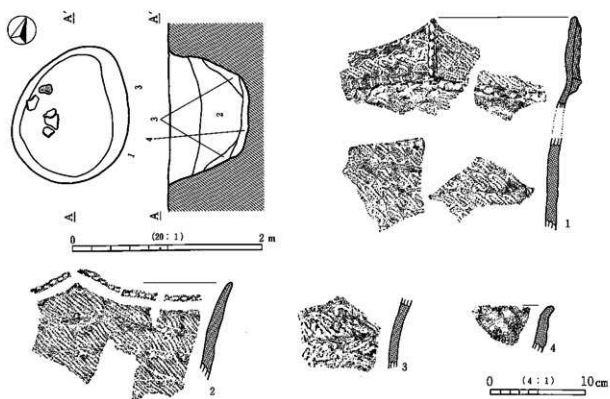
第11図 2号土坑出土遺物実測図



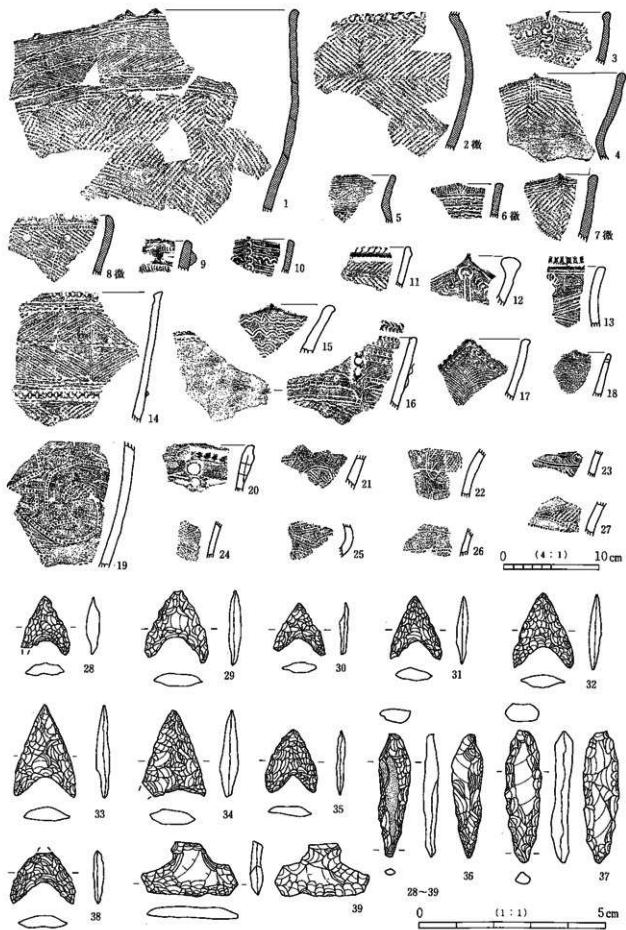
第12図 19号土坑出土遺物実測図



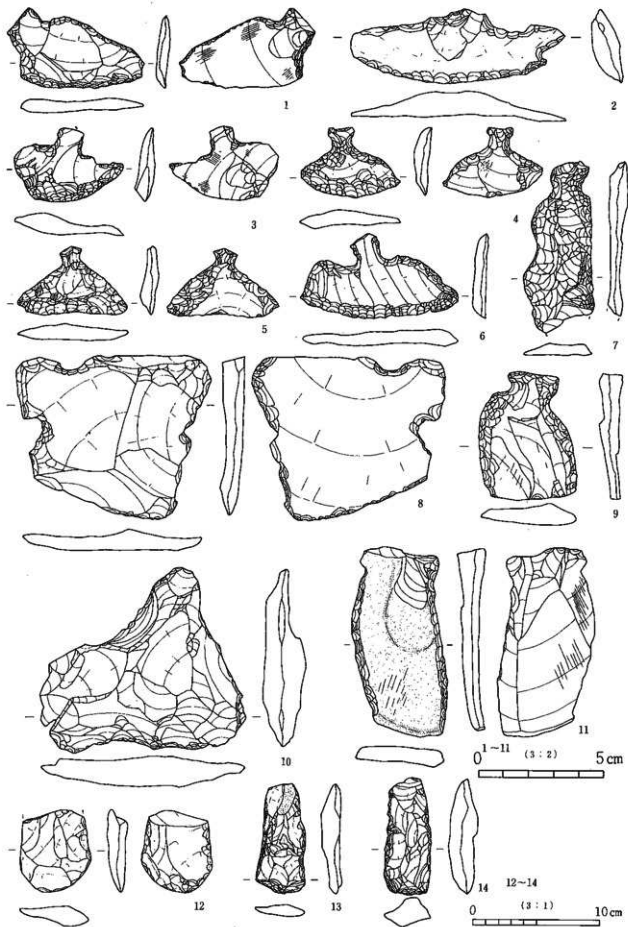
第13图 21号土坑实测图及び出土遺物实测图



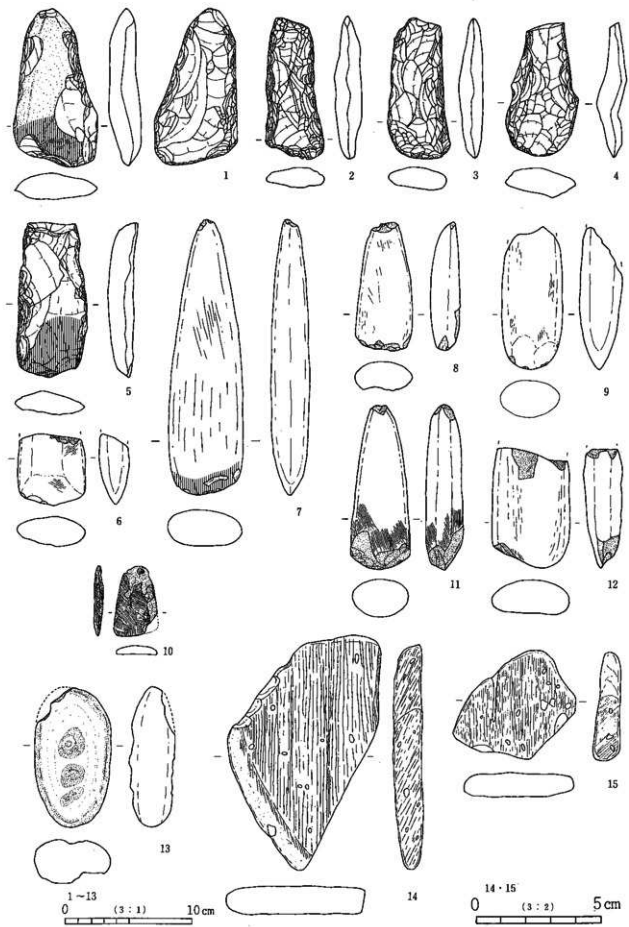
第14图 24号土坑实测图及び出土遺物实测图



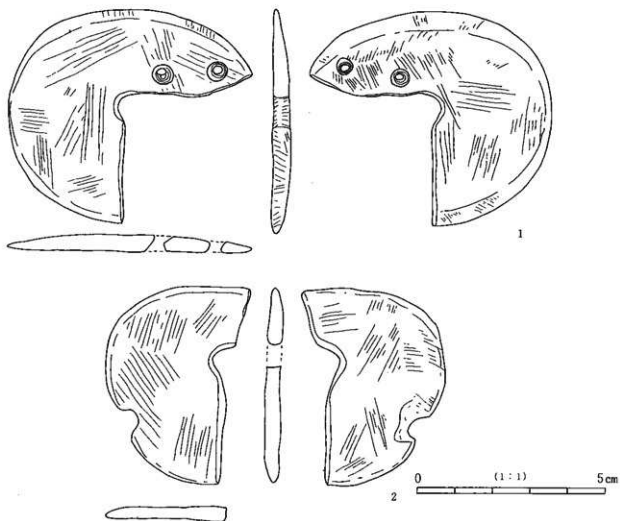
第15図 縄文時代の遺構外出土遺物(1)



第16図 縄文時代の遺構外出土遺物(2)



第17図 縄文時代の遺構外出土遺物(3)



第18図 縄文時代の遺構外出土遺物(4)



第19図 遺構外出土の縄文時代中期の土器



第20図 遺構外出土の縄文時代晩期の土器

な破片である。遺構として把握できなかったが、土坑址からの出土であったのかもしれない。やはり半截竹管による平行沈線、コンパス文、刺突文が描かれる土器が多い。見事な菱形構成の文様を有する14のようなものもある。8は胎土に極微量の繊維を含むが、文様構成は踏碇a式の範疇であろう。踏碇a式はそのほかにも数点みられた(17、19、21～27)。石器も多数出土している。第17図～14・15は用途不明の軽石製品で平らに磨った痕跡がうかがえる。また、大型の球状耳飾りが2点出土した(第18図～1・2)。

## II 中期・晩期の遺構と遺物 (第19～20図)

該期の遺構は確認されていない。遺物は全て遺構外から出土したものである。

第19図は中期の土器の破片。第20図は晩期の水式土器の深鉢の口縁部破片である。平成元年度および5年度に発掘調査されたA地区では中期後葉の集落址、それに晩期後葉の土坑址が検出されており、関連がうかがえる。

## 2 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は住居址が9軒検出された。良好な一括資料を検出することが出来た。

### (1) 9号住居址 (SB9) (第21図)

調査の経過：Ⅲ層上面で黒色土の落ち込みが曖昧なものの認められたため、掘り下げにかかる。床は堅緻面となっているが、全体的に削平を受けていて、壁面は検出できなかった。

覆土：黒色土が堆積していた。

壁面：検出できず。

床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：確認できなかった。

竈：硬化した床面の一部が焼けて変色し、焼土が若干検出された。

規模と形態：壁と床面の一部に削平を受けており、不明。

出土遺物と所属時期：遺構の所属時期は出土した土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期と考えられる。堅緻面の存在から住居址と認定した。

### (2) 16号・21号住居址 (SB16・21) (第22図)

調査の経過：Ⅲ層上面で黒色土の落ち込みが認められたため、掘り下げにかかる。SB16の床は堅緻面となっているが、畑の土手造成で削平を受けていて、住居址の半分以上が検出できなかった。また、SB21はクルミの木の根によって攪乱されており、部分的に床面が確認できたものの遺構全体を把握することができなかった。

#### ① 16号住居址 (第22図)

覆土：黒色土が堆積していた。

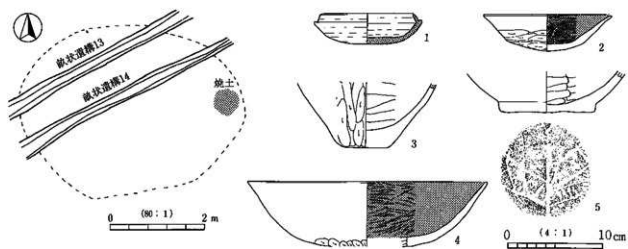
壁面：一部のみ確認した。

床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

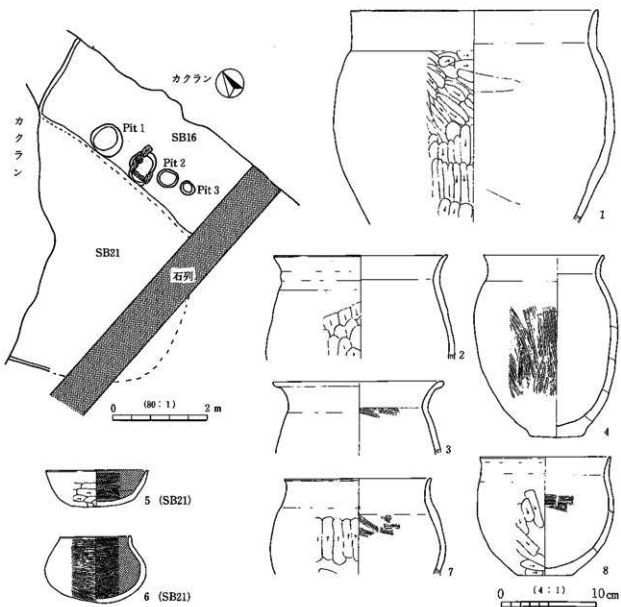
柱穴とビット：ビット3基を確認した。

竈：南西の壁に付属し、構築材である石が検出された。竈内部の支柱の石と焼土の堆積が見られた。

規模と形態：土手の造成により半分以上を欠失しており、不明。



第21図 9号住居址実測図及び出土遺物実測図



第22図 16号・21号住居址実測図及び出土遺物実測図



出土遺物と所属時期：出土した土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と考えられる。

② 21号住居址 (第22図)

覆土：黒色土が堆積していた。

壁面：確認できなかった。

床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：確認できなかった。

竈：確認できなかった。

規模と形態：壁と床面の一部に削平を受けており、不明。

出土遺物と所属時期：堅緻面が認められたため、住居址と判断した。出土した土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と考えられる。

(3) 18号住居址 (SB18) (第23図)

覆土：褐色土(1)と黒色土(2)が堆積していた。

壁面：壁高は約20cmを計る。

床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：2基確認した。

竈：北東の壁に付属し、構築材である石が検出された。焼土の堆積と竈内部の支柱の石が見られた。

規模と形態：一辺3.5m程度の方角を呈する。

出土遺物と所属時期：出土した土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と考えられる。光形の小型の鉢(第22図-3)の中に土師器の破片が収納された状態で検出された(写真)。収納されていたのは長胴甕の破片で、同一個体のものであった。破片の接合を試みたが、口縁部付近が一部接合できたものの、全破片を接合することはできなかった。興味深い事例である。

(4) 19号住居址 (SB19) (第24図)

覆土：黒色土(1)が堆積していた。

壁面：壁高は約15cmを計る。

床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：3基確認した。

竈：北東の壁に付属し、構築材である石が検出された。焼土の堆積が見られた。

規模と形態：一辺4~4.5mの方角を呈する。

出土遺物と所属時期：出土した土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と考えられる。船壺様の器形を呈するものも出土している(第24図-1)。

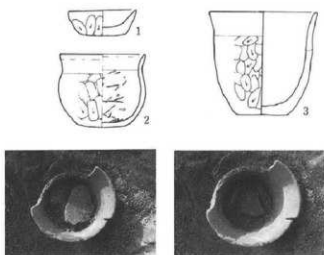
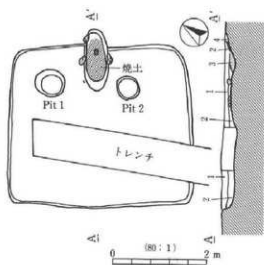
(5) 20号住居址 (SB20) (第25図)

調査の経過：調査の途中で平安時代のSK20との切り合いに気付く。

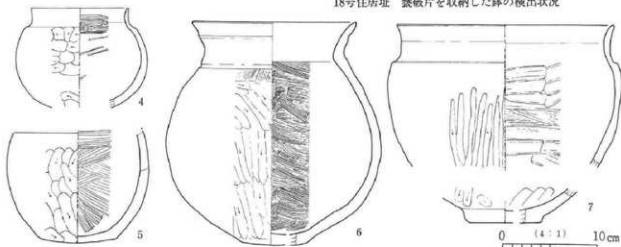
覆土：黒色土(1)が堆積していた。

壁面：壁高は約40cmを計る。

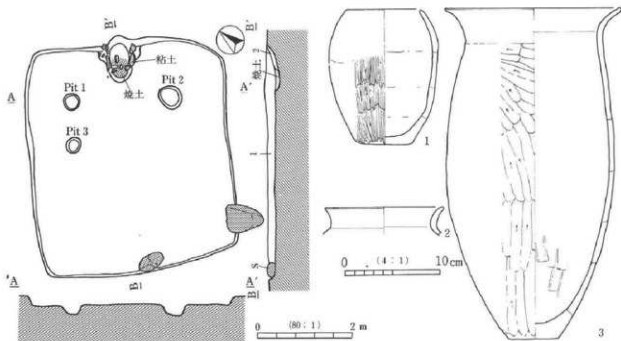
床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。



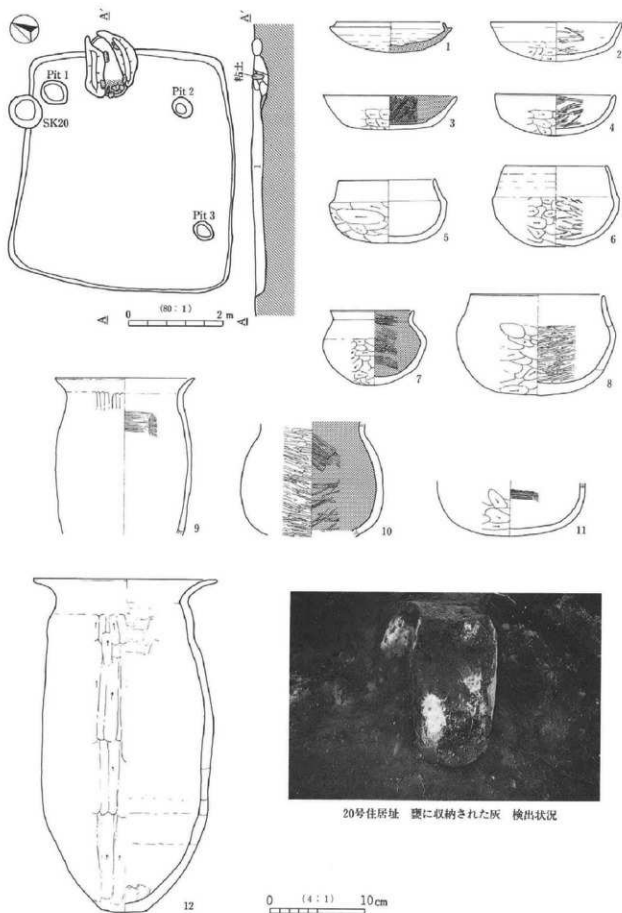
18号住居址 裏破片を収納した鉢の検出状況



第23図 18号住居址実測図及び出土遺物実測図



第24図 19号住居址実測図及び出土遺物実測図



第25図 20号住居址実測図及び出土遺物実測図

柱穴とビット：3基確認した。

竈：東壁に付属し、構築材である石と粘土が検出された。焼土の堆積が見られた。

規模と形態：一辺4.5m程度の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：出土した土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と考えられる。竈横から直立した状態で出土した長胴甕（第25図-12）の内部から灰が検出された（写真）。

(6) 22号住居址 (SB22) (第26図)

覆土：黒色土が堆積していた。

壁面：壁高は約10cmを計る。

床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：確認できなかった。

竈：北東壁に付属し、構築材である石と粘土が検出された。焼土の堆積が見られた。

規模と形態：一辺4m程度の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：出土した土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と考えられる。竈の焚き口付近に完形の鉢などが入れ子状態で設置されていた（写真）。当時の土器セットとして捉えられる良好な資料である。第26図-6は意図的に輪積み成形痕を残し、口縁部には指頭圧痕が残る。

(7) 24号住居址 (SB24) (第27図)

調査の経過：III層上面にて黒色土の落ち込みを確認したため、掘り下げた。全体に削平を受けており、竈周辺以外は既に失われている。

覆土：黒色土の堆積がみられる。

壁面：検出できなかった。

床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：確認できなかった。

竈：北西壁に付属し、構築材である石と粘土が検出された。焼土が厚く堆積していた。

規模と形態：壁と床面の大部分が削平を受けており、不明。

出土遺物と所属時期：出土した土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と考えられる。

(8) 25号住居址 (SB25) (第28図)

覆土：黒色土の堆積がみられる。

壁面：壁高は20cmを数える。

床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：3基確認できた。

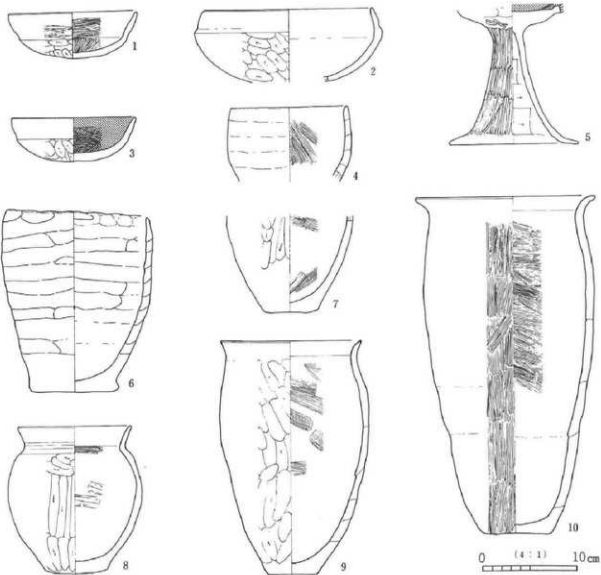
竈：東北壁に付属し、構築材である石と粘土が検出された。焼土が認められた。

規模と形態：北西側で攪乱を受けているが、一片5.5m程度の方形を呈すると推定される。

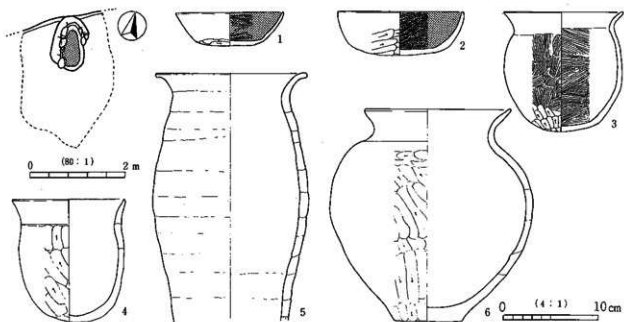
出土遺物と所属時期：出土した土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期の住居址と考えられる。



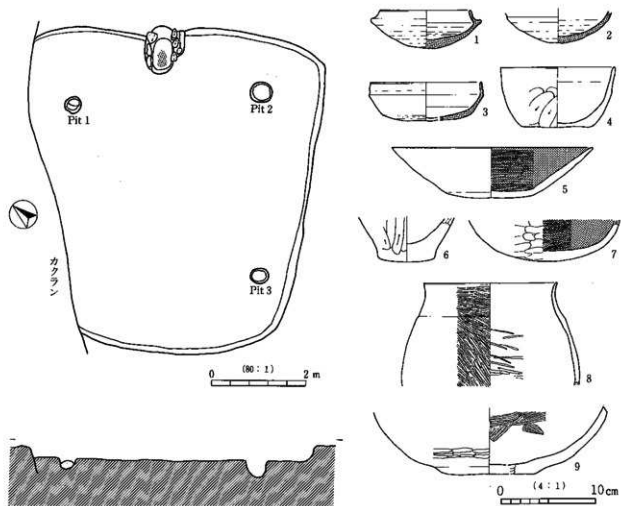
22号住居址 カマド内土器出土状況



第26図 22号住居址実測図及び出土物実測図



第27図 24号住居址実測図及び出土遺物実測図



第28図 25号住居址実測図及び出土遺物実測図

### 3 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は住居址が10軒検出された。良好な一括資料や加工された動物骨などを検出することが出来た。

#### (1) 2号・10号・13号住居址 (SB2・SB10・SB13) (第29～32図)

##### ① 2号住居址 (第29・30図)

覆土：黒色土(1)の堆積がみられる。

壁面：壁高は20cmを数える。

床面：黒色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：1基確認した。

竈：北西壁に付属し、構築材である石と粘土、および煙道が検出された。焼土が認められた。なお、人頭大の礫や平石が竈内から検出された。住居廃絶時に破壊されたらしい。

規模と形態：一辺4～5m程の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：住居址内に多量の礫や平石が投げ込まれたようである。その平石の上で坏が2点重なり出して出土している。また、鉄製刀子が1点出土した。これらの遺物から本址は平安時代(9世紀末～10世紀初頭)のものと考えられる。第29図-2は赤彩土器である。

##### ② 10号住居址 (第29・31図)

覆土：黒色土(2)の堆積がみられる。

壁面：壁高は25cmを数える。

床面：黒色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：2基検出した。なお、間仕切りの跡と思われる溝を検出した。

竈：東北壁に付属し、構築材である石と粘土、および煙道が検出された。多量の焼土が認められた。竈の南隣に焼土と粘土が確認できた。袖石は検出されなかったが、竈と同様の機能をもっていた施設なのかもしれない。

規模と形態：攪乱を受けているが、一辺5.5m程の方形を呈すると推定される。

出土遺物と所属時期：出土遺物は豊富である(第30図)。まず、緑釉陶器の壺の破片が2点、灰釉陶器の壺、碗、皿の破片が多量に出土している。それに、土師器・黒色土器の坏・壺の出土が多く、耳皿や皿も出土しているが、形の分かる甕などの煮炊き・貯蔵具の出土は見られない。墨書土器の量も多く、総点数15点のうち、「田上」が6点、「万」が4点となっている。他に、鉄製歯頭が床面直上で出土している。これらの遺物から本址は平安時代(9世紀末～10世紀初頭)のものと考えられる。

##### ③ 13号住居址 (第29・32図)

覆土：黒色土(3)の堆積がみられる。

壁面：壁高は20cmを数える。

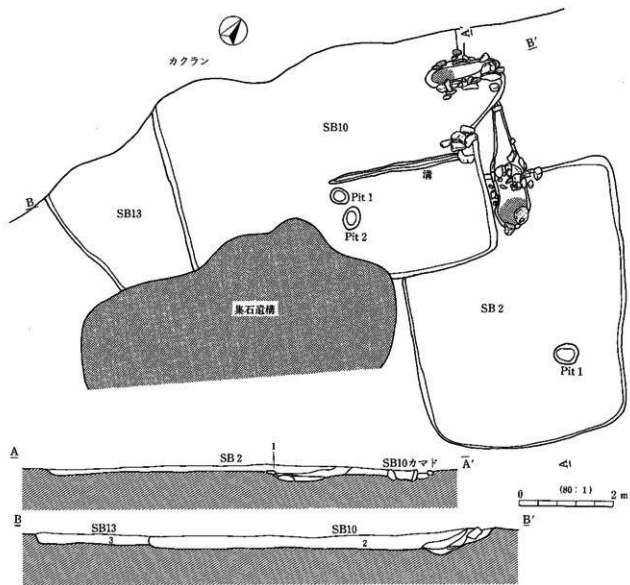
床面：黒色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：検出できなかった。

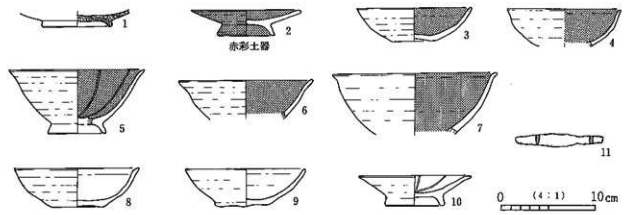
竈：検出できなかった。

規模と形態：SB10および時期不明の集石遺構に切られるため不明。

出土遺物と所属時期：堅緻面が認められたため、住居址と判断した。出土遺物から本址は平安時代(9世

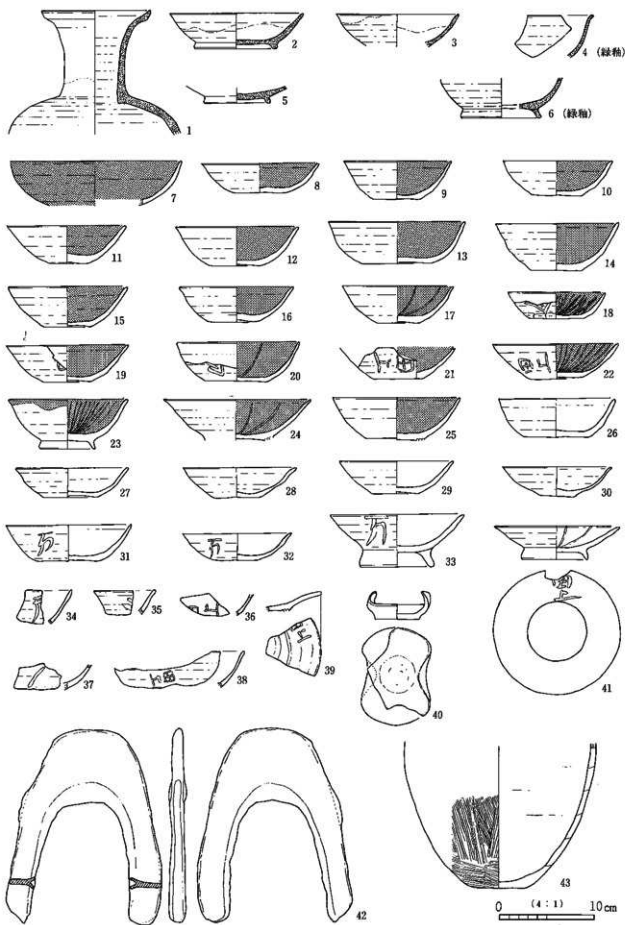


第29図 2号・10号・13号住居址実測図



第30図 2号住居址出土遺物実測図





第31图 10号住居址出土遗物实测图

紀末～10世紀初頭)のものと考えられる。

(2) 5号住居址 (SB5) (第33図)

覆土：黒色土の堆積がみられる。焼土粒が多量に混じる。

壁面：不明。

床面：黒色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：6基検出され、うち焼土を伴うビットが3基検出された。

竈：確認できなかったが、北壁に焼土を伴うPit4がみられる。

規模と形態：削平により壁が失われているため不明。現存している床は一辺7m程度の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：堅緻面が認められたため、住居址と判断した。ただし、焼土を伴うビットがみられ、

床面直上で火を受けた動物骨・歯や、切断痕のある鹿角が出土している。出土した動物骨の一部を図示した(第33図-6-11)が、大型獣と小動物の骨が混じっているようである。この遺構においてどのような行為が行われたのか。興味ある事例である。土器の出土は少なかつたが、鉄製刀子が1点出土した(第33図-5)。これらの遺物から本址は平安時代(9世紀末～10世紀初頭)のものと考えられる。動物骨等についても床面直上の出土であることからほぼ同時期のものとみなしたい。

(3) 6号・12号住居址 (SB6・SB12) (第34～36図)

6号住居址 (第34・35図)

覆土：黒色土の堆積がみられる。

壁面：壁高は10cmを数える。

床面：黒色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：確認できなかつた。

竈：確認できなかつた。

規模と形態：壁が検出できず、不明。

出土遺物と所属時期：堅緻面が認められたため、住居址と判断した。須恵器の短頸壺が出土している。こ

れらの遺物から本址は平安時代(9世紀末～10世紀初頭)のものと考えられる。

12号住居址 (第34・36図)

覆土：黒色土の堆積がみられる。

壁面：壁高は15cmを数える。

床面：黒色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：確認できなかつた。

竈：南東の壁に付属し、構築材である石と粘土が検出された。焼土が認められた。

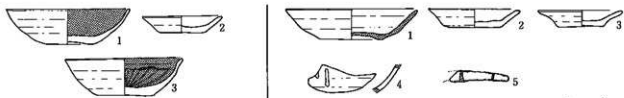
規模と形態：一辺4.5m程の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：出土遺物から本址は平安時代(9世紀末～10世紀初頭)のものと考えられる。

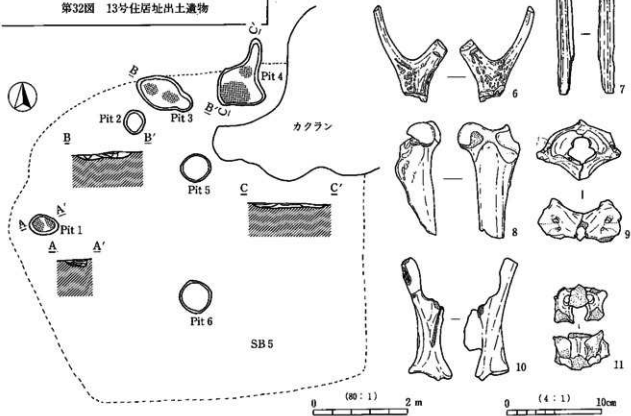
(4) 11号住居址 (SB11) (第37図)

覆土：黒色土(1)の堆積がみられる。

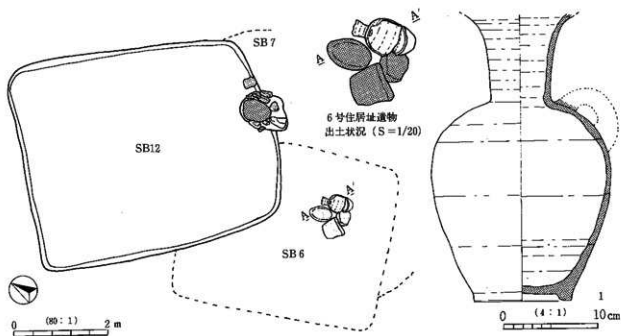
壁面：壁高は25cmを数える。



第32図 13号住居址出土遺物



第33図 5号住居址実測図及び出土遺物実測図



第34図 6号・12号住居址実測及び出土遺物実測図(1)

床面：黒色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：焼土を伴うビットが1基確認された。

竈：確認できなかったが、北東壁に焼土を伴うビットがみられる。

規模と形態：一辺2.5m程の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：堅緻面が認められたため、小型の住居址と判断した。住居焼絶後に多量の礫が投げ込まれたようである。遺物は完形の環が1点出土した以外は、ほとんどみられなかった。これらの遺物から本址は平安時代（9世紀末～10世紀初頭）のものと考えられる。

(5) 15号住居址 (SB15) (第38図)

覆土：黒色土(1)、褐色土(2)の堆積がみられる。黒色土(1)層中に焼土粒が多量に混じるほか、堅緻面上に1cm程度の厚さで焼土がみられた。

壁面：壁高は5cmを数える。

床面：黒褐色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：住居に付属すると思われるものは5基確認された。

竈：確認できなかった。

規模と形態：一辺3m程の隅丸方形を呈する。時期不明の畚状遺構16・17が貫通する。

出土遺物と所属時期：堅緻面が認められたため、小型の住居址と判断した。焼失住居址の可能性もある。

遺物は土器はほとんどなかったが、鉄製鎌が1点出土した。これらの遺物から本址は平安時代（9世紀末～10世紀初頭）のものと考えられる。

(6) 17号住居址 (SB17) (第39図)

調査の経過：SB8の調査中、竈を検出したため、遺構の存在に気付く。III層にて黒色土の落ち込みを確認したため、セクションベルトを設定し掘り下げた。

覆土：黒色土の堆積がみられる。

壁面：壁高は20cmを数える。

床面：黒色土を貼床し、堅緻面となっている。

柱穴とビット：1基確認した。

竈：南西の壁に付属し、構築材である石が検出された。焼土が認められた。いわゆる「コーナー竈」である。

規模と形態：一辺3.5m程の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：出土遺物から本址は平安時代（9世紀末～10世紀初頭）のものと考えられる。

(7) 26号住居址 (SB26) (第40図)

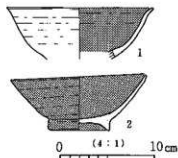
調査の経過：SB23の調査中に堅緻面を検出したため、遺構の存在に気付く。

覆土：黒色土の堆積がみられる。

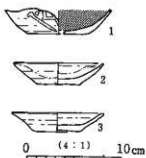
壁面：壁高は5cmを数える。

床面：黒色土を貼床し、堅緻面となっている。

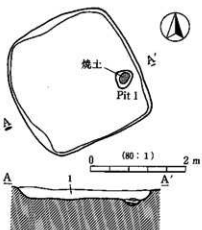
柱穴とビット：焼土を伴うビットを1基確認した。



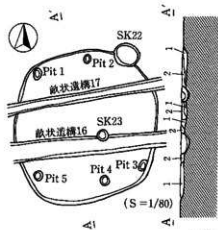
第35図 6号住居址出土遺物実測図(2)



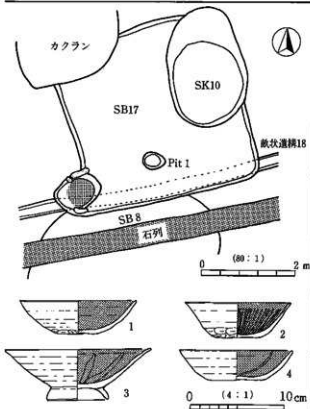
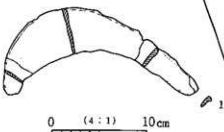
第36図 12号住居址出土遺物実測図



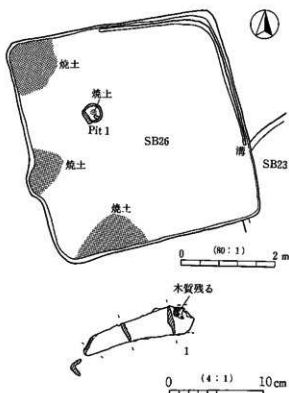
第37図 11号住居址及び出土遺物実測図



第38図 15号住居址実測図及び出土遺物実測図



第39図 17号住居址及び出土遺物実測図



第40図 25号住居址及び出土遺物実測図

竈：確認できなかったが、北壁隅の縦断面の直上に層厚3cm程度の焼土の集中を認めた。また、他に2ヵ所の床面上から焼土を検出した。

規模と形態：一辺5m程の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：少量の土師器・須恵器破片と鉄製鎌が1点出土した。これらの遺物から本址は平安時代（9世紀末～10世紀初頭）のものと考えられる。

#### (8) 20号土坑址 (SK20) (第41図)

調査の経過：SB20の調査中、埋設された甕の一部を検出し、遺構の存在に気付く。

覆土：褐色土(1)と黒褐色土(2)、黒色土(3)の堆積がみられる。

規模と形態：直径60cm程の円形を呈する。

出土遺物と所属時期：球形胴の甕の胴部～底部が埋設されていた。この遺物から本址は平安時代（9世紀末～10世紀初頭）のものと考えられる。

### 4 中世の遺物 (第42図)

今回の調査で2枚の北宋銭が出土した。耕作土中からの発見で、遺構には伴わない。第42図-1は「聖宋元宝」で铸造開始年代は西暦1101年（北宋・建中靖国元年）である。第42図-2はやや判読に苦するが、「明道元宝」と思われ、西暦1023年（北宋・明道元年）から铸造が開始された。

### 5 時期不明の遺構

ここでは所属時期が不明な遺構を一括して紹介する。

#### (1) 1号掘立柱建物址 (ST1) (第43図)

13基のピットを掘立柱建物址の柱穴又は支柱穴として認識した。遺物の出土がなく、時期は不明。ピットは5×5m程度の正方形内に配置されている。

#### (2) 2号掘立柱建物址 (ST2) (第44図)

12基のピットを掘立柱建物址の柱穴又は支柱穴として認識した。遺物の出土がなく、時期は不明。ピットは5×3m程度の長方形内に配置されている。

#### (3) 石列遺構 (第45図)

I区において、ほぼ東西に延びる石列遺構が検出された。平安時代のSB15を切っているもので、それ以降の所産であるが、伴出遺物が皆無で、時期決定はできない。検出された部分は約47mであったが、南東方向にもっと延びている可能性がある。畝状に掘った溝のなかに礫を入れて作られており、また、後述する畝状遺構と平行に形成され、関連する遺構であると思われるが、用途については不明である。

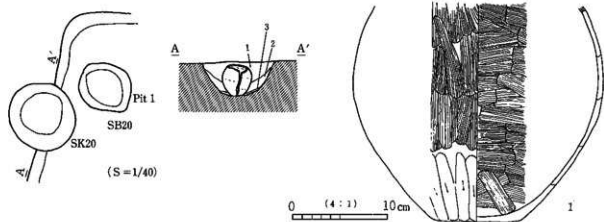
#### (4) 畝状遺構1～23 (第46図)

I区において、ほぼ東西に延びる畝状遺構が検出された。それぞれ長さは異なるが、土層の堆積状況や平行に並んでいる点から同時に機能していたと思われる。どの畝状遺構も、底部付近に黒褐色の固くて、プロ

ック状になった土が堆積していた。遺構は畑の耕作などに伴うものであろうが、正確な用途については不明である。畝状遺構の覆土から土師器片などとともに青磁の小破片1点が出土しているが、時期決定に使用できるかいささが不安である。

(5) 集石遺構 (第47図)

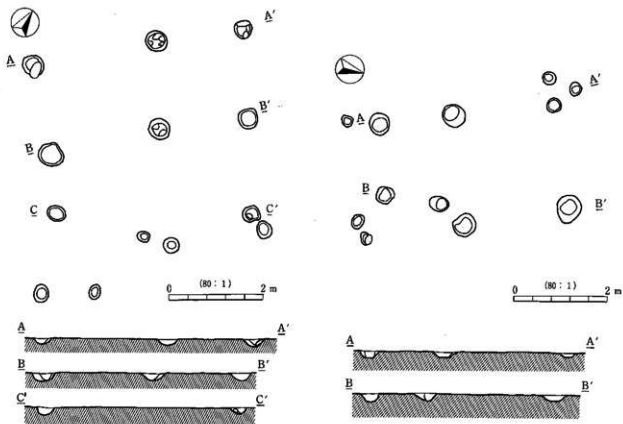
平安時代のSB10・SB13を切っているので、それ以降の所産であるが、伴出遺物に乏しく、明確な時期決定はできない。竪大から人頭大の礫を8.5×3mの範囲に集積している。調査期間の関係で縦断面の作成をあきらめたが、約1.5m幅で階段状にわずかに段をつけており、一番低い部分には他の部分よりも小さめの石を多く使っている。用途は不明であるが、暗きょうのようなものか。



第41图 20号土坑实测图及出土遗物实测图



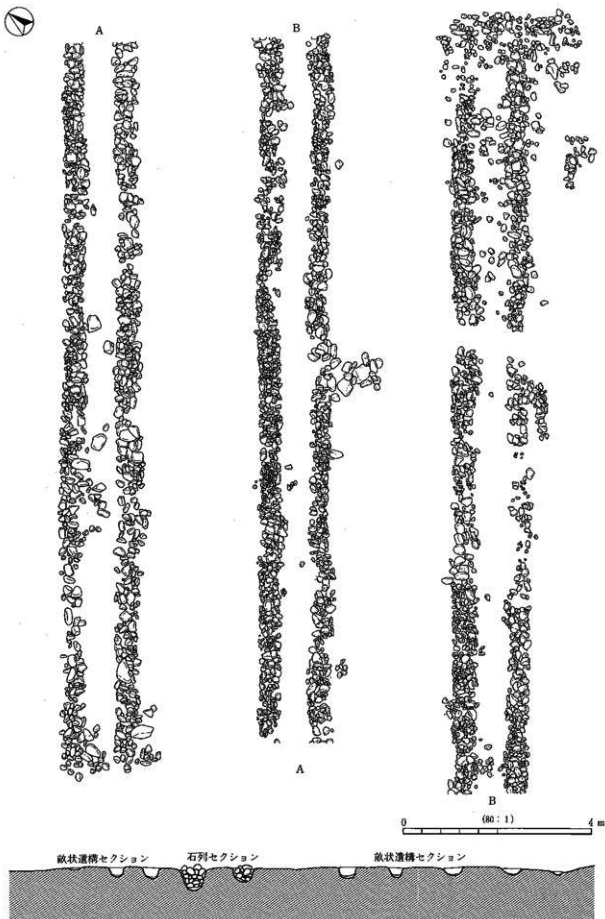
第42图 中世渡来銭拓影 (S=1/1)



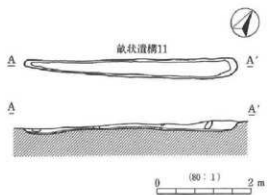
第43图 1号掘立柱建物址实测图

第44图 2号掘立柱建物址实测图

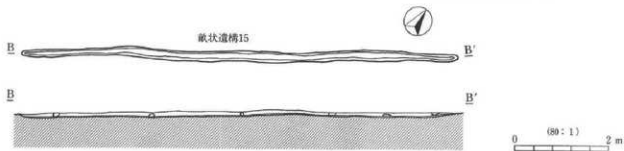




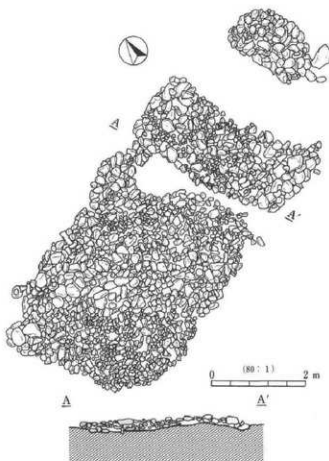
第45図 石列実測図



石列と畝状遺構（南西から）



第46図 畝状遺構実測図



集石遺構（西から）



集石遺構（南から）

第47図 集石遺構実測図

## 第4章 遺物観察結果一覧表

1 四日市遺跡D地区 縄文土器観察結果一覧表(図版掲載個体のみ) ※半載竹管(a)等は第5章での分類基準による

図版 番号	出土地点	器種	部位	器形および文様	繊維	色調		焼成	備考
						外面	内面		
5-1	SB7覆土	深鉢	胴部	半載竹管(b)	微量	黒褐色	黒褐色	○	
5-2	SB7覆土	深鉢	口縁部	竹管状工具による沈線、 羽状縄文LRとRL	有	褐色	褐色	○	
5-3	SB7覆土	深鉢	胴部	網目状撫糸文	有	黒褐色	黒褐色	○	
5-4	SB7覆土	深鉢	口縁部	正反の合あるいはRL・rとLR・εの 附加来の羽状縄文、コンパス文	微量	鈍い黄褐	鈍い黄褐	○	
5-5	SB7覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(a)	微量	明赤褐色	明赤褐色	○	
5-6	SB7覆土	深鉢	口縁部	爪形文	有	鈍い赤褐	褐色	○	
5-7	SB7覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(a)、刻みの入る縦の隆帯	無	鈍い黄褐	明黄褐色	○	
5-8	SB7覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(a)	無	鈍い黄褐	鈍い黄褐	○	
5-9	SB7覆土	深鉢	口縁部	半載竹管による平行沈線、爪形文	無	褐色	明赤褐色	○	
5-10	SB7覆土	深鉢	口縁部	爪形文	無	鈍い黄褐	鈍い黄橙	○	
5-11	SB7覆土	深鉢	胴部	半載竹管(a)、円形刺突、瘤状貼付文、 縄文LR	無	黒褐色	黒褐色	○	
5-12	SB7覆土	深鉢	胴部	半載竹管(b)、縦の隆帯	無	鈍い黄褐	鈍い黄橙	○	
6-1	SB8覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(b)	微量	褐色	褐色	○	
6-2	SB8覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(b)、原体竹管以外のものか?、 RL・LRの羽状縄文	有	明褐色	褐色	○	
6-3	SB8覆土	深鉢	胴部	半載竹管(c)、縄文LR	微量	明褐色	明褐色	○	
6-4	SB8覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(c)	微量	灰黄褐色	灰黄褐色	○	
6-5	SB8覆土	深鉢	胴部	半載竹管(c)、菱形の中心部まで延び る隆帯	無	灰褐色	赤褐色	○	
6-6	SB8覆土	深鉢	胴部	半載竹管(c)、RL・LRの羽状縄文	微量	褐色	明褐色	○	
6-7	SB8覆土	深鉢	口縁部	櫛状施工具による刺突列	微量	赤褐色	赤褐色	○	
6-8	SB8覆土	深鉢	胴部	平行沈線+櫛(f)	微量	褐色	褐色	○	
6-9	SB8覆土	深鉢	胴部	平行沈線+櫛(f)、刺突の原体2種類	微量	褐色	褐色	○	
6-10	SB8覆土	深鉢	胴部	平行沈線+櫛(f)	微量	明褐色	明褐色	○	
6-11	SB8覆土	深鉢	胴部	平行沈線+櫛(f)	微量	黒褐色	黒褐色	○	
6-12	SB8覆土	深鉢	胴部	平行沈線+櫛(f)	有	赤褐色	赤褐色	○	
6-13	SB8覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(a)	微量	褐色	褐色	○	

図版 番号	出土地点	器種	部位	器形および文様	繊維	色調		焼 成	備 考
						外 面	内 面		
6-14	SB 8 覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(a)、波状口縁の頂部に突起	無	橙	橙	○	
6-15	SB 8 覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(a)	微量	黒褐色	黒褐色	○	
6-16	SB 8 覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(a)、地文に縹糸文?、口唇部に刻み	有	明褐色	明褐色	○	
6-17	SB 8 覆土	深鉢	胴部	縹糸文か?	微量	褐色	明褐色	○	
6-18	SB 8 覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(d)	微量	明褐色	明褐色	○	
6-19	SB 8 覆土	深鉢	胴部	半截竹管(b)	有	橙	橙	○	
6-20	SB 8 床	深鉢	口縁部	半截竹管(e)、口唇部に突起	有	灰褐色	鈍い黄橙	○	
6-21	SB 8 覆土	深鉢	胴部	半截竹管(d)	有	鈍い黄橙	鈍い黄橙	○	
6-22	SB 8 覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(d)、地文に縄文LR	有	鈍い黄橙	黄褐色	○	
6-23	SB 8 覆土	深鉢	口縁部	緩い波状口縁、原体の長い縄文LR	微量	明褐色	明褐色	○	
6-24	SB 8 覆土	深鉢	口縁部	緩い波状口縁、縄文LR	微量	鈍い黄橙	鈍い黄褐	○	
6-25	SB 8 覆土	深鉢	口縁部	縄文LR	無	灰褐色	鈍い黄褐	○	
6-26	SB 8 覆土	深鉢	胴部	附加条RL・rとLR・ℓの羽状縄文?	有	鈍い黄褐	褐色	○	
6-27	SB 8 覆土	深鉢	底部	底部に縄文LR	有	赤褐色	褐色	○	
6-28	SB 8 覆土	深鉢	口縁部	縄文RL、円形刺突、口唇部に刻み	無	灰褐色	鈍い黄褐	○	
6-29	SB 8 覆土	深鉢	胴部	縄文LR	有	暗赤褐色	褐色	○	
6-30	SB 8 覆土	深鉢	胴部	RL・LRの羽状縄文	微量	鈍い黄褐	褐色	○	
6-31	SB 8 覆土	深鉢	胴部	半截竹管(c)	無	暗赤褐色	暗赤褐色	○	
8-1	SB23 床	深鉢	口～胴	細身で円筒形の深鉢、縄文LR 口径19.0/器高(21.0)/底径 - cm	無	暗褐色	灰褐色	○	
8-2	SB23 床	深鉢	光 形	縄文LRとRL崩れた羽状構成 口径17.0/器高17.6/底径8.0cm	無	鈍い黄褐	赤褐色	○	
8-3	SB23 床	深鉢	胴～底	半截竹管による条痕様の文様 口径 - /器高(12.8)/底径10.4cm	有	橙	鈍い黄褐	○	
8-4	SB23 床	深鉢	胴部	縄文RLとLR崩れた羽状構成 口径 - /器高(35.2)/底径 - cm	有	鈍い赤褐	赤褐色	○	
8-5	SB23覆土	深鉢	胴部	原体の長い縄文RL 口径 - /器高(29.2)/底径 - cm	無	鈍い褐色	橙	○	
8-6	SB23覆土	深鉢	口～胴	縄文LR、緩い波状口縁	有	鈍い黄褐	褐色	○	
9-1	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(a)、縄文RL	有	鈍い黄褐	鈍い黄褐	○	

図版 番号	出土地点	器種	部位	器形および文様	繊維	色調		焼成	備考
						外面	内面		
9-2	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(a)、縄文LR	有	鈍い褐色	鈍い褐色	○	
9-3	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(c)、地文にRLとLRの羽状縄文	微量	鈍い赤褐色	赤褐色	○	
9-4	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(c)、地文に縄文RL	有	橙	明褐色	○	
9-5	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(c)	微量	明褐色	明褐色	○	
9-6	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(c)、縄文LR	有	灰褐色	灰褐色	○	
9-7	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(c)	有	褐色	鈍い黄褐色	○	
9-8	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(a)、口縁部は縦方向	微量	鈍い褐色	褐色	○	
9-9	SB23覆土	深鉢	胴部	半截竹管(c)、縄文RL	有	橙	橙	○	
9-10	SB23覆土	深鉢	胴部	RLとLRの羽状縄文	有	明黄褐色	灰黄褐色	○	
9-11	SB23覆土	深鉢	口縁部	縄文LR	有	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	○	
9-12	SB23覆土	深鉢	胴部	半截竹管による平行沈線2組、柳による沈線で渦巻きを描く	有	灰褐色	褐色	○	
9-13	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(a)、崩れた菱形構成?	無	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	○	
9-14	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(a)	無	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	○	
9-15	SB23覆土	深鉢	胴部	柳状施文具による沈線+刺突	無	鈍い褐色	鈍い黄褐色	○	
9-16	SB23覆土	深鉢	胴部	半截竹管(b)+帯の刺突で菱形構成	無	鈍い褐色	黒褐色	○	
9-17	SB23覆土	深鉢	胴部	半截竹管(c)、LRとRLの羽状縄文	無	褐色	褐色	○	
9-18	SB23覆土	深鉢	口縁部	縄文RL	無	橙	橙	○	
9-19	SB23覆土	深鉢	口縁部	節の大きな縄文RL	無	褐色	褐色	○	
9-20	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(c)	有	明黄褐色	鈍い黄褐色	○	
9-21	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(c)+連続爪形文、口縁部放射状	有	鈍い黄褐色	赤褐色	○	
9-22	SB23覆土	深鉢	口縁部	半截竹管(a)、口唇刻み	無	黒褐色	黒褐色	○	
9-23	SB23覆土	深鉢	胴部	半截竹管(c)、地文にLRとRLの羽状縄文	無	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	○	
9-24	SB23覆土	深鉢	胴部	半截竹管(c)、縄文RLの磨消縄文、赤彩	無	鈍い赤褐色	褐色	○	
9-25	SB23覆土	深鉢	口縁部	連続爪形文、刺突列、半截竹管による平行沈線、口唇部に刻み	無	灰黄褐色	灰黄褐色	○	製入:北白川下層Ⅱ式
10-1	SK 1 床	深鉢	口縁部	半截竹管(a)	微量	褐色	鈍い黄褐色	○	
10-2	SK 1 覆土	深鉢	口縁部	LR・RLの羽状縄文	有	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	○	
10-3	SK 1 床	深鉢	口縁部	半截竹管(a)	無	灰黄褐色	褐色	○	

図版 番号	出土地点	器種	部 位	器 形 お よ び 文 様	織維	色 調		焼 成	備 考
						外 面	内 面		
10-4	SK1 覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(a)	無	鈍い黄橙	鈍い黄橙	○	
10-5	SK1 覆土	深鉢	底 部	縄文LR・RLの羽状縄文	無	赤褐色	赤褐色	○	
11-2	SK2 覆土	深鉢	口縁部	縄文LR	有	褐色	褐色	○	
11-3	SK2 覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(a)	無	灰褐色	灰褐色	○	
11-4	SK2 覆土	深鉢	胴 部	半載竹管(a)	無	鈍い黄橙	鈍い黄橙	○	
12-1	SK19覆土	深鉢	口縁部	網目状燃糸文	有	灰黄褐色	灰黄褐色	○	
12-2	SK19覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(c)	有	鈍い黄褐	鈍い黄褐	○	
12-3	SK19覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(d)	有	明褐色	明褐色	○	
12-4	SK19覆土	深鉢	胴 部	半載竹管(e)、縄文LR・RLの羽状縄文	微量	明褐色	明褐色	○	
12-5	SK19覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(a)	無	鈍い黄褐	黄褐色	○	
12-6	SK19覆土	深鉢	口縁部	半載竹管(a)変形構成	無	鈍い褐色	鈍い褐色	○	
12-7	SK19覆土	深鉢	口~胴	半載竹管(e)、縄文LR・RLの羽状縄文	無	鈍い橙	鈍い橙	○	
13-1	SK21 床	深鉢	口~胴	連続爪形文、刺突列、半載竹管による平行沈線、縄文LR・RLの羽状縄文、口唇部に刻み口径24.4/器高(19.8)/底径 - cm	無	鈍い黄褐	黒褐色	○	掘入： 北白川下 層II式
14-1	SK24 床	深鉢	口~胴	波状口縁、口唇にタガ状の隆帯、特殊な結節	有	褐色	褐色	○	
14-2	SK24 床	深鉢	口縁部	縄文RL、緩い波状口縁、口唇部に刻み	有	灰黄褐色	暗褐色	○	
14-3	SK24 床	深鉢	胴 部	特殊な結節の縄文	有	灰黄褐色	黄褐色	○	
14-4	SK24 床	深鉢	口縁部	指頭形痕残る	有	黒褐色	鈍い黄橙	○	
15-1	遺構外	深鉢	口~胴	半載竹管(a)、縄文LR・RLの羽状縄文、口唇部に2つの突起	有	灰褐色	褐色	○	
15-2	遺構外	深鉢	胴 部	コンパス文、縄文LR・RLの羽状縄文	微量	鈍い黄褐	褐色	○	
15-3	遺構外	深鉢	口縁部	半載竹管(c)+半載竹管(c)、波状口縁	有	褐色	鈍い黄褐	○	
15-4	遺構外	深鉢	口縁部	半載竹管(a)、縄文LR・RLの羽状縄文、頸部無文帯、波状口縁	有	黒褐色	鈍い黄橙	○	
15-5	遺構外	深鉢	口縁部	半載竹管(d)、縄文RL	有	鈍い黄橙	黒褐色	○	
15-6	遺構外	深鉢	口縁部	半載竹管(e)	微量	鈍い黄橙	鈍い黄橙	○	
15-7	遺構外	深鉢	口縁部	半載竹管(a)、縄文LR・RLの羽状縄文、緩い波状口縁	微量	黒褐色	暗褐色	○	
15-8	遺構外	深鉢	口縁部	半載竹管(c)、半載竹管による平行沈線、縄文RL	微量	鈍い黄橙	鈍い黄橙	○	

図版 番号	出土地点	器種	部 位	器 形 お よ び 文 様	織維	色 調		焼 成	備 考
						外 面	内 面		
15-9	遺構外	深鉢	口縁部	連続爪形文、突起	有	鈍い褐色	褐色	○	
15-10	遺構外	深鉢	口縁部	半截竹管(e)	有	橙	橙	○	
15-11	遺構外	深鉢	口縁部	柵による連続刺突、縄文LR・RLの羽状縄文	無	黒褐色	黒褐色	○	
15-12	遺構外	深鉢	口縁部	半截竹管による平行沈線+爪形文(半截竹管cとは違う)、波状口縁	無	鈍い黄橙	鈍い黄橙	○	
15-13	遺構外	深鉢	口縁部	半截竹管(a)、円形刺突、口唇部に刻み	無	鈍い黄橙	鈍い黄橙	○	
15-14	遺構外	深鉢	口縁部	半截竹管(a)菱形構成、隆帯上に連続刺突、縄文LR・RLの羽状縄文	無	灰黄褐色	鈍い黄橙	○	
15-15	遺構外	深鉢	口縁部	半截竹管(d)、波状口縁	無	鈍い黄褐	鈍い黄褐	○	
15-16	遺構外	深鉢	口縁部	半截竹管(b)、肋骨文ふうの沈線、縦の隆帯、口唇部に刻み、裏面に半截竹管(c)	無	褐色	赤褐色	○	
15-17	遺構外	深鉢	口縁部	半截竹管(b)、肋骨文、波状口縁	無	鈍い黄橙	鈍い黄橙	○	
15-18	遺構外	深鉢	口縁部	半截竹管(d)、波状口縁	無	鈍い褐色	鈍い褐色	○	
15-19	遺構外	深鉢	胴 部	半截竹管(c)	無	黒褐色	褐色	○	
15-20	遺構外	深鉢	口縁部	折り返し口縁、刻みのある隆帯、穿孔	無	明黄褐色	明黄褐色	○	
15-21	遺構外	深鉢	胴 部	磨消縄文RL	無	黒褐色	褐色	○	
15-22	遺構外	深鉢	胴 部	磨消縄文LR	無	黒褐色	褐色	○	
15-23	遺構外	深鉢	胴 部	半截竹管による平行沈線+柵による渦巻き、縄文RL	無	鈍い黄橙	鈍い黄橙	○	
15-24	遺構外	深鉢	胴 部	半截竹管(c)	無	褐色	褐色	○	
15-25	遺構外	深鉢	胴 部	半截竹管(c)	無	褐色	褐色	○	
15-26	遺構外	深鉢	胴 部	半截竹管(c)	無	褐色	褐色	○	
15-27	遺構外	深鉢	胴 部	半截竹管(c)、磨消縄文LR	無	赤褐色	赤褐色	○	
19-1	遺構外	深鉢	胴 部	縄文RL、沈線	無	明褐色	明褐色	○	
19-2	遺構外	深鉢	胴 部	縄文LR・RL	無	明黄褐色	明黄褐色	○	
19-3	遺構外	深鉢	口縁部	縄文LR	無	鈍い褐色	鈍い褐色	○	
20-1	遺構外	深鉢	口縁部	波状口縁、細密条痕	無	明褐色	明褐色	○	
20-2	遺構外	深鉢	口縁部	波状口縁、浮線文、口外帯	無	褐色	暗赤褐色	○	
20-3	遺構外	深鉢	口縁部	波状口縁、浮線文	無	鈍い黄橙	灰黄褐色	○	
20-4	遺構外	深鉢	口縁部	波状口縁、無文の粗製土器	無	鈍い黄橙	灰黄褐色	○	

## 2 四日市遺跡D地区 縄文時代石器観察結果一覧表 (図版掲載個体のみ)

図版 番号	出土地点	器 種	材 質	法 量				特 記 事 項
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
5-13	SB7覆土	石 匙	頁 岩	5.5	2.9	0.7	14.0	片刃・つまみ部2ヶ
5-14	SB7覆土	石 匙	頁 岩	5.6	3.3	1.0	14.0	片刃
5-15	SB7覆土	石 匙	頁 岩	5.5	2.8	0.8	9.0	片刃
5-16	SB7覆土	石 匙	赤チャート	3.2	2.7	0.6	5.0	片刃・つまみ部欠損
5-17	SB7覆土	石 鏃	黒曜石	2.2	1.4	0.5	0.9	凹基
5-18	SB7覆土	敲・磨石	安山岩	16.5	6.2	3.8	510.0	
5-19	SB7覆土	磨 石	花崗岩	11.4	9.6	5.2	595.0	
7-1	SB8覆土	石 鏃	黒曜石	2.2	1.4	0.5	0.9	平基
7-2	SB8覆土	石 匙	頁 岩	3.4	4.6	0.7	9.5	
7-3	SB8覆土	刃 器	黒曜石	4.5	1.4	1.1	5.0	
7-4	SB8 床	敲 石	玄武岩	7.2	9.2	3.6	280.0	縁辺の潰れが著しい
7-5	SB8覆土	砥 石	砂 岩	6.6	1.5	0.6	10.0	側面も使用
7-6	SB8覆土	打製石斧	玄武岩	9.9	5.0	1.3	83.0	刃部の磨耗著しい
7-7	SB8覆土	敲・磨石	花崗岩	10.8	7.6	3.9	425.0	側面に敲打痕
7-8	SB8 床	石 皿	花崗岩	23.0	10.0	4.0	980.0	半欠
9-26	SB23覆土	石 匙	頁 岩	5.0	3.5	0.5	10.0	両刃
9-27	SB23覆土	石 鏃	黒曜石	2.0	1.3	0.3	0.5	凹基・先端部欠損
9-28	SB23覆土	石 鏃	黒曜石	2.0	1.2	0.3	0.5	凹基・かえし部欠損
9-29	SB23覆土	石 匙	頁 岩	2.8	3.0	0.7	5.0	
9-30	SB23覆土	石 匙	頁 岩	6.5	4.1	0.8	21.0	片刃・つまみ2ヶ?
9-31	SB23覆土	石 鏃	頁 岩	4.3	4.4	0.9	13.0	
11-1	SK2覆土	石 皿	花崗岩	37.5	26.3	11.4	13.7kg	完形
15-28	遺構外	石 鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.5	凹基・かえし部欠損
15-29	遺構外	石 鏃	頁 岩	1.9	1.6	0.3	0.9	凹基
15-30	遺構外	石 鏃	黒曜石	1.4	1.3	0.2	0.3	凹基
15-31	遺構外	石 鏃	頁 岩	1.7	1.3	0.3	0.4	凹基
15-32	遺構外	石 鏃	黒曜石	2.0	1.6	0.3	0.5	凹基



図版 番号	出土地点	器 種	材 質	法 量				特 記 事 項
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
15-33	遺構外	石 鏃	頁 岩	2.4	1.6	0.3	1.1	凹基
15-34	遺構外	石 鏃	黒曜石	2.3	1.6	0.4	1.0	かえし部欠損
15-35	遺構外	石 鏃	黒曜石	1.7	1.3	0.2	0.4	凹基
15-36	遺構外	石 鏃	頁 岩	4.9	1.2	0.5	3.2	
15-37	遺構外	石 鏃	頁 岩	3.5	0.9	0.5	2.7	
15-38	遺構外	石 鏃	黒曜石	0.8	1.7	0.3	0.4	凹基・先端部欠損
15-39	遺構外	石 匙	頁 岩	2.5	1.3	0.3	1.0	両刃
16-1	遺構外	石 匙	砂 岩	4.9	2.8	0.5	10.5	片刃
16-2	遺構外	石 匙	頁 岩	8.4	2.8	1.0	22.0	片刃
16-3	遺構外	石 匙	頁 岩	4.3	2.9	0.8	7.0	片刃
16-4	遺構外	石 匙	頁 岩	4.0	2.8	0.6	5.0	片刃
16-5	遺構外	石 匙	頁 岩	4.3	2.6	0.6	5.0	片刃
16-6	遺構外	石 匙	頁 岩	6.3	3.3	0.6	12.0	片刃
16-7	遺構外	石 匙	赤チャート	6.7	2.7	1.7	12.0	縦型・片刃 欠損
16-8	遺構外	横刃型石器	砂 岩	7.7	6.5	0.8	44.0	片刃
16-9	遺構外	石 匙	頁 岩	5.1	5.0	0.9	1.0	縦型・片刃
16-10	遺構外	横刃型石器	玄武岩	8.1	7.3	1.6	81.0	両刃
16-11	遺構外	ナイフスレイバー	砂 岩	7.5	3.5	1.1	35.0	自然面を残す
16-12	遺構外	打製石斧	玄武岩	6.2	5.6	1.5	58.0	片刃・欠損
16-13	遺構外	打製石斧	玄武岩	8.6	3.9	1.5	50.0	両刃
16-14	遺構外	打製石斧	玄武岩	9.3	3.7	2.3	78.0	両刃
17-1	遺構外	打製石斧	玄武岩	12.0	6.4	2.4	192.0	自然面残す・刃磨耗
17-2	遺構外	打製石斧	玄武岩	10.7	4.6	2.1	114.0	両刃
17-3	遺構外	打製石斧	玄武岩	11.1	4.6	1.9	122.0	両刃
17-4	遺構外	打製石斧	玄武岩	40.2	5.2	2.2	135.0	両刃
17-5	遺構外	打製石斧	玄武岩	12.2	5.5	1.7	160.0	両刃・刃磨耗著しい
17-6	遺構外	磨製石斧	蛇紋岩	5.5	5.3	2.3	107.0	両刃
17-7	遺構外	磨製石斧	チャート	21.8	5.9	3.9	630.0	両刃・刃磨耗著しい

図版 番号	出土地点	器 種	材 質	法 量				特 記 事 項
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
17-8	遺構外	磨製石斧	チャート	10.2	4.4	2.2	160.0	刃部欠損
17-9	遺構外	磨製石斧	チャート	10.9	4.8	3.4	254.0	両刃・欠損
17-10	遺構外	磨製石斧	チャート	5.6	3.2	0.8	22.0	刃部欠損
17-11	遺構外	磨製石斧	チャート	13.0	4.6	2.9	262.0	刃部欠損
17-12	遺構外	磨製石斧	チャート	9.0	6.1	3.0	284.0	片刃・刃部欠損
17-13	遺構外	磨 石	花崗岩	11.0	5.9	3.5	290.0	
17-14	遺構外	軽石製品	軽 石	8.9	5.6	1.4	12.0	全体形不明
17-15	遺構外	軽石製品	軽 石	4.3	4.9	1.0	3.0	全体形不明
18-1	遺構外	塊状耳飾り	滑石?	5.6	6.6	0.4	19.0	補修孔あり 欠損
18-2	遺構外	塊状耳飾り	滑 石	5.2	3.2	0.4	12.0	半欠

### 3 四日市遺跡D地区 古代土器観察結果一覧表

番号	出土地点	器種	種 類	色 調	胎 土	製作技法の特徴	法 量			現存率
							口徑	底径	器高	
29-1	SB2覆土	埴	灰釉陶器	灰色		ロクロ	—	7.6	1.6	1/5
29-2	SB2竈内	皿B	赤彩土器	明赤褐色	内外面にベン ガラ付着	ロクロ、内外面に赤彩痕	11.6	6.2	2.7	2/3
29-3	SB2覆土	坏A	黒色土器A	明赤褐色		ロクロ、底部糸切 内)黒色処理	12.2	4.6	3.5	3/4
29-4	SB2竈内	皿B	土師器	暗褐色		ロクロ 内)暗文5条	12.0	6.2	3.2	2/3
29-5	SB2覆土	埴	黒色土器A	明黄褐色		ロクロ、底部糸切 内)黒色処理、暗文6条	14.6	6.2	6.9	1/2
29-6	SB2覆土	坏A	黒色土器A	明黄褐色		ロクロ 内)黒色処理、縦方向ミガキ	14.4	—	4.2	1/2
29-7	SB2覆土	鉢	黒色土器A	明黄褐色		ロクロ 内)黒色処理、横方向ミガキ	17.2	—	6.4	1/4
29-8	SB2覆土	坏A	土師器	鈍い黄褐		ロクロ、底部糸切 内)縦方向ミガキ	13.4	5.6	4.2	2/3
29-9	SB2覆土	坏A	土師器	鈍い黄褐		ロクロ、底部糸切、表面 調整荒い	13.0	6.0	4.0	3/4
29-10	SB2覆土	坏A	黒色土器A	鈍い黄褐		ロクロ 内)黒色処理	12.0	—	4.0	1/4
32-1	SB5覆土	坏A	軟質須志器	黄灰色		ロクロ	13.6	6.6	3.2	1/5
32-2	SB5覆土	皿A	土師器	明黄褐色	白雲母を多く 含む	ロクロ	9.6	6.2	2.0	完
32-3	SB5覆土	皿A	土師器	暗褐色	白雲母を多く 含む	ロクロ	9.2	5.0	1.8	1/2

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	製作技法の特徴	法量			残存率
							口径	底径	器高	
33-1	SB6 床	須恵器A	須恵器	青灰色	白色粒子を多く含む、断面は褐色	ロクロ	-	10.4	-	3/4
34-1	SB6 覆土	埴	黒色土器A	明褐色		ロクロ内) 黒色処理	15.6	-	-	1/6
34-2	SB6 床	埴	黒色土器B	黒	白雲母・チョウ石砂粒を多く含む	ロクロ内外面黒色処理	14.4	6.4	5.6	3/4
20-1	SB9 覆土	坏D	須恵器	灰色		ロクロ	9.8	丸底	3.2	完
20-2	SB9 床	坏D	土師器	明黄褐色	砂粒を多く含む	外) 体-底部磨削り、口縁部ナデ内) 黒色処理、横距ミガキ	13.6	丸底	3.9	2/3
20-3	SB9 覆土	埴	土師器	黒褐色		外) 寛削り内) ハケ調整	-	5.2	6.8	1/8
20-4	SB9 床	高坏	土師器	橙	砂粒を多く含む	外) 口縁部ナデ、肩接合部磨削り内) 黒色処理、横距ミガキ	25.4	-	-	1/6
20-5	SB9 床	埴	土師器	明赤褐色	白・赤色粒子を含む	外) ナデ、底部木葉痕内) ハケ調整	-	10.4	4.3	-
31-1	SB10 床	広口瓶	灰釉陶器	オリア灰		ロクロ	11.6	-	-	1/5
31-2	SB10 床	埴	灰釉陶器	オリア灰		ロクロ	14.2	9.0	3.8	1/3
31-3	SB10 床	埴	灰釉陶器	オリア灰		ロクロ	13.0	-	-	1/4
31-4	SB10 覆土	埴	緑釉陶器	明緑・橙			-	8.0	-	1/5
31-5	SB10 床	埴	灰釉陶器	オリア灰		ロクロ	-	7.0	1.8	1/5
31-6	SB10 床直	埴	緑釉陶器	暗緑			-	-	-	1/6
31-7	SB10 床	埴	黒色土器B	黒		ロクロ、底部未切、外) 黒色処理、横ミガキ内) 黒色処理	18.0	-	-	1/4
31-8	SB10 床	坏A	黒色土器A	黒		ロクロ、底部未切、外面の黒色部分多いが一部黄褐色内) 白色処理	12.2	5.2	3.1	1/3
31-9	SB10 覆土	坏A	黒色土器A	褐色	チョウ石を多く含む	ロクロ、底部未切内) 黒色処理	11.6	5.0	4.1	1/4
31-10	SB10 床	坏A	黒色土器A	褐色		ロクロ、底部寛切内) 黒色処理	11.6	5.2	3.7	3/4
31-12	SB10 床	坏A	黒色土器A	明赤褐色	白雲母・チョウ石を多く含む	ロクロ、底部未切内) 黒色処理	12.6	4.2	4.0	完
31-13	SB10 床	坏A	黒色土器A	褐色		ロクロ、底部未切	13.0	5.6	4.1	1/3
31-14	SB10 床	坏A	黒色土器A	明褐色	チョウ石を多く含む	ロクロ、底部未切内) 黒色処理	14.4	7.6	4.5	1/2
31-15	SB10 床	坏A	黒色土器A	鈍い黄褐		ロクロ、底部未切内) 黒色処理	12.8	5.2	5.0	1/3
31-16	SB10 床	坏A	黒色土器A	褐色	白雲母・チョウ石	ロクロ、底部寛切内) 黒色処理	12.8	5.0	4.3	完

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	製作技法の特徴	法量			残存率
							口径	底径	器高	
31-17	SB10 床	坏A	黒色土器A	鈍い黄褐色		ロクロ、底部承切内) 黒色処理	12.2	5.0	3.8	完
31-18	SB10 床	坏A	黒色土器A	鈍い黄褐色		ロクロ、底部承切内) 黒色処理、5条暗文	11.8	4.6	4.0	2/3
31-19	SB10覆土	坏A	黒色土器A	鈍い橙	チョウ石を多く含む	ロクロ、底部施切外) 底部分近黒削り、墨書「?」内) 黒色処理、縦ミガキ	10.4	6.0	2.4	2/3
31-20	SB10 床	坏A	黒色土器A	鈍い黄褐色	赤色粒子を多く含む	ロクロ、底部承切「墨書?」内) 黒色処理	13.0	5.0	3.9	2/3
31-21	SB10 床	坏A	黒色土器A	鈍い褐色		ロクロ、底部施切外) 墨書「?」内) 黒色処理、暗文4条	13.0	6.4	4.2	2/3
31-22	SB10 床	坏A	黒色土器A	鈍い黄褐色		ロクロ、底部承切外) 墨書「田上」内) 黒色処理、暗文4条	-	5.8	-	1/2
31-23	SB10 床	坏A	黒色土器A	鈍い褐色	砂粒を多く含む	ロクロ、底部承切外) 墨書「田上」内) 黒色処理、暗文	13.3	5.1	3.6	2/3
31-24	SB10 床	碗	黒色土器A	明黄褐色	白雲母を多く含む	ロクロ底部承切外) 口縁部付近黒削り、5条暗文、口縁部横ナデ、5条暗文、丁寧なミガキ	12.6	6.0	5.2	完
31-25	SB10 床	盤B I	黒色土器A	鈍い褐色		ロクロ、底部承切内) 黒色処理、5条暗文、口縁部横ナデ	15.6	-	-	2/3
31-26	SB10 床	碗	黒色土器A	明赤褐色		ロクロ、底部承切内) 黒色処理	13.6	-	-	1/3
31-27	SB10 床	坏A	土師器	赤褐色	白雲母を多く含む	ロクロ、底部承切	12.2	6.8	4.1	1/3
31-28	SB10覆土	坏A	土師器	鈍い黄褐色	チョウ石・赤色粒子を多く含む	ロクロ、底部施切	12.0	5.8	3.2	完
31-29	SB10覆土	坏A	土師器	鈍い黄褐色		ロクロ、底部承切、ゆがみあり	12.1	5.6	3.4	完
31-30	SB10 床	坏A	土師器	橙	赤・黒色粒子を多く含む	ロクロ、底部承切、口縁部に煤	12.0	5.2	3.5	2/3
31-31	SB10 床	坏A	土師器	明赤褐色	白雲母を多く含む	ロクロ、底部承切	11.6	3.8	3.1	1/2
31-32	SB10 床	坏A	土師器	明褐色	白雲母を多く含む	ロクロ、底部承切外) 墨書「万」	13.2	6.8	3.8	1/2
31-33	SB10 床	坏A	土師器	鈍い黄褐色	チョウ石を多く含む	ロクロ、底部承切外) 墨書「万」	11.6	4.8	3.8	完
31-34	SB10 床	盤B I	土師器	明褐色	白雲母・赤色粒子を多く含む	ロクロ、底部承切、高台の接合痕残る、墨書土器「万」	14.3	7.8	5.6	完
31-35	SB10 床	盤A I	土師器	鈍い黄褐色		ロクロ、底部承切外) 墨書「田上」内) 暗文6条、口縁部横ナデ	13.4	7.0	3.5	完
31-41	SB10 床	耳皿	土師器	鈍い黄褐色		ロクロ、底部承切	6.6	4.8	2.9	3/4

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	製作技法の特徴	法量			残存率
							口径	底径	器高	
31-43	SB10竈内	甕	土師器	褐色	白雲母、チャウ石を多く含む	輪積成形外)胴下半部ハケ調整、上半部ナデ調整内)ナデ調整	—	6.1	15.7	1/5
34-1	SB11 床	坏A	黒色土器A	明赤褐色	チャウ石を多く含む	ロクロ、底部莞削り内)黒色処理、縦ミガキ	17.4	—	4.9	4/5
36-1	SB12 床	坏A	黒色土器A	鈍い褐色		ロクロ、底部糸切、墨雲土器「J内)黒色処理	—	6.4	2.6	—
36-2	SB12 床	皿A	土師器	橙		ロクロ、底部糸切、内外面に煤が付着	9.6	4.6	2.3	2/3
36-3	SB12 床	皿A	土師器	鈍い橙		ロクロ、底部糸切	9.6	5.8	2.0	2/3
32-1	SB13 床	坏A	黒色土器A	褐色	赤色粒子を多く含む	ロクロ、底部糸切内)黒色処理、縦方向ミガキ、口縁付近横ミガキ	13.2	4.8	3.8	2/3
32-2	SB13 床	皿	土師器	明赤褐色		ロクロ、底部糸切	8.4	4.8	1.7	2/3
32-3	SB13 床	坏A	黒色土器A	鈍い黄橙		ロクロ、底部糸切内)黒色処理、口縁部付近横ナデ、5条暗文、丁寧なミガキ	12.4	6.0	3.8	2/3
22-1	SB16 床	甕	土師器	褐色	砂粒を多く含む	外)胴部莞削り、内面荒れ調整不明	26.0	—	22.5	1/4
22-2	SB16 床	甕C	土師器	赤褐色		外)胴部莞削り内)ナデ	18.4	—	10.8	1/4
22-3	SB16 床	甕A	土師器	明赤褐色		外)ナデ内)ハケ調整ナデ、胴部は意図的欠失か?	18.2	—	—	1/5
22-4	SB16 床	小型甕B	土師器	黒褐色	雲母を多く含む	外)胴部ハケ調整、口縁～頸部・及び底部付近ナデ内)ナデ ゆがみあり	12.8	5.6	19.4	完
22-7	SB16 床	小型甕C	土師器	鈍い褐色	砂粒を多く含む	外)胴部莞削り、口縁～頸部ナデ内)ハケ調整の後ミガキ	15.6	—	10.3	1/6
22-8	SB16 床	小型甕C	土師器	赤褐色	長石・白雲母を含む	外)胴部莞削り、外面荒れている内)ハケ調整ナデ	13.8	5.8	12.6	2/3
39-1	SB17 床	坏A	黒色土器A	明褐色	白雲母、チャウ石を多く含む	ロクロ、底部糸切+底部付近莞削り内)黒色処理	12.4	4.3	3.5	1/2
39-2	SB17 床	坏A	黒色土器A	灰黄褐色		ロクロ、底部とその付近莞削り内)黒色処理、暗文、縦ミガキ	11.2	4.4	3.8	3/4
39-3	SB17 床	坏A	黒色土器A	鈍い黄橙	砂粒を多く含む	ロクロ内)黒色処理、大ぶりの暗文	15.4	6.6	5.6	2/3
39-4	SB17 床	坏A	黒色土器A	橙	砂粒を多く含む	ロクロ、底部莞削り内)黒色処理、暗文4条	12.2	6.4	3.2	1/3
23-1	SB18 床	皿	土師器	明赤褐色		手づくね外)胴部莞削り、底部莞削り	7.2	3.2	2.7	完
23-2	SB18 床	鉢	土師器	鈍い黄褐	チャウ石を多く含む	外)胴部莞削り、口縁横ナデ、底部莞削り内)ミガキ	9.0	5.0	7.8	2/3
23-3	SB18 床	鉢	土師器	褐色	砂粒を多く含む	外)胴部～底部莞削り、口縁～頸部横ナデ内)横ナデ、内部に甕の破片充填	11.4	5.5	11.0	4/5

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	製作技法の特徴	法量			残存率
							口径	底径	器高	
23-4	SB18 床	小型甕C	土師器	暗赤褐色		外) 胴部寛削り 内) ミガキ	10.4	-	10.6	1/3
23-5	SB18 床	鉢	土師器	明赤褐色	チョウ石を多く含む	外) 胴部～底部寛削り 内) ハケ調整	-	8.3	12.1	-
23-6	SB18 床	甕	土師器	黄褐色	砂粒を多く含む	外) 胴部寛削り 内) ハケ、口縁付近ナデ	17.5	7.0	23.5	4/5
23-7	SB18 床	甕A	土師器	灰黄褐色		内) ハケ+ナデ	23.0	7.8	21.0	1/2
24-1	SB19 床	無須須	土師器	赤褐色	赤色粒子を多く含む	外) 胴部寛ミガキ、口縁部付近器面荒れている 内) ナデ	8.0	5.9	14.2	2/3
24-2	SB19 覆土	小型甕	土師器	暗褐色		胴部意図的に欠失か?	12.6	-	-	-
24-3	SB19 床	甕	土師器	赤褐色	チョウ石を多く含む	外) 胴部寛削り、底部に木葉底 内) ハケ調整後丁寧なナデ	19.2	5.4	35.1	2/3
25-1	SB20 床	坏D	須惠器	灰色		ロクロ	11.4	丸底	3.3	完
25-2	SB20 覆土	坏F	土師器 (黒色処理)	明褐色	チョウ石、白雲母を多く含む	外) 胴部～底部寛削り、胴中に段 内) ミガキ	14.0	丸底	4.2	1/2
25-3	SB20 床	坏E	土師器 (黒色処理)	褐色		外) 胴部～底部寛削り 内) 黒色処理ミガキ、内面に有段	14.0	9.0	3.5	1/2
25-4	SB20 床	坏F	土師器 (黒色処理)	褐色		外) 胴部寛削り、底部寛削り、胴中に段 内) ミガキ	13.0	丸底	4.4	4/5
25-5	SB20 床	鉢	土師器	明褐色	チョウ石を多く含む	外) 胴部～底部寛削り、口縁～頸部ナデ 内) ナデ	10.4	6.0	6.8	4/5
25-6	SB20 床	鉢	土師器	赤褐色		外) 胴部～底部寛削り、口縁～頸部ナデ 内) 胴部ミガキ、頸部以上ナデ	10.6	4.4	8.5	完
25-7	SB20 床	小型甕C	土師器	明褐色		外) 胴部～底部寛削り、口縁～頸部ナデ 内) ハケ調整、黒色処理、頸部ミガキ	9.4	丸底	8.0	完
25-8	SB20 床		土師器	褐色	白雲母を多く含む	外) 胴部～底部寛削り、口縁～頸部ナデ 内) 胴部ミガキ、頸部以上ナデ	13.8	丸底	10.8	2/3
25-9	SB20 電付近	甕	土師器 (黒色処理)	鈍い赤褐		外) 外面荒れている調整等不明、口縁部ナデ 内) ハケ調整+ナデ	14.8	-	16.8	1/2
25-10	SB20 壺内		土師器 (黒色処理)	褐色		外) 胴部～底部寛削り 内) 黒色処理、ハケ調整+ミガキ	-	-	12.4	-
25-11	SB20 壺内	壺	土師器 (黒色処理)	褐色		非ロクロ調整 外) 胴部寛削り 内) ハケ調整+ナデ	-	丸底	5.9	1/2
25-12	SB20 床	甕	土師器 (黒色処理)	鈍い橙		外) 胴部寛削り、底部へラ削り 内) ハケ調整後ナデ	19.6	5.1	25.4	完

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	製作技法の特徴	法量			残存率
							口径	底径	器高	
22-1	SB21 床	坏D	土師器 (黒色処理)	明褐色		外)胴部寛削り、口縁部ナデ 内)黒色処理、ミガキ	10.6	5.5	3.9	完
22-2	SB21 床		土師器 (黒色処理)	褐色		外)ミガキ 内)黒色処理、ミガキ	7.6	丸底	7.0	4/5
26-1	SB22 床	坏F	土師器	暗褐色		外)腹以下寛削り、その他 ミガキ 内)ミガキ	13.6	丸底	4.8	4/5
26-2	SB22 床	坏F	土師器 (黒色処理)	明赤褐色		外)腹以下寛削り、口縁付 近ナデ 内)ナデ	19.8	-	-	1/2
26-3	SB22 床	坏F	土師器 (黒色処理)	暗赤褐色	チョウ石、白 雲母を多く含 む	外)腹以下寛削り、口縁付 近ナデ 内)ミガキ、黒色処理	13.2	丸底	4.7	4/5
26-4	SB22覆土	鉢	土師器 (黒色処理)	赤褐色	チョウ石を多 く含む	輪積痕残る 内)ハケ調整	12.4	-	-	1/5
26-5	SB22 床	高坏	土師器 (黒色処理)	明赤褐色		外)脚部寛削り 内)黒色処理、ミガキ	13.8	-	14.6	1/2
26-6	SB22 床	鉢	土師器 (黒色処理)	黄褐色		粘土帯巻き上げの痕跡を 意図的に残す。内外面と も丁寧な調整はなし。内 側底部付近ナデ、木葉痕、 口縁付近指頭圧痕	15.0	9.0	19.1	完
26-7	SB22 床		土師器 (黒色処理)	暗赤褐色	白雲母を多く 含む	外)寛削り、底部付近表面 荒れており不明 内)ハケ+ナデ	-	4.9	10.4	-
26-8	SB22 床	小型甕C	土師器 (黒色処理)	鈍い黄褐		外)胴部寛削り、口縁付近 ナデ 内)ハケ+ナデ	12.0	6.6	15.7	1/2
26-9	SB22 床	甕C	土師器 (黒色処理)	橙		外)寛削り 内)ハケ+ナデ	15.2	5.1	24.8	完
26-10	SB22 床	甕B	土師器 (黒色処理)	赤褐色	チョウ石を多 く含む	輪積み成形 外)ハケ、底部木葉痕 内)ハケ	19.4	7.3	35.6	完
27-1	SB24 床	坏D	土師器 (黒色処理)	明黄褐色		外)底部付近寛削り 内)黒色処理、ミガキ	11.4	5.0	3.5	1/3
27-2	SB24 床	坏D	土師器 (黒色処理)	鈍い黄褐		外)底部付近寛削り 内)黒色処理、ミガキ	13.2	7.0	4.5	完
27-3	SB24 床	小型甕B	土師器	明赤褐色		外)胴部ハケ調整、底部及 び付近寛削り 内)ハケ調整、口縁ナデ	12.1	4.0	12.7	完
27-4	SB24 床	鉢	土師器	鈍い赤褐		外)胴部寛削り、口縁ナデ 内)丁寧なナデ	12.0	丸底	13.0	完
27-5	SB24 床	甕A	土師器	黒褐色	白色粒子を含 む	輪積み成形後ナデ	16.1	-	26.1	1/2
27-6	SB24 甕	甕C	土師器	明赤褐色		外)胴部寛削り、口縁ナ デ 内)丁寧なナデ	15.8	7.3	22.5	完

番号	出土地点	器種	種類	色調	胎土	製作技法の特徴	法量			残存率
							口径	底径	器高	
28-1	SB25 床	坏F	須恵器	灰色	27-2と同粘土	ロクロ調整	9.8	丸底	4.2	完
28-2	SB25 床	坏F	須恵器	灰色	27-1と同粘土	ロクロ調整	-	丸底	3.3	2/3
28-3	SB25覆土	坏F	須恵器	灰黄色		ロクロ調整、底部寛切	11.8	-	-	1/4
28-4	SB25覆土	坏D	土師器	明赤褐色	赤色粒子を含む	外)胴部寛削り 内)ナデ	12.0	7.8	6.3	1/3
28-5	SB25覆土	坏E	土師器 (黒色処理)	鈍い黄褐色	砂粒を含む	内)黒色処理、ミガキ	21.4	9.0	5.4	1/3
28-6	SB25覆土	甕	土師器	鈍い黄褐色		外)胴部寛削り 内)ナデ	-	5.6	-	-
28-7	SB25覆土	埴	土師器 (黒色処理)	黄褐色		外)寛削り 内)黒色処理、ミガキ	-	丸底	-	-
28-8	SB25覆土	甕	土師器	鈍い黄褐色		外)ミガキ 内)ミガキ	14.3	-	-	1/4
28-9	SB25覆土	甕F	土師器	鈍い黄褐色		外)底部周辺寛削り、他ナ デ 内)ハケ	-	8.0	-	-
41-1	SK20 床	甕	土師器	暗赤褐色		外)寛削り 内)ハケ	-	-	11.2	2/3

#### 4 四日市遺跡D地区 金属製品観察結果一覧表 (図版掲載個体のみ)

図版 番号	出土地点	器種	材質	法量				特記事項
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
30-11	SB2 覆土	刀子	鉄	9.3	1.4	0.3	14.0	
31-42	SB2 床	鋤先	鉄	20.5	16.5	0.8	450.0	
38-1	SB15 床	鎌	鉄	19.0	5.0	0.4	115.0	
40-1	SB26 床	鎌	鉄	9.3	1.4	0.3	14.0	木質残る
42-1	遺構外	聖宋元宝	銅	2.4	-	0.2	2.4	
42-2	遺構外	明道元宝	銅	2.3	-	0.2	2.3	

※古代土器の器種分類は 長野県埋蔵文化財センターほか 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 -松本市内その1-総論編』を参照。



## 第5章 調査の成果と課題

### 1 縄文時代

#### (1) 縄文時代前期前葉から中葉の土器群について

四日市遺跡D地区から出土する土器には縄文時代前期中葉の有尾式土器のほか、僅かに踏磯a式・北白川下層II式土器などがみられ、前期中葉のある程度まとまった時期の遺物が検出された。

ここで四日市遺跡における過去の調査結果のなかから、前期の土器の情報を抽出してみよう。平成元年度と5年度に発掘調査したA地区では「塚田式土器」(下平・賛田1994)に分類される可能性のある破片のほか、関山I式土器や神之木式土器などが出土している(真田町教委1990・1996)。また、平成6年度に調査したD地区に隣接するB・C地区では最も古い段階では概ね花積下層式前後にあたりとみられる資料が検出されている。もっとも、B・C地区で主体的なのは関山I式期の資料である。搬入品及び在地で製作された関山I式土器に伴い、平底で斜縄文や羽状縄文が施文される一群と、尖底で無文あるいは種々の縄文が施文される一群がみられる。また、僅かではあるが、神之木式土器や有尾式土器、踏磯a式土器などもみられる(真田町教委1996)。

今回検出された資料はこれらに時間的に併行、または後続するものである。ここでは過去の調査結果をふまえて、四日市遺跡における縄文時代前期前葉から中葉の土器群について概観してみたい(第48～58図、各図中断面黒塗りは含繊維土器)。

まず挙げられるのが、平成元年度発掘調査で検出された胎土に繊維を含む縄文施文の土器群である(第48図)。口縁部にタガ状の隆帯をめぐらす口縁部破片(3・4)や、縄の側面圧痕と絡状体圧痕を交互に施文するもの(33)、丸底となる底部の破片(14)などがみられる。時期は前期初頭に位置づけたい。四日市遺跡における前期土器群の中でもっとも古い段階の土器であろう。

次にB地区20号住居址(BSB20)出土資料をみてみよう(第49図)。上述した土器群との間には、やや時間差がある。1は唯一形に分かる資料である。口縁部に4単位の縦の隆帯を持ち、胴部にはRLの斜縄文が施文される。胎土は微量の繊維を含み、チョウ石、セキエイが多く混入される。この住居址からは摺糸側面圧痕を有する破片(16、17は同一個体)や、著しく屈曲する口縁部破片(18～21)が出土している。また、蕨手状文と瘤状貼付文、足の短いループ文、コンパス文を有する破片(22～27)や、尖底の底部破片(14・15)、波状または平らの口縁で縄文施文のもの(3～10)、無文のもの(11～13)などがみられる。縄文のみ施文されるものや無文のもの口唇部に刻みを有するものが多く見られるのも特徴の一つである。

次の時期にあたる資料は、B地区2号住居址(BSB2)および17号住居址(BSB17)、C地区19号住居址(CSB19)、D地区24号土坑(DSK24)出土資料が挙げられよう。

BSB2出土資料(第50図)は完形資料が少ないが、蕨手状文や瘤状貼付文(2・6・7・8)、コンパス文や短いループ文(2・5、9～11)、附加条縄文あるいは正反の合の縄文が施文される土器(12・13)、縄文(斜走・羽状)のみで文様が構成される深鉢(16・17・2～23)、器壁の薄い無文土器(19・20・24)などがみられ、ここでも著しく屈曲する口縁部破片(18)が出土している。底部は平底のものや尖底のものが出土している(15・21)。BSB17出土資料(第51図)は形に分かるものが多く、やはり蕨手状文や山形文、瘤状貼付文、コンパス文、足の短いループ文、組紐文などが施文される土器(1、9・10・13～5)と、無文あるいは縄文のみが施文される深鉢がある(7・8・12・16～20・26)。後者のなかには波状口縁を呈し、尖底に

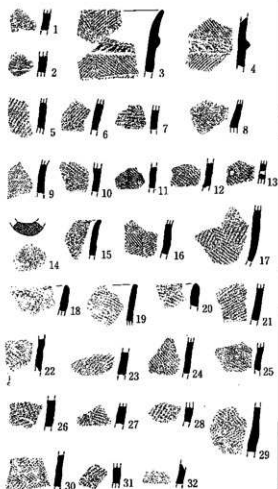
なると思われるもの(7・16~19・26)もあり、器形が南信地域に分布の中心を有する中越式土器に類似する。19には附加条縄文あるいは正反の合の縄文が施文されている。このように縄文の施文されるものは中越式土器の影響を受け、在地の中で生成されてきた個体であろうか。CSB19出土資料(第52図)は口縁部付近がはっきりしないが、胴部以下の器形が円筒状となるもの(13)のほか、縄文のみが施文されるもの(7~9・13)、また、類例を知らないが、口縁部に結束した縄を転がし、その直下に幅広の格子目文帯を有し、胴部は羽状縄文となるもの(14)が出土している。これは底部は欠失して不明であるが、尖底になると思われる。また、胎土から摺入品とも思われるが、瘤状貼付文と梯子状沈線で文様が構成される口縁部の大破片もある(10)。正反の合、あるいは附加条縄文による羽状縄文を多用する傾向が見られ、蕨手状文や瘤状貼付文、コンパス文、足の短いルーブ文などが施文される(1~6・10~12)。深鉢は上げ底となるものが多い。また、DSK24出土資料(第53図)は隆帯を持ち、口縁部が著しく屈曲する器形のもの(1)や、波状口縁となり縄文が施文されるもの(4)、無文のもの(3)などが出土している。1や4の器形の類例がBSB2やBSB17で出土している点、1にみられる特殊な結節の縄文がやはりBSB17などでみられることから、この段階に位置づけた。

次にやや時期をあけるが、今回の調査で検出されたD地区8号住居址(DSB8)や19号土坑址(DSK19)出土資料が次の段階にあたると思われる。まず、DSB8出土資料をみてみよう(第54図)。形の分かる資料は少ないが、この段階の多様な文様要素がうかがえる破片が出土している。文様は半截竹管によるものかほとんどで、口縁部~頸部までの文様が、

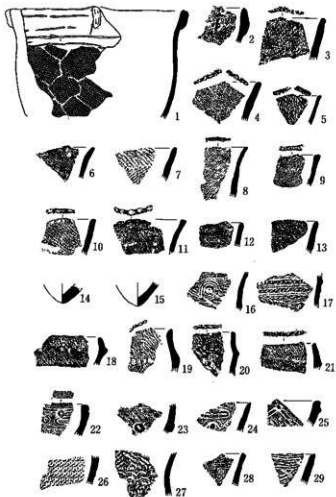
- a) 平行沈線のみ(13・17~19)
- b) 平行沈線と平行沈線に重ねて垂直刺突される爪形文の組み合わせ(1・2)
- c) 平行沈線に重ねて垂直刺突される爪形文のみ(3~6)
- d) 平行沈線と波状文の組み合わせ(14~16)
- e) 平行沈線とコンパス文の組み合わせ(第55図-7)
- f) 沈線+瘤状施文具による刺突列(7~12・22)
- g) 波状文のみ(21)

といった文様構成がうかがえる。また、波状あるいは平線で、羽状縄文や長い原体を用いた斜縄文が施文されるものもある(23~27・29・30)。次にDSK19出土資料(第55図)をみてみよう。形の分かる資料は深鉢の口縁部~胴部の破片である。4単位の緩い波状口縁を呈し、頂部から隆帯を垂下させる手法がみられる。文様は半截竹管によるもので、平行沈線、コンパス文、横方向に弧状の条痕様の文様を描く。固化しえなかったが胴部には羽状縄文が施文される。胎土に繊維は混入されない。ほかに文様がほぼ同様の構成をとるが、隆帯を垂下させずに平行沈線を施文するもの(4)や、爪形文(2)や網目状捲糸文(1)をもつもの、平行沈線で変形を描くもの(6)、平行沈線と波状文の組み合わせ(3)などが共存している。

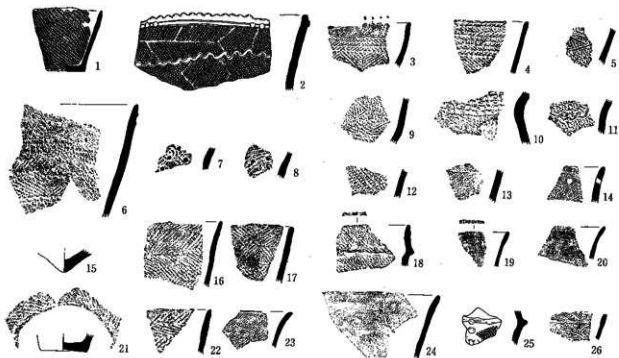
後続する資料はD地区23号住居址(DSB23)、それにB地区15号住居址(BSB15)出土資料があたる。D地区21号土坑址(DSK21)出土資料も一応この段階に位置づけたい。DSB23出土資料(第58図)には頸部で括れる器形をとるもの(1・22)と、逆台形の深鉢(2・4・5・26)とがある。胎土に繊維を含むものと無繊維のものがあり、半截竹管による文様がみられるほか、羽状縄文や長い原体を用いた斜縄文が施文されるもの(4)がある。そのほか特徴的なものでは、口縁部に縦に平行沈線を施文する例がみられる(13)。また、胎土に繊維を含まず、円形刺突と前掲(c)の爪形文の組み合わせ(29)や磨滑縄文を用いるもの(30)などがみられる。25・27のように繊維を含んでいるものの、文様が磨滑式ふうのものもある。また、この



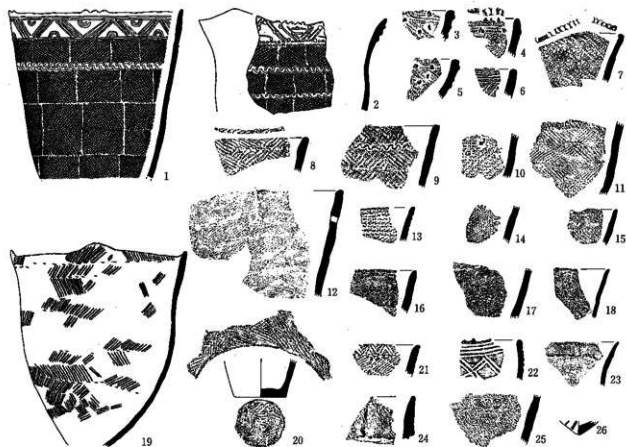
第48図 A地区出土の前期初頭の土器 (S=1/6)



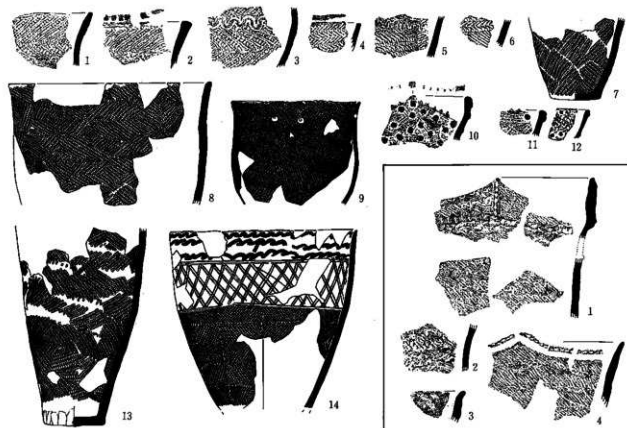
第49図 B地区20号住居址出土土器 (S=1/6)



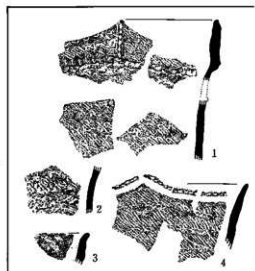
第50図 B地区2号住居址出土土器 (S=1/6)



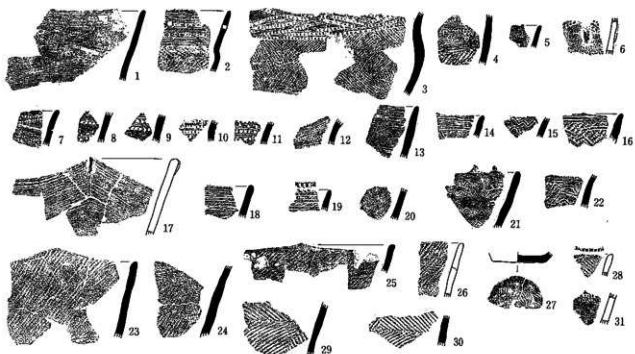
第51图 B地区17号住居址出土土器 (S=1/6)



第52图 C地区19号住居址出土土器 (S=1/6)



第53图 D地区24号土坑出土土器 (S=1/6)



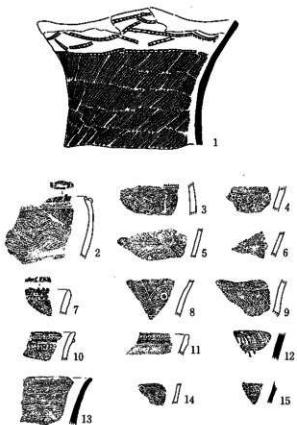
第54图 D地区8号住居址出土土器 (S=1/6)



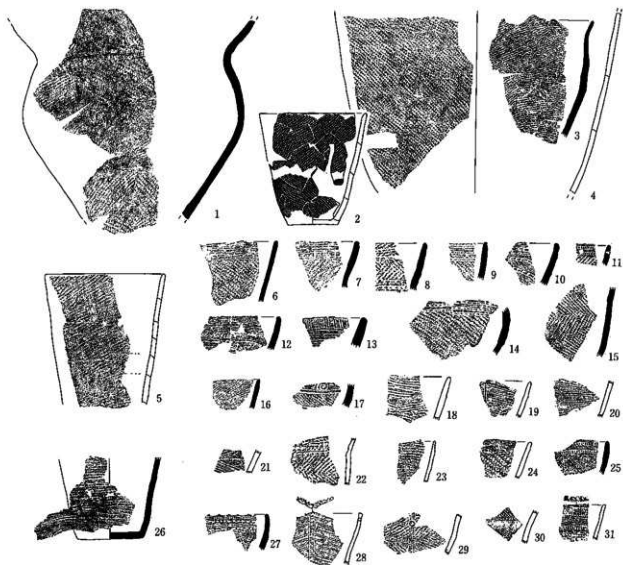
第55图 D地区19号土坑出土土器 (S=1/6)



第56图 D地区21号土坑出土土器 (S=1/6)



第57图 B地区15号住居址出土土器 (S=1/6)



第58図 D地区23号住居址出土土器 (S=1/6)

住居址では北白川下層Ⅱ式土器の破片(31)が検出されている。BSB15出土資料(第57図)は炉体土器となっていたほぼ完形の深鉢(1)が出土しており、胎土に微量の繊維を含み、口縁部には平行沈線に重ねて垂直刺突される爪形文、胴部にはLRの斜縄文が施文される。口縁部には波状を呈するようだ。ほかに胎土に繊維を含まず、円形刺突と前掲(c)の爪形文や助骨文をもつものなどがみられる(2・14)。DSK21出土の北白川下層Ⅱ式土器(第56図)であるが、DSB23で北白川下層Ⅱ式土器の破片が検出されており、この段階に位置づけられるものと推定される。ちなみに塩尻市野屋敷遺跡では変形を呈する刺突列をもつ一群と北白川下層Ⅰ式土器が相伴している。

以上、四口市遺跡における縄文時代前期前葉から中葉の土器群について概観してきた。資料が増え、遺跡内での段階設定も考えたが、中部高地と周辺地域の編年との整合性に未だ検討の余地のあること、そして何より筆者浅学ため、今回は見送った。先学の方々のご教示を請う次第である。いずれ稿を改めて、検討したいと思う。

この稿を草するにあたり、勸長野県埋蔵文化財センター・賢田明氏のご指導、ご助言を賜った。記して感謝申し上げたい。

## (2) 縄文時代前期の石器

### ① 石器組成

D地区の調査では石器関連資料として、総数2,000点を持ちかえてきた。遺構の時期及び包含層出土の石器の様相から前期中葉の資料が大部分を占めていると思われるが、必ずしもそれ以外の時期の石器が含まれていないとは言いきれないのもまた事実である。しかし、それらを明確に分離するのは不可能であり、今回は一括して考えることとしたい。また、他にも石器組成論が抱える課題がいくつかあるが、ここではそれらを保留しておく。よって提示する石器組成はその点で一定の限界を内包するものであることを、予め承知しておく必要がある。

まず、各器種の特徴をみてみよう。

- |       |  |
|-------|--|
| 石 鏃   | 52点出土している。石材の利用状況は黒曜石が49点、頁岩が3点である。また、基部の形態は凹基が46点、平基が6点、凸基が0点であった。              |
| 石 匙   | 29点出土している。石材は頁岩がもっとも多く使用され、黒曜石製のものが1点出土している。形態はいわゆる横型が25点、縦型が4点であった。             |
| 刃 器   | 44点出土している。石材は多種多様であるが、黒曜石や頁岩がもっとも多く使用されている。ピエス・エスキューと思われるものもあったが、ここに含めた。ご容赦願いたい。 |
| 横刃型石器 | 7点出土している。石材は多種多様であるが、頁岩がもっとも多く使用されている。   |
| 石 錐   | 10点出土している。凸基または平基の石鏃との区別が困難な個体があったが、そのようなものはすべてこちらに含めた。                          |
| 打製石斧  | 33点出土している。石材は玄武岩、頁岩が使用されている。形態はいわゆる短冊形のものと同様のものがみられる。B地区で出土したような鐘形のもののみられない。     |
| 磨製石斧  | 22点出土している。石材はチャート、玄武岩などが使用されている。いわゆる乳棒状磨製石斧がほとんどで、1点のみチャート製の小型の磨製石斧が出土した。        |
| 磨 石   | 153点出土している。石材は安山岩が使用されている。   |
| 砥 石   | 2点出土している。  |
| 石 皿   | 1点の完形資料を含め、4点出土している。石材は安山岩が使用されている。  |
| 軽石製品  | 2点出土している。用途は不明である。   |

前項で指摘したようにD地区は縄文時代前期中葉・有尾式期の石器が主体的にみられる。よってここで例示する数値は該期の石器組成の一端を表すものとして認識したい。そして、関山式期が主体となるB・C地区の石器組成と比較し、両者の違いについてみてみたい。

まず、両地区とも食物加工具である石皿・磨石（たき石を含む）の割合が高いことが指摘できる。製品の3割以上を磨石が占める。ただ、住居址の数（B・C地区9軒・D地区3軒）を考慮すると、特にD地区の磨石の数の多さが目につき、ひとつの住居址から数点の磨石が検出されるのも珍しくない。磨石は特に加工を要さない安定供給される石器であったと言え、食物加工具としての役割から考えると、堅果類（ドングリ、クリなど）を主要な食物のひとつとして利用していたことがうかがえる。

また打製石斧や磨製石斧についても増加傾向がうかがえる。特に打製石斧はB・C地区では製品全体の2.6%であったがD地区では7.3%という数値が出ている。また、磨製石斧はB・C地区では製品全体の3.5%であったがD地区では4.8%という数値が出ている。D地区ではチャート製の小型の1点を除いて全て乳棒状磨製石斧であり、B・C地区のものと比べると、大型のものが多。これら石斧の増加傾向は根菜類または、木

	総数	母岩・石層			骨製具	鉄製具	銅製具		調理・加工具			加工具				その他	
名称		黒石	石核	片断片	石鏃	打製石斧	石棒	丸石	磨石	多孔石	石皿	石匙	牙・ヒノ骨	磨石	石錐	砥石	
数量	2000	1	98	1541	52	33	0	0	153	0	4	29	51	22	10	2	4

※その他には靴石製品2、袂状耳飾り2を含む

第59図 四日市遺跡D地区の石器器種別構成

	総数	母岩・石層			骨製具	鉄製具	銅製具		調理・加工具			加工具				その他	
名称		黒石	石核	片断片	石鏃	打製石斧	石棒	丸石	磨石	多孔石	石皿	石匙	牙・ヒノ骨	磨石	石錐	砥石	
数量	4414	0	188	3588	125	22	0	0	250	0	8	47	96	29	40	16	5

※その他には靴石製品3、袂状耳飾り1、砥石1を含む

第60図 四日市遺跡B・C地区の石器器種別構成

材の需要が増えたことと関連するのではないだろうか。

逆に現象傾向を指摘できるものに石鏃がある。石鏃についてはB・C地区では製品全体の15.1%だったのに対し、D地区では11.5%である。石鏃が移動性の高い石器であることを考慮しても、減少傾向を指摘できよう。B・C地区では関山式期の集落ということで微少な石鏃の検出を意図して行ったせいもあろうが、時期差と認識してもよいのではなかろうか。この石鏃の減少と先に触れた石斧の増加との間に何らかの関連があるのかもしれない。

また、木材その他の加工具としての石錐が減少傾向にあることもうかがえる。

ここで得られた石器組成がそのまま当時の生活形態を表すものとするのは性急であろうが、ひとつのサンプルとして例示した。

② 2つのつまみを有する石匙について

今回の調査で最も興味深い出土品の一つに、2つのつまみ部を有する石匙がある(第61図)。2点出土し、1点はずつまみが片方欠失しているが、もう1点は完形品である。両者とも縄文時代前期中葉の住居址覆土からの出土である。このような石匙の類例は知らない。

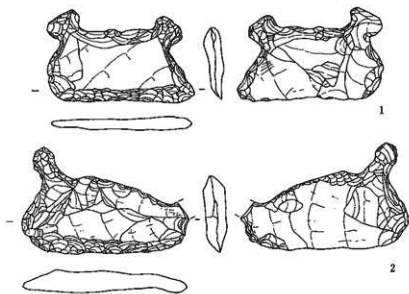
石匙が名のとおり「さじ・スプーン」の用途を持っていたとはとうてい思えない。動物解体具のみではなく、木や骨を削るといった機能も推定されており、また、「イネ科植物」の切断に使用された(御代田町教委1994)という個体の報告もあり、多目的に使用された石器であるという意見が多い。現在ではつまみ部にターゲが付着している事例から、柄につまみ部を固定して使用したという使用法と、宮城県山王遺跡での出土例から、つまみ部にひもを付けて腰に下げ、携帯用の万能ナイフとして使用されたのではないかという二説が大勢を占めている。

ただし、この2つの石匙については前者の使用法を考えたほうが都合がよい。おそらく二股に分かれていた柄に着装して使用したものではないだろうか。類例をご教示いただければありがたい。

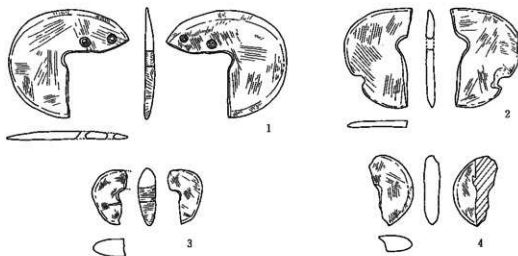
③ 袂状耳飾りについて

今回の2点を含めて四日市遺跡では合計4点が出土している(第62図)。何れも形・大きさに違いがあり、時間差を感じさせる。うち今回出土した2点(1・2)は先に出土した2点に比べ、大きく、薄いという特徴を持つ。材質は1は滑石であると思われるが、色、硬さから蛇紋岩などの可能性もある。2は滑石製であ





第61図 2つのつまみをもつ石匙 (S=2/3)



第62図 四日市遺跡出土の袂状耳飾り集成図 (S=1/2)

る。川崎保氏の袂状耳飾りの変遷図(川崎1994)によればこの2点の形態は前期中葉辺りに位置づけられており、D地区から主体的に出土している土器の時期とも符合する。なお、2点とも遺構外からの出土である。

参考までに、過去に出土した2点についても紹介しておく。3はB地区20号住居址からの出土である。滑石製で半欠している(真田町教委1996)。遺構は出土土器から前期初頭のものである。4はC地区の遺構外出土品である。やはり滑石製で、半欠している。

## 2 古墳時代

今回の調査では古墳時代の遺構は後期の住居址8軒を検出した。四日市遺跡のこれまでの調査のなかでもっとも多い検出数である。

遺物は住居址から良好な一括資料を得ることが出来た。古墳時代後期の鬼高式期のもと思われ、過去の四日市での出土遺物よりは若干時期が古くなると考えられる。前回、四日市遺跡B地区の報告で、古墳時代後期の4号住居址(BSB4)と小諸市の宮ノ反A遺跡群竹花遺跡77号住居址(小諸市教委1994)、坂城町の南条遺跡群東裏遺跡IIH18号住居址(坂城町教委1994)の3つの住居址の土器組成について検討した(真田町教委1996)。比較対象とする3者には時間差が認められるが、いずれも古墳時代中期末～後期に属するもので、出土個体数が多く、当時の土器のセットをより忠実にあらわすものと考えられる。今回の調査で、各住居址から良好な一括資料が出土したが、なかでも、22号住居址(DSB22)出土資料は当時の土器セットを考える上で多様な器種が揃っている点で興味深いものである(第66図)。

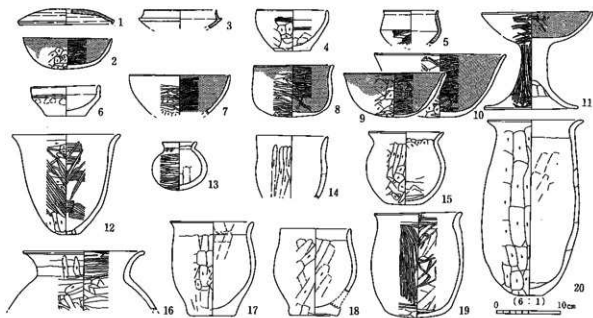
22号住居址出土資料は坏の2点を除いては、電付近からの出土で、鉢、甕にいたってはおそらく甕を破壊した後、入れ子状態で甕の焚き口に収納したことがうかがえ、興味深い。甕祭肥の一例とみてもよいだろう。また、輪積み成形痕を意図的に残した鉢が出土している。土器のセットは坏3、小型鉢1、高坏1、鉢1、小形甕1、長胴甕3(やや小型の2個体を含む)から成り立っており、このうち、食器は坏、小型鉢、高坏の5個体、貯蔵用は鉢、小形甕の2個体、煮炊用は長胴甕の3個体と考えた。その割合は食器50%、貯蔵用20%、煮炊用は30%となる。

実見していないが、竹花遺跡77号住居址では坏6、鉢1、甕6、壺2、広口壺1、高坏1の計17個体が出土した(第64図)。本址の時期は古墳時代後期中葉と考えられる。土器組成のなかで食器の占める割合が高いといえよう。東裏遺跡IIH18号住居址では坏9、鉢2、甕3、小型甕1、短頸壺2、小型壺1、高坏1、甕1の計21個体が出土した(第63図)。本址の時期は古墳時代中期末葉～後期初頭と考えられる。竹花遺跡例と同様に土器組成のなかで食器の占める割合が高いといえよう。その他、集落内での土器組成の変化について検討した松本市の南栗遺跡の成果を援用して考えてみることにする。

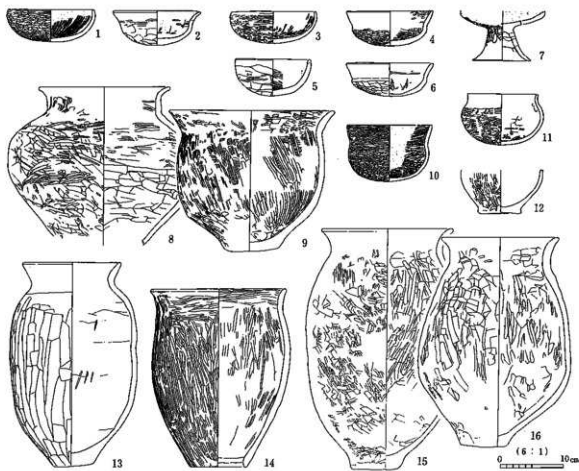
B地区の4号住居址とした古墳時代後期後葉の住居址からは22個体の図上復元可能な土器が出土した(第65図)。その内訳は、坏3、鉢5、甕10、小型甕2、甕2となっており、甕10、小型甕2、甕2の12個体のうち、貯蔵用とみられる個体が4、煤の付着した煮炊用が8となっている。

この結果から改めて四日市遺跡の例を検討してみよう。BSB4では甕、甕といった食器以外の煮炊用・貯蔵用の土器の占める割合が圧倒的に高く、やや特異な感じを受ける。覆土からも食器の破片はわずかに認められたにすぎない。また、DSB22では食器と煮炊用・貯蔵用の土器の割合が半々という結果が出ている。松本市の南栗遺跡の土器組成(長野県埋文センター1990)は、今回扱った4つの遺構の属する時期は煮炊用・貯蔵用の土器の占める割合が高いという結果が出ている。データを比較すると南栗遺跡の数値と同じ傾向を示すのは竹花遺跡例のみであり、東裏遺跡例では食器と煮炊・貯蔵器の割合が逆転している。これらは遺跡それぞれがもつ特色なのであろうか。

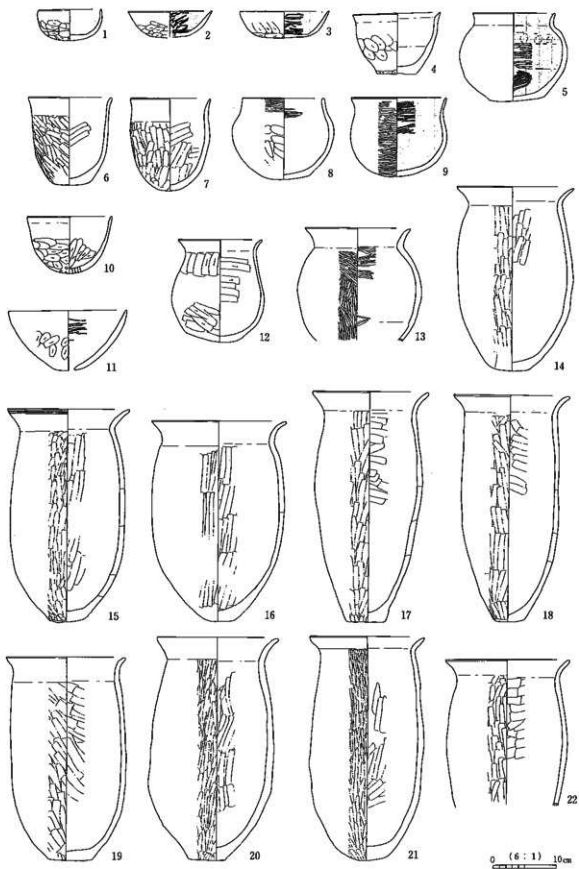
これらをグラフに表したものが第67図である。先述したように各遺跡、各住居址間で食器と煮炊・貯蔵具の割合が異なっている。これが時間差を表すものなのか、遺跡の特色なのかは比較対象をもっと広げた上で検討すべきであろう。ただし、四日市遺跡のBSB4とDSB22とは土器に若干の時間差がみられるので、遺跡内での時間差として認識できるのかもしれない。しかし、両段階の住居址一括資料がまだまだ十分ではなく、更に検討することができず残念である。BSB4とDSB22とは住居址の大きさのほか、甕の大きさや壺



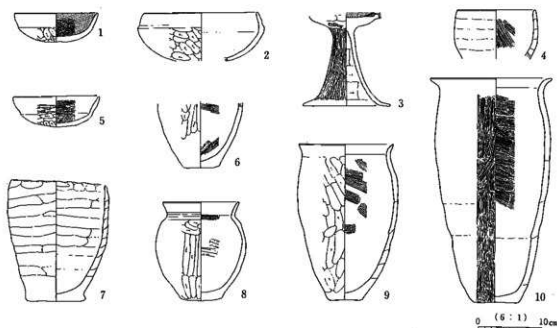
第63图 東奥遺跡ⅡH18号住居址出土土器



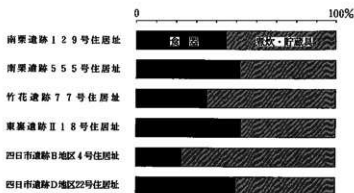
第64图 竹花遺跡77号住居址出土土器



第65图 四日市遺跡B地区4号住居址出土土器



第66図 四日市遺跡D地区22号住居出土土器



第67図 各壱穴住居址出土土器の構成

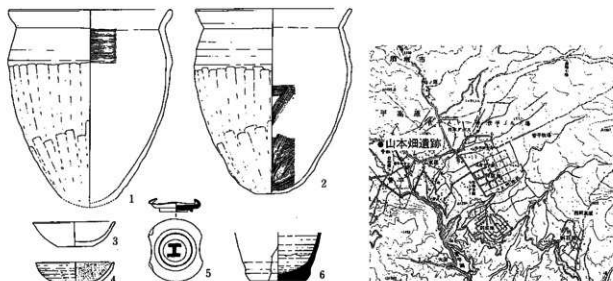
道の作り方で違いがみられ、土器組成にも違いがある可能性がある。今後の資料の増加に期待したい。

### 3 平安時代

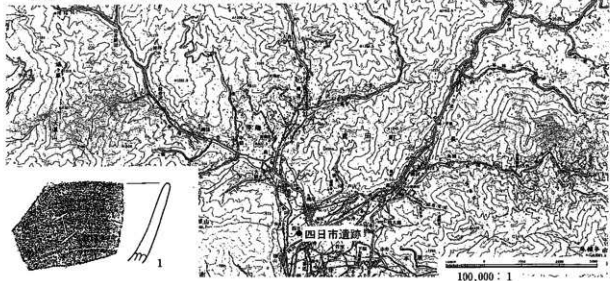
第5次にわたる調査によって横尾・四日市地区には大規模な平安時代の集落が存在していたことが判明した。集落の展開した時期は概ね9世紀末～10世紀初頭と考えている。周辺では田の造成の際に多くの完形の坏などが発見されており、かなりの遺構が削平等によって失われてしまっている可能性がある。しかし、一連の調査で今回のD地区を含むかなり広い範囲に集落が展開していた様子が明らかになった。

D地区に隣接するJA施設建設用地（C地区）からは、集落内での鉄製品の生産・加工をうかがわせる小鍛冶遺構が検出されており、今回の調査でも鎌や鋤頭、刀子といった鉄製品が出土した。

10号住居址では、坏、碗などの食器類で20個体を越える完形資料が出土し、緑釉陶器や灰釉陶器などもみられた。一世帯の食器の数にしては多すぎると思うが、如何だろうか。何か特別な性格をこの遺構に与えたは



第68図 真田町菅平・山本畑遺跡2号住居址出土土器 (S=1/6)



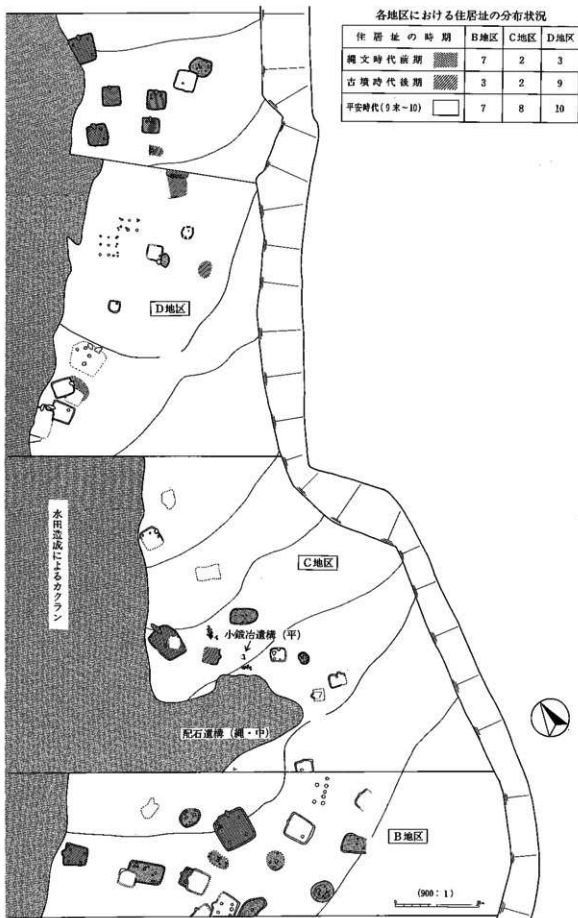
第69図 四日市遺跡D地区出土ヘラ抜き土器 (S=1/2)

うがよいのかもしれない。また、これまでの調査と同様、墨書土器が多く出土したことも挙げられる。特に10号住居址からは「田上」の墨書のみられる土器が6個体、「万」が4個体出土した。A地区で多く見られた、姓を表すとみられる「伴」の墨書がD地区では見られないが、「田上」という墨書が多く発見されたことと関係があるのかもしれない。集落の時期や性格を考える上で良好な資料であろう。今後の課題は、平安時代集落の変遷過程の追求であり、そのためには遺跡内における平安時代の土器群の段階設定が不可欠であろう。

なお、遺構外からであるが、ヘラ抜き土器が1点出土した(第69図)。「工」の字のように見えるが、墨書土器で「工」を書いた須恵器の耳皿が町内の山本畑遺跡2号住居址から出土している(第68図)。ほぼ同時期の遺物なので注意したい。

〈引用・参考文献〉

- 網谷克彦 1981 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』3
- 新井和之 1981 「黒浜式土器」『縄文文化の研究』3
- 岡谷市教育委員会 1996 「花上寺遺跡」
- 川崎 保 1994 「縄文時代前期の玉と墓」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI
- 小諸市教育委員会 1994 「東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原」
- 坂城町教育委員会 1994 「東裏遺跡II・青木下遺跡」
- 佐々木高明 1991 『日本史誕生』集英社版日本の歴史①
- 真田町教育委員会 1977 「山本畑遺跡緊急発掘調査報告」  
1990 「四日市遺跡」  
1992 「真田氏館跡」  
1996 「四日市遺跡II」
- 潮見 浩 1988 「図解 技術の考古学」
- 縄文セミナーの会 1994 「早期終末・前期初頭の諸様相」
- 千曲川水系古代文化研究所 1980 『編年』—中部高地における型式—
- 長門町教育委員会 1983 「六反田」
- 戸田哲也・大矢昌彦 1979 「神之木式・有尾式土器の研究（前）」『長野県考古学会誌』34
- 長野県史刊行会 1989 「長野県史 考古資料編」1-4
- 長野県埋蔵文化財センターほか 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その  
1— 総論編」
- 賛田 明 1994 「4 前期初頭の土器群について」『下弥堂遺跡』長野県御代田町教育委員会
- 益富壽之助 1995 「原色岩石図鑑」
- 丸子町教育委員会 1992 「淵ノ上遺跡」
- 御代田町教育委員会 1991 「川原田・城之腰遺跡発掘調査概要報告書」  
1992 「城之腰遺跡」  
1993 「滝沢—塩野西遺跡群—発掘調査概要報告書」  
1994 「下弥堂遺跡」  
1994 「塚田遺跡」





## 付 四日市遺跡C地区の調査結果(縄文時代篇)

今回発掘調査を実施したD地区に隣接した区域は、四日市遺跡C地区として平成6年3月から6月にかけて、真田町農業共同組合農機・オートセンター(現信州うえだ農業協同組合)の建設に先立ち、約3,500㎡が発掘調査された。その結果、住居址12軒(縄文前期2・古墳後期2・平安8)、縄文中期の配石遺構1基、平安時代の鍛冶製鉄遺構1基などが検出された。この調査の報告書は平成6年10月に50部のみ発行されているが、紙面の制約、また、時間的制約のため遺物整理ができず、縄文時代の報告を割愛してしまった。そのため、今回改めて縄文時代の遺構・遺物について報告することとした。なお、遺跡の立地、基本土層についてはD地区に準じる。

### (1) C地区・3号住居址(CSB3) (第71図)

覆土：黒色土の堆積がみられる。

壁面：壁高10～15cmを計る。

床面：III層中に床面を作っている。締まってはいるものの、硬化していない。

柱穴とピット：9基確認した。

炉：確認できなかった。

規模と形態：直軸3m程の楕円形プランを呈する。

出土遺物と所属時期：出土土器から縄文時代前期中葉に比定される。出土遺物は少ない。最も大きなPit1から羽状縄文の施文された深鉢が倒置した状態で出土したが、非常に脆くなっており、取り上げの際に復元不能ほどバラバラになってしまった。図化ができず、出土状態の写真を掲載したのでご容赦願いたい。

### (2) C地区・19号住居址(CSB19) (第72～74図)

覆土：黒色土の堆積がみられる。

壁面：壁高10～15cmを計る。

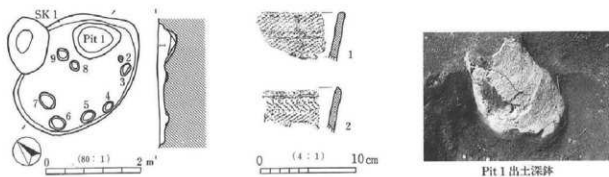
床面：III層中に床面を作っている。締まってはいるものの、硬化していない。

柱穴とピット：7基確認した。

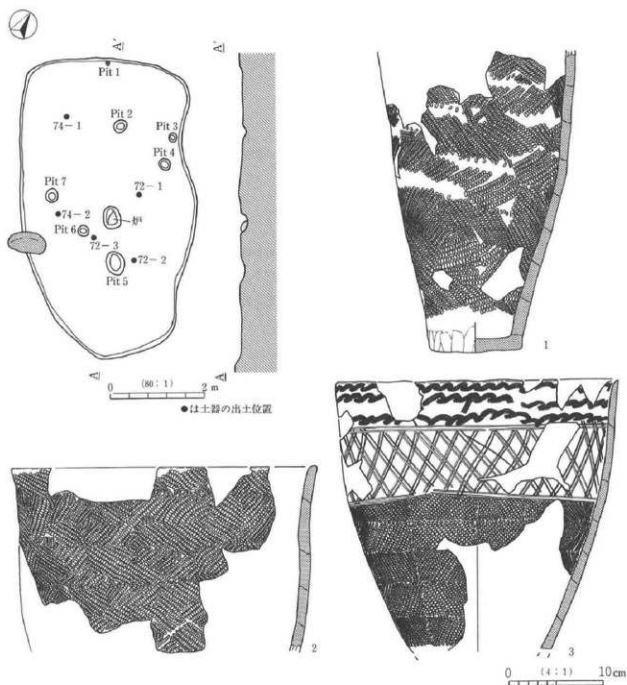
炉：中央付近に炉の痕跡を認めた。

規模と形態：4×3m程の隅丸長方形プランを呈する。

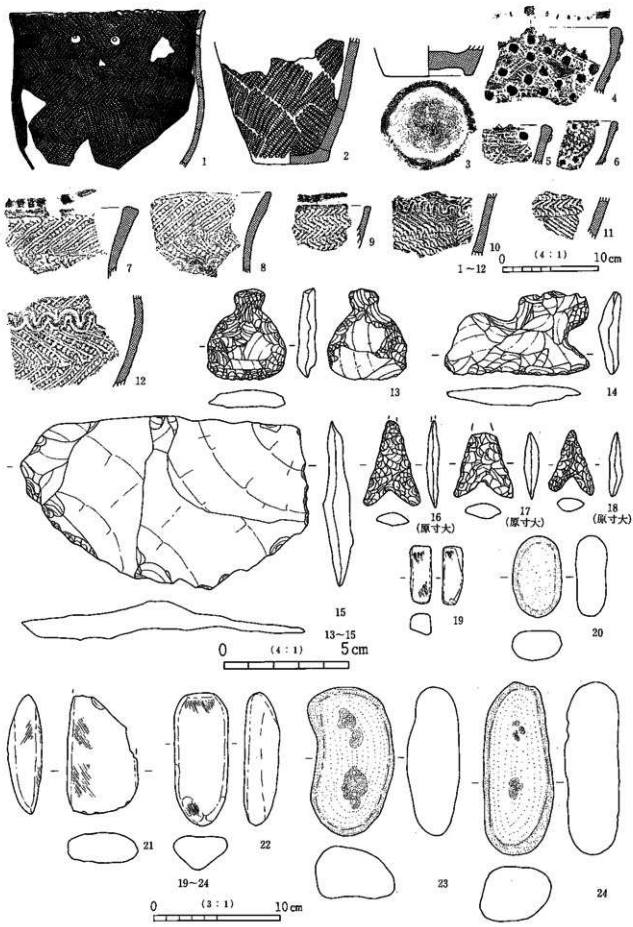
出土遺物と所属時期：出土土器から縄文時代前期中葉に比定される。住居内に多量の礫がみられ、復元できた土器のほとんどはこの礫の上から壊れた状態で出土している。土器は、梯子状沈線や瘤状貼付文、コンパス文、足の短いループ文、附加条あるいは正反の合の縄文の施文されるもののほか、羽状縄文のみで文様が構成される個体、また、在地のものと思われる第72図-3のような、口縁部に東ねた縄を転がし、その直下に半截竹管による格子目文、胴部に羽状縄文の施文される個体が共伴している。第73図-4は胎土から搬入品と思われる。また、石器では石鏃のほか、磨製石斧、磨石、石匙などが出土しており、土器+石器の住居址一括資料として捉えられる良好なものであろう。



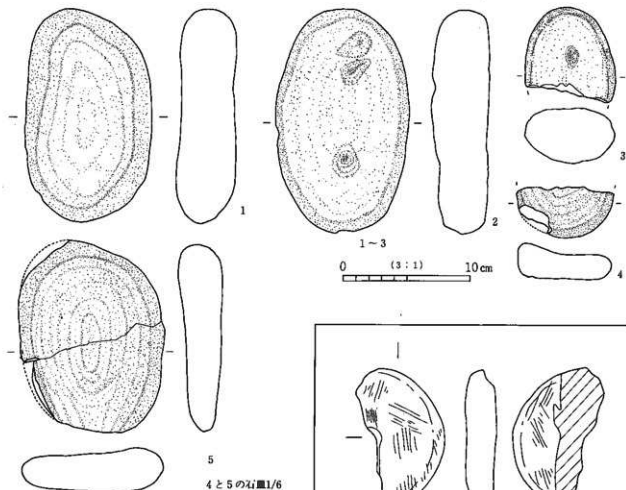
第71图 C地区3号住居址実測図及び出土遺物実測図



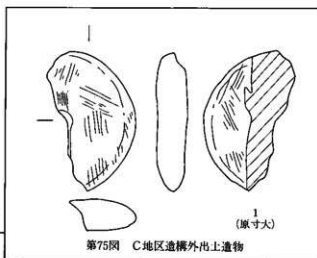
第72图 C地区19号住居址実測図及び出土遺物実測図



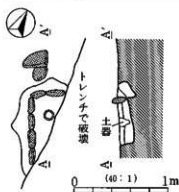
第73图 19号住居址出土遺物実測図(2)



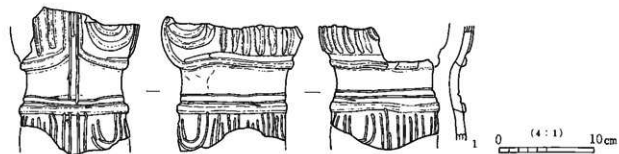
第74図 C地区19号住居址出土遺物実測図(3)



第75図 C地区遺構外出土遺物



(参考) 岡谷市花上寺遺跡25号住居址出土



第76図 C地区配石遺構実測図及び出土遺物実測図

## (3) C地区・配石遺構Ⅰ (第76図)

縄文時代中期の配石遺構が1基検出されている。遺構は一辺が20～30cmの平石を70×30cm程度の長方形に組んだもので、長軸上やや北よりに土器が埋設してあった。

土器は口縁部と底部を欠失しており、おそらく底部は意図的に欠いたものであろう。口縁部も同様であった可能性がある。土器型式については岡谷市の花上寺遺跡(岡谷市教委1996)などで出土している桶形文の描かれる土器に類似が求められよう。胴下部の上向き弧線の沈線文は桶形文の形骸化したものと推定され、所属時期は縄文時代中期後半あたりにならうか。四日市遺跡A地区では中期後半の加曾利E式期の集落が検出されており、関連がありそうである。

## (4) C地区・遺構外出土の遺物 (第75図)

Ⅰは滑石製の球状文飾りである。半欠しているが、全体形は円形を呈すると思われる。

この稿を草するに当たり、長野県立歴史館 綿田弘実氏のご指導、ご助言を賜った。記して感謝申し上げたい。

## Ⅰ 四日市遺跡C地区 縄文土器観察結果一覧表 (図版掲載個体のみ)

図版 番号	出土地点	器種	部 位	器 形 お よ び 文 様	繊維	色 調		焼 成	備 考
						外 面	内 面		
71-1	SB3 覆土	深鉢	口縁部	縄文LR	有	暗赤褐色	赤褐色	○	
71-2	SB3 覆土	深鉢	口縁部	縄文RL・LRの羽状縄文	有	暗赤褐色	褐色	○	
72-1	SB19石上	深鉢	胴～底	縄文LR・RLの崩れた羽状縄文、 連続刺突?、底部に指頭圧痕 口径 - /器高32.2/底径9.6cm	有	暗赤褐色	赤褐色	○	
72-2	SB19石上	深鉢	口～胴	縄文RL・LRの羽状縄文 口径32.6/器高20.0/底径 - cm	有	黒褐色	黒褐色	○	
72-3	SB19 床	深鉢	口～胴	口縁部に束ねた縄文原体を転がす文 様、胴上部に半截竹管による格子目 文、胴下部に縄文LR・RLの羽状 縄文 口径30.4/器高29.4/底径 - cm	有	鈍い赤褐	鈍い赤褐	○	尖底か?
73-1	SB19覆土	深鉢	口～胴	口縁部4ヶ所に刻み、縄文RL・LR の羽状縄文 口径20.8/器高17.0/底径 - cm	有	褐色	褐色	○	補修孔あり
73-2	SB19石上	深鉢	胴～底	縄文LR・RLの崩れた羽状縄文 口径20.8/器高13.6/底径8.0cm	有	黒褐色	褐色	○	
73-3	SB19覆土	深鉢	底 部	上げ底、底径9.2cm	有	褐色	黒褐色	○	
73-4	SB19 床	深鉢	口縁部	瘤状貼付文、梯子状沈線、波状口縁	有	鈍い黄橙	鈍い黄橙	○	撤入品か?
73-5	SB19覆土	深鉢	口縁部	瘤状貼付文、梯子状沈線、口唇部に突起	有	褐色	褐色	○	
73-6	SB19覆土	深鉢	口縁部	瘤状貼付文、縄文LR?	有	黒褐色	褐色	○	
73-7	SB19覆土	深鉢	口縁部	附加条2種あるいは正反の合の羽状 縄文、端部ループ、口唇部に刻み	有	鈍い赤褐	鈍い赤褐	○	

図版 番号	出土地点	器種	部位	器形および文様	織維	色調		焼成	備考
						外面	内面		
73-8	SB19覆土	深鉢	口縁部	附加条2種あるいは正反の合の羽状縄文、コンパス文	有	鈍い赤褐色	褐色	○	
73-9	SB19覆土	深鉢	口縁部	足の短いループ文、口唇部に刻み	有	鈍い赤褐色	黒褐色	○	
73-10	SB19覆土	深鉢	胴部	コンパス文、足の短いループ文	有	褐色	褐色	○	
73-11	SB19覆土	深鉢	胴部	足の短いループ文	有	暗赤褐色	赤褐色	○	
73-12	SB19覆土	深鉢	胴部	附加条2種あるいは正反の合の羽状縄文、コンパス文	有	褐色	赤褐色	○	
76-1	配石遺構1	深鉢	胴部	隆帯と沈線による文様 器高14.8cm	有	赤褐色	赤褐色	○	彫文土器か

## 2 四日市遺跡C地区 縄文時代石器観察結果一覧表 (図版掲載個体のみ)

図版 番号	出土地点	器種	材質	法 量				特 記 事 項
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
-13	SB19 床	石 匙	頁 岩	3.1	3.5	0.7	9.0	片刃
-14	SB19 床	石 匙	頁 岩	5.7	3.3	0.8	13.0	片刃
-15	SB19 床	刃 器	砂 岩	11.3	6.9	1.1	99.0	
-16	SB19覆土	石 鏃	黒曜石	2.2	1.5	0.3	0.5	凹基・先端部欠損
-17	SB19覆土	石 鏃	黒曜石	1.7	1.6	0.4	0.5	凹基・先端部欠損
-18	SB19覆土	石 鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.3	凹基
-19	SB19覆土	砥 石	安山岩	4.5	1.6	1.6	22.0	
-20	SB19覆土	磨 石	安山岩	6.3	3.9	2.3	65.0	
-21	SB19覆土	磨製石斧	?	9.3	5.6	2.7	170.0	両刃・欠損
-22	SB19覆土	敲・磨石	安山岩	10.5	4.3	2.7	140.0	
-23	SB19覆土	磨 石	花崗岩	11.7	6.8	4.1	380.0	
-24	SB19覆土	磨 石	花崗岩	13.8	5.5	4.3	490.0	
-1	SB19 床	磨 石	花崗岩	17.0	9.9	4.6	1080.0	
-2	SB19 床	磨 石	花崗岩	17.8	10.5	4.5	1200.0	
-3	SB19覆土	磨 石	花崗岩	7.5	7.0	4.3	275.0	欠損
-4	SB19 床	石 皿	花崗岩	8.4	15.9	5.5	810.0	欠損
-5	SB19 床	石 皿	花崗岩	32.0	24.5	7.2	8223.5	
-1	遺構外	瑛状耳飾り	滑 石	3.7	2.2	0.8	75.0	半欠

# 写真図版







四日市遺跡D地区（南から）

調査終了時の様子(1995、6)。遺構の検出は畑部分のみに限られたが、住居址22軒、土坑23基、石列、竈状遺構などを検出した。大規模は地整備事業に起因した4年間におたる四日市遺跡の発掘調査は今回で一応の終了を迎える。



遺構全体写真（左からI区、II区）

図版 2



縄文時代前期23号住居址 (南から)



23号住居址出土深鉢 (8-2)



23号住居址出土深鉢(8-4)出土状況



23号住居址出土深鉢(8-1, 5)出土状況



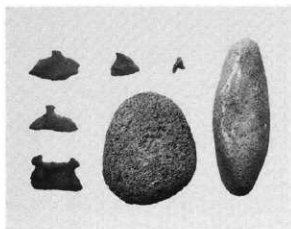
23号住居址出土石器群



縄文時代前期2号土坑 (南から)



2号土坑石皿 (11-2) 出土状況



縄文時代前期7号住居址出土石器群



遺構外出土塊状耳飾り (18-1) 出土状況



四日市遺跡出土块状耳飾り集成 (第62図参照)

C地区



縄文時代前期19号住居址 (南から)



19号住居址深鉢 (72-1) 出土状況



19号住居址出土深鉢 (72-3)



19号住居址出土深鉢 (73-1)



19号住居址出土深鉢 (72-1)



縄文時代中期配石遺構 1 深鉢埋設状況



配石遺構 1 出土深鉢 (76-1)



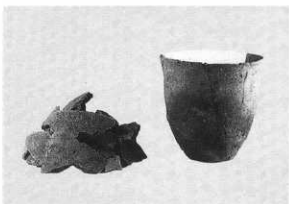
古墳時代後期18号住居址 (西から)



18号住居址出土皿 (23-1)



18号住居址出土鉢 (23-2)



18号住居址出土鉢 (23-3)  
鉢の中に左の破片が収納され、正位で出土した。興味深い事例である。



18号住居址出土甕 (23-5)



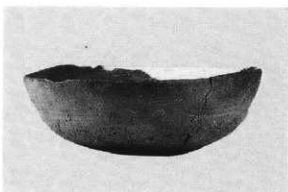
18号住居址出土甕 (23-6)



18号住居址出土甕 (23-7)



古墳時代後期22号住居址（西から）



22号住居址出土土坏（26-1）



22号住居址出土土坏（26-2）



22号住居址出土土坏（26-3）



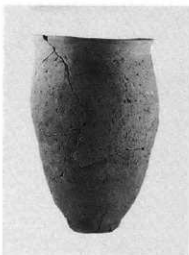
22号住居址出土土坏（26-4）



22号住居址出土小型甕（26-8）・高坏（26-5）



22号住居址出土鉢（26-6）

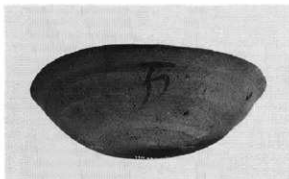


22号住居址出土甕（26-9）



22号住居址出土甕（26-10）

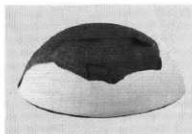
図版 6



平安時代10号住居址出土墨書土器「万」(31-31)



10号住居址出土墨書土器「田上」(31-22)



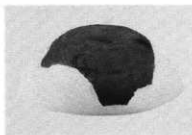
10号住居址出土墨書土器「田上」(31-21)



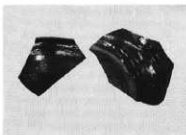
10号住居址出土墨書土器「田上」(31-41)



10号住居址出土墨書土器「田上」(31-38)



10号住居址出土墨書土器「？」(31-20)



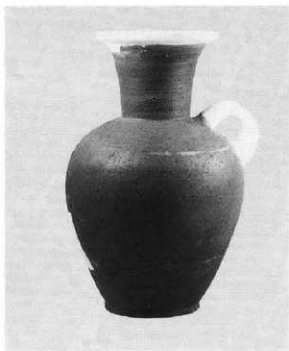
10号住居址出土緑釉陶器片(31-4-6)



10号住居址出土灰釉陶器壺(31-1)



平安時代6号住居址須惠器壺(34-1)出土状況



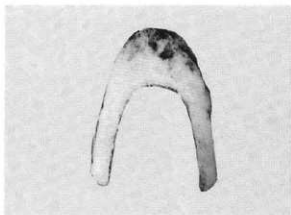
6号住居址出土須惠器壺(34-1)



平安時代10号住居址出土鹿角 (31-42)



平安時代15号住居址出土鎌 (38-1)・2号住居出土刀子 (30-11)



2号住居・10号住居出土鹿角線写真



15号住居址出土鎌線写真



平安時代5号住居址鹿角 (33-6) 出土状況



5号住居址出土動物遺存体



平安時代11号住居址集石の出土状況 (北から)



11号住居址完掘状況 (北から)

図版 8



平安時代26号住居址（南から）



26号住居址出土鎌（40-1）



石列遺構（東から）とその断面  
石列遺構と畝状遺構はおそらく同時に機能していたものと推定されるが、その用途、および時期は不明である。



石列遺跡と畝状遺構（西から）



現地説明会



発掘調査参加者



## おわりに

私にとって3冊目となる発掘調査報告書「四日市遺跡Ⅲ」がようやく完成した。この報告にて四日市遺跡の調査は一応の終了を迎える。必要条件すら満たせない成果であったが、特に縄文前期の土器群の検出は千曲川流域の該期の様相を知る上で好資料が検出できたと自負している。過去の2冊は締め切りとの闘いで随所に誤りがみられた。そんな反省もあって、この報告書では少しは成長した報告書作りを目指したつもりだが、そんなふうにまくいくものではない。「報告書なんてもんは理想どおりにはできるもんじゃない。」という先輩の言葉。前回にもまして、その言葉が身に沁みて理解できるようになった気がする。

「せめて中学生が理解できるような内容の報告書を作りたい。」いつもそんな思いを抱きながら報告書原稿を書くように努めてきた。しかし、記録保存という宿命。後世に事実を正確に伝えることが至上命題である以上、難解な言葉を使うこともある程度仕方のないことなのかもしれない。でも、「報告書が一部の人だけのものになってはいけない。たとえ1ページでもいいから一般の方に読んでもらうことがあってもいいんじゃないか。」最初のページはそんな意図で作成した。前作「四日市遺跡Ⅱ」では「小中学生のためのページ」というコーナーを作った。そのことについての叱咤激励はいろいろあったが、これからも一般の方にも読んでいただけるような報告書作りを目指していきたいものである。

この発掘調査にあたり、実に多くの方々にご指導、ご協力をいただいた。特に御長野県埋蔵文化財センター 菅田明氏には厳寒の真田町にわざわざおいでいただき、縄文前期土器についてご教示いただいた。また、坂城町教育委員会小平光一氏には休日の貴重な時間をさいて、遺物の撮影をしていただいた。最後になってしまったが、この場を借りて心より御礼申し上げたい。また、現場を手伝ってくださったシルバー人材センターのみなさんや、報告書作成の整理作業をお手伝いいただいたみなさんにも御礼申し上げたい。哀しいことであるが、四日市の第1次調査から参加してくれた老紳士がこの夏、他界された。現場で見せてくれたあの笑顔はもう見られない。心から哀悼の意を表したい。

自分は一人ではない。力を貸してくれる人たちがまわりに大勢いる。あらためて考古学をやっている仲間の大切さを考えさせられた。自分一人の力でできることは微々たるものなのである。

(調査担当者)

## 報告書抄録

ふりがな		よっかいちいせき さん						
書名		四日市遺跡Ⅲ						
副書名		町立さなだ保育園建設に伴う緊急発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		真田町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号		第9集						
著者名		和根崎 剛						
編集機関		真田町教育委員会						
所在地		〒386-22 長野県小県郡真田町大字長7199-1 ☎(0268) 72-2655						
発行年月日		1997年3月21日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よっかいちいせき 四日市遺跡 D地区	ながのひんちいせきさん 長野県小県郡 さなだ まち保育園建設 真田町大字長 あきよつちいせき 字四日市		89	36° 26'14"	138° 18'25"	1995年 3月7日～ 1995年 6月30日	約6,000㎡	町立さなだ保育園建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
四日市遺跡 D地区	集落址	縄文時代 前期中葉 古墳時代 後期 平安時代 (9末～10)	竪穴住居址 掘立柱建物址 土坑址 集石遺構 石列遺構 畝状遺構	22軒 2基 23基 1基 2本 23本	縄文土器 前～中期・晩期 打製石斧・石鏃・石匙 磨製石斧・磨石・石皿 袂状耳飾り 土師器・須恵器 墨書土器・へら描き土器 灰釉陶器・緑釉陶器 鉄製品(鎌・刀子・鋤先) 動物遺存体(骨・鹿角) 中世渡来銭	縄文時代前期中葉の住居址が検出され、有尾式土器や踏碓a式土器、西日本系の北白川下層Ⅱ式土器、袂状耳飾り等の遺物を出土した。  古墳時代後期の良好な一括資料が検出された。  平安時代の「田上」の墨書土器をはじめ、緑釉陶器や鉄製品などの遺物を出土した。		

## 真田町埋蔵文化財調査報告書

- |      |      |                      |   |
|------|------|----------------------|---|
| 1973 | 第1集  | 『日向畑遺跡』              | 中世の墳墓群の調査。五輪塔などが出土。   |
| 1975 | 第2集  | 『雁石・藤沢』(品切)          | 縄文後晩期の配石遺構、石棺墓を検出。称名寺式土器の優品、ミニチュア土器、土製耳飾などが出土。  |
| 1977 | 第3集  | 『山本畑遺跡緊急発掘調査報告書』(品切) | 平安時代の住居址2棟。須恵器の耳皿が出土。   |
| 1982 | 第4集  | 『真田氏城址群』             | 真田氏本城、横尾城などの概要調査報告書。  |
| 1990 | 第5集  | 『四日市遺跡』              | 縄文中期後葉・平安時代の集落址の調査。加曾利E式土器、唐草文系土器が主体。   |
| 1992 | 第6集  | 『真田氏館跡』              | 真田氏館跡の調査。厩跡、土塁等を確認。   |
| 1996 | 第7集  | 『四日市遺跡II』            | 縄文前期中葉、中期後葉、古墳時代後期、平安時代の集落址の調査。関山式土器、珧状耳飾り、加曾利E式土器、唐草文系土器などが出土。花積下層式土器の搬入品。古墳時代後期の一括資料など。 |
| 1996 | 第8集  | 『境田遺跡・西田遺跡』          | 古墳時代後期、平安時代の集落址の調査。石製模造品、石組みの煙道が出土。   |
| 1997 | 第9集  | 『四日市遺跡III』           |   |
| 1997 | 第10集 | 『町内遺跡発掘調査報告書I』       | 平成7～8年度試掘、立会い、現況確認調査の報告。  |

---

---

## 四日市遺跡 III

—町立さなだ保育園建設に伴う発掘調査報告書—

1997年3月21日 発行

編集 真田町教育委員会

発行 真田町教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社

---

---

